

524-403



1200501493425

支那時報叢書第五輯

蒙古來襲と一山國師の歸化

水野梅曉 著

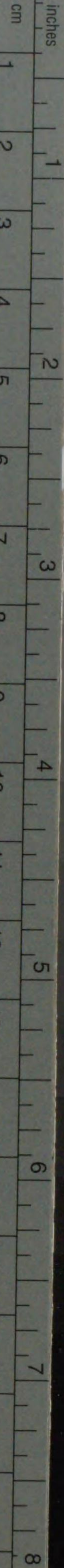
巻A
75
5

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak



Kodak Color Control Patches

Blue

Cyan

Green

Yellow

Red

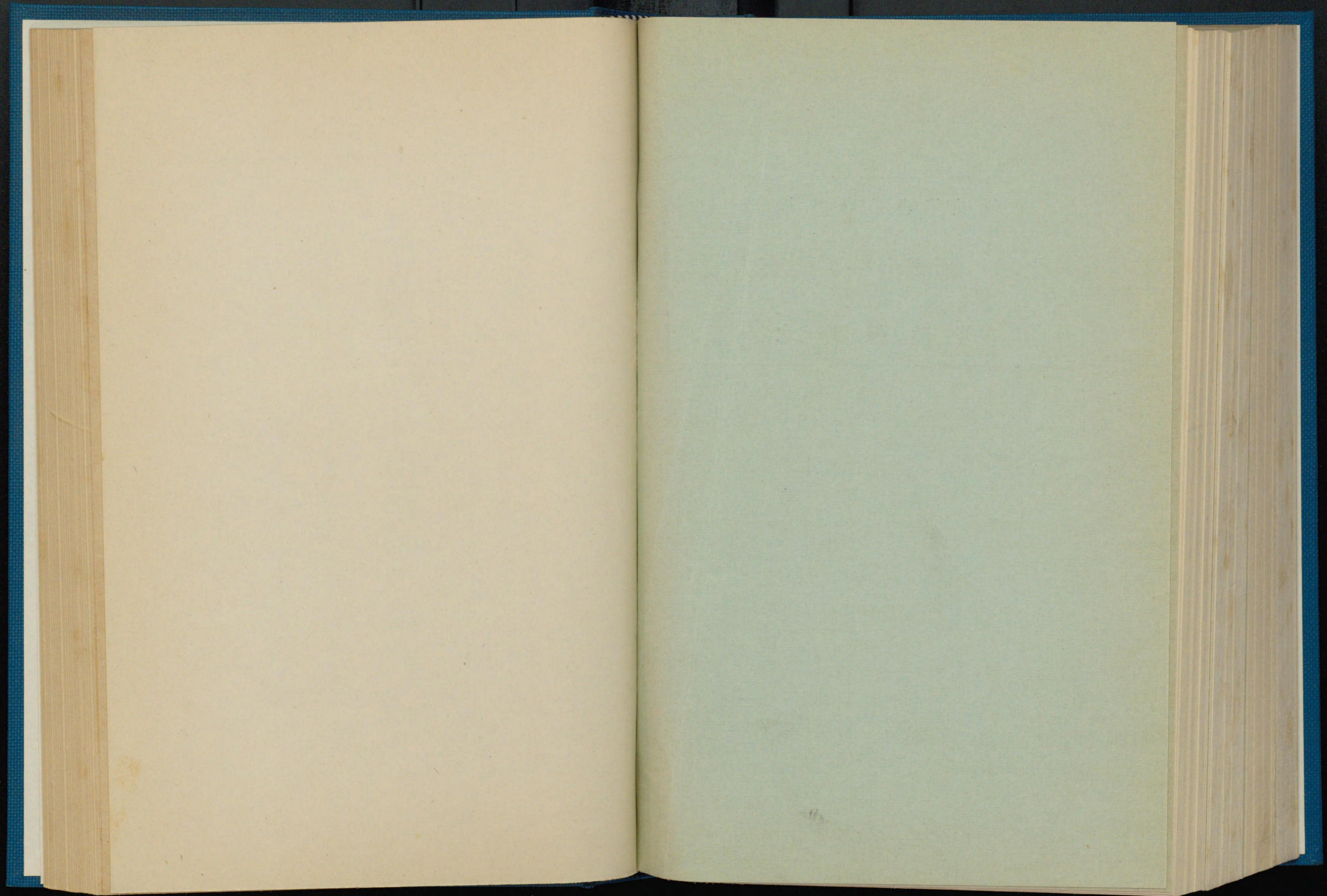
Magenta

White

3/Color

Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak

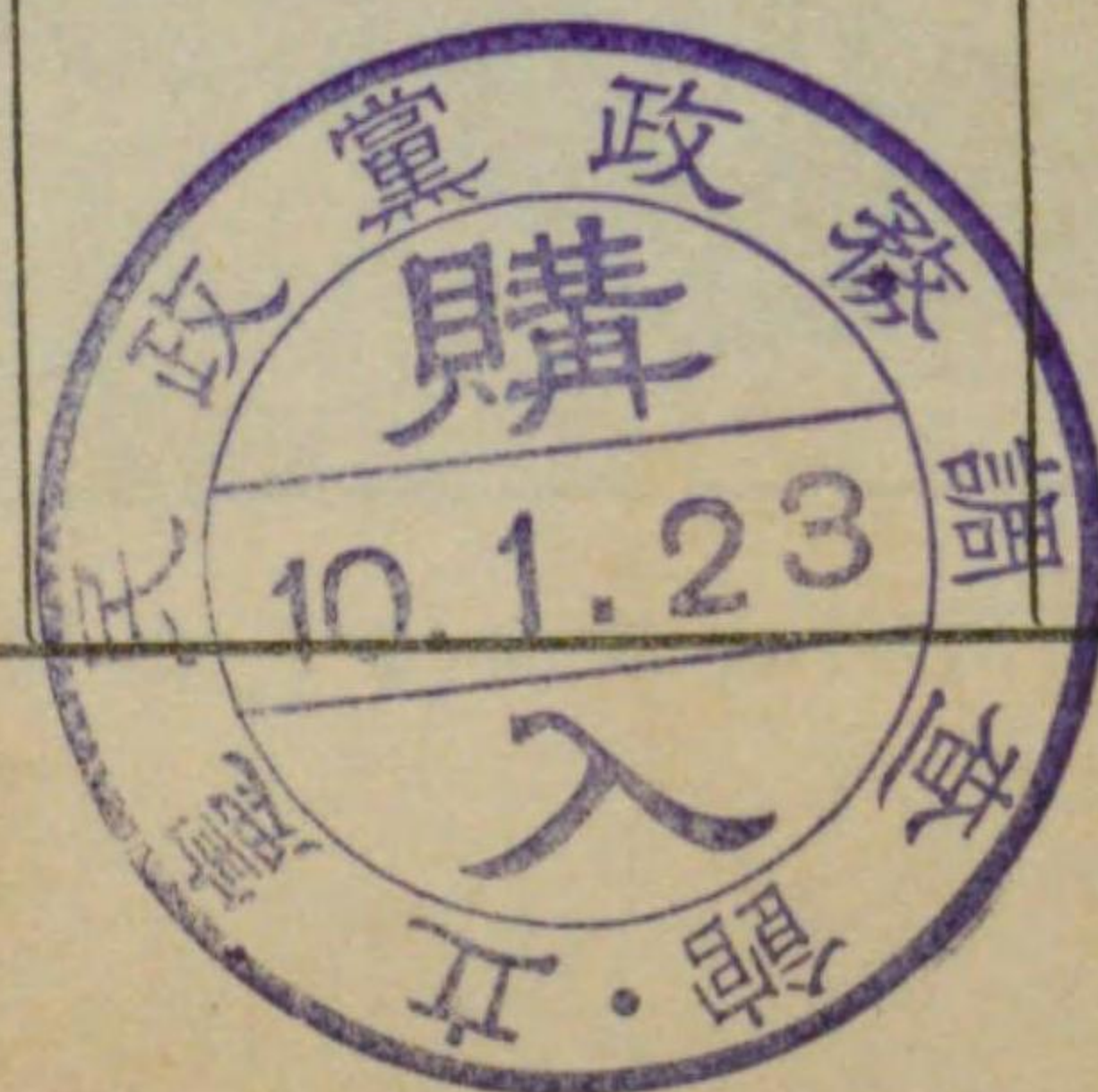


叢A
75
5

水野梅曉著

蒙古來襲と一山國師の歸化

支那時報社出版





南禪院に安置せる一山國師木像

木像國師一山

蒙古來變と一山國師の禪宗

支那の禅宗と一山



祭一山國師覺靈文

音民國十四年十一月十六日
 赴東亞佛教大會中華代表釋
 太虛釋道階釋持松釋弘傘釋
 佛智釋曼殊信士王一亭胡瑞
 林徐鴻寶韓德清韓哲武楊鶴
 慶張宗載甯達益李榮祥清
 劉鳳鳴及泛者釋滿智釋閑權
 釋鏡空釋覺力信士游如淵等
 二十一人具供清香淨水鮮果
 新蔬仰白於
 一山國師之覺靈曰維應真之
 有自今談天台之聖鄉曰教麟
 而宗風予傳佛燈為國光主淨
 慈之名刹予坐寶陀之法堂冀
 止法之弘通予兼玄駕於扶桑
 得傾國之歸敬予闡南禪之道
 場隆三顧於
 帝春予五十歲之德方我華夏之
 祥夏予會法友於東邦欽風烈
 之猶在予陳安詞以讚揚願舜
 靈之垂照予發聖教於八荒
 信士宗拜敬書

京都南禪院內建立せられたる一山國師碑文

蒙古來襲と一山國師の歸化

目次

第一章 蒙古來襲の動機と其準備……………一

一、はしがき……………一

二、蒙古遣使の動機と其年代……………二

三、至元一年より同十八年に至る大事記……………三

四、至元十九年より大徳三年までの大事記……………八

第二章 進退兩難に陥りたる高麗……………一四

一、蒙古襲來に關係せし高麗……………一四

二、高麗の傳達せる蒙古及高麗の國書……………一七

三、世祖高麗使臣を嚴責す……………一九

四、蒙古及高麗使臣の窮策……………二一

第三章 注目すべき高麗と蒙古の關係……………二六

一、忠烈王の繼位と高麗の態度一變……………二六

二、蒙古の對日策積極的と爲る……………二六

三、成功したる高麗の對蒙外交……………三〇

四、元高兩軍の日本侵入……………三三

五、世祖再舉を企てたるも成らず……………三三

第四章 一山國師來朝後の道化……………三六

一、一山國師の來朝と其使命……………三六

二、日本に到着せる一山國師……………四〇

三、一山國師の郷貫と修養……………四二

四、國師に對する後宇多法皇の叡眷……………四四

五、北條氏と國師の關係……………四七

第五章 一山國師の臨終と滅後の道價……………四九

一、國師臨終の至榮……………四九

二、示寂後の支那に於ける國師の道價……………五二

三、入國後の國師の家風……………五三

四、民國緇素の紀念碑建設……………五五

五、建碑の落成式……………五六

六、結語……………五七

附 錄

蒙古來襲に就ての研究……………故文學博士 八代 國 治……………五九

一、總論……………五九

二、文 永 役……………六〇

三、弘安役の一……………六五

四、弘安役の二……………七〇

五、弘安役の三……………八三

蒙古來襲と一山國師の歸化

水野梅曉

第一章 蒙古來襲の動機と其準備

一、はしがき

沙漠中の旅行者にも、時には一掬の清泉に逢着して、其の渴を醫するの樂みを得らるゝが如く、終年を紛雜極まりなき支那問題に没頭せる身にも、昨年は恰も沙漠中の旅行者か、思も設けざる清泉に逢着して、疲勞し切りたる頭腦に、一脈の清風を感受して無限の快味に打たれたると同様なる事件があつた。

故に予は其の感興の未た去らざる中に、其の事件の前後を廻ぐる日支關係を回顧せんと欲したるも、例に依りて目前に湧起する問題に追ひ廻はれて、十二分に其の感興に入り浸ることは不可能であつたが、せめては、其の問題の梗概のみにて之を録して、未だ一般に顯はれざる事件の前後を追懐することゝした。しかして、其の問題の範圍と輪劃とは、相當に兩國史上に亘りて廣汎なる地位を占むるものなれば、之を詳述すること能はざるは、筆者の遺憾とする所であるが、兎にも角にも、其梗概だけは、茲に之を記述することゝした。

而して其記述せんとする範圍は、先づ蒙古來襲の前後に於ける支那側の文献によりて、元僧一寧一山の來朝せる事情を述べ、之に對して龜山、後宇多兩皇が、世にも稀なる殊遇を垂れさせられたる事蹟に及び、最後に其事蹟に感激したる、現代支那の僧俗が其記念碑を建設したまでの顛末を略述せんとするものなれば、自然其の記述は直接一山國師と何等の交渉なき方面までに進み行く

ものであるが、之はかくして始めて一山國師の來朝せる理由と、其の時代の背景とを現はし得るものなれば、讀者も豫め其心を以て、之を通讀せられんことを祈るものである。

従つて先づ其の記述に入るに先きだち、本問題には最も必要な元史の世祖及成宗の本紀に就て、編年體に元朝對日本の遣使及出征に關する事件を列記し、然る後日本側の之に對する策應情況に及ばんとするものであるから、先づ其順序として左の各項を列記するとしてしたる旨を、諒とせられたいのである。

二、蒙古遣使の動機と其年代

抑蒙古の使節が、日本に來るとなりたる動機に關しては、元史日本傳の記述に依れば、蒙古世祖の至元一年高麗の趙彝等が、日本に通づべき使者を擇ばれたしとの上奏を爲したるに基つき、世祖は其翌至元二年、八月兵部侍郎黒的に命じ、虎符を給ふて國信使に充て、禮部侍郎殷弘に金符を給ふて、國信副使に充て、國書を持して日本に使せむることをし、黒的等をして高麗を經由せしめて、高麗國王より、其の樞密院宋君斐及禮部侍郎金贊等を偕はしめ、蒙古の使者黒的等を導きて、日本に往かしめたるに、日本は至らずと云ふて居るのを見ると、我國に於ける史上の大事件たる蒙古來襲問題の發端も、實は高麗の人等が蒙古の世祖に對する一片の空世辭が、終に日韓支三國に亘る大問題に變じたる事を知らねばならぬ。故に右の第一回の遣使に當りても、高麗國王(元宗諱は禎)は前記の如く樞密院宋君斐及禮部金侍郎等を派して、之が東道の勞を取らせて居るが、事件の進行と共に高麗は驚くべき迷惑を蒙つたものであつた。

然り而して其の至元一年は如何なる時代であつたかと云へば、元の世祖忽必烈が殆んど支那の中原の大半を席捲し。都を北京に移して大都と稱した年であつて、宋の理宗皇帝は、僅に江南半壁を保つに過ぎざりし時代なれば、支那の外藩は悉く世祖の膝下に懾服し、高麗も亦當然蒙古の願使に服従せざるを得なつたのは勿論のことであつた。而して我國にありては、龜山天皇の即位を距ると五年後の文永元年(皇紀一九二四年)に當り、北條政村が長時の後を繼ひて執權となつた年であつたが、之を我國の宗教界方面より觀察す

れば、禪門の勃興は此時既に一段落を告げ、淨土眞宗の開創者親鸞上人は、其前々年に於て示寂せられたるを以て、最も活氣旺盛なる行動を取りたるは、日蓮上人であつて、而も高麗人等が元の世祖に、日本に遣使を慫慂したる至元一年は、即ち日蓮上人は其流罪を許されたる年であつた。

以上を以て蒙古問題の發生したる動機と、其時代とを概言したれば、茲に世祖が日本に使を派したる、至元三年以下の事件を、年代順に列記して、之を概觀するの便に供することとした。

三、至元一年より十八年に至る大事記

一、至元一年高麗人趙彝日本に遣使の事を上言した。

一、同二年八月丁卯(十五日)兵部侍郎黒的、禮部侍郎殷弘を以て國書を持して日本に使せしめ、高麗人より之を導きて日本に至らしむることとした。

一、同四年六月乙酉(三日)黒的、殷弘、高麗の宋君斐、金贊より、日本に導達するに能はざりし旨を上奏したれば、詔を降して高麗王禎を責め、仍ほ其の官を遣はし、彼に至つて宣布せしめ、必ず要領を得るを以て期とせよと嚴命した。

〔註〕 此時北條村政執權たりしが、元使に對しては答へざりき。

一、同五年七月丙子(廿四日)高麗國王禎より其臣崔東秀を遣はし、兵一萬を備へ、船千隻を造りたりと上言したるを以て、詔して都統領脫染兒を遣はし往ひて之を閱せしめ、且黒山日本の道路を視察せしめ、仍ほ耽羅に命じて別に船百艘を造りて以て調用に備へしめた。

一、同年九月己丑(七日)河南に屯田を立て、黒的、殷弘に命じ、復た日本に使ひせしめ、仍ほ高麗國に詔して、人を遣はして導送必達を期せしめ、前回の如く稽阻するを得ざらしむることであつた。

〔註〕 此時龜山天皇文永五年なりしが、北條時宗再び執權となり、前年と同じく元使を卻ぞば、且蒙古の難を伊勢の太廟及全國の諸社に

告げたまふ事である。

- 一、七年二月丙申(廿三日)陝西宣撫使趙良弼に命じて、秘書監と爲し、國信使に充て、日本に使せしめた。
- 一、同八年二月庚寅(十七日)日本に奉使せる趙良弼より、書狀官張鐸をして、日本人二十六人と、同じく京師に至らしめ謁見を求めしめた。

〔註〕 此項元史日本傳に依れば九月二日樞密院より、趙良弼の遣はしたる張鐸は日本人二十六人と共に入京して謁見を求めしたとあるが、元史列傳の趙良弼傳に従へば、今津の守將より引ひて太宰府に至りたる記事あると同時に、最後に日本は使介十二人を遣はして入觀せしむるとし、仍ほ人を遣はし良弼を送りて、對馬に至らしめたる旨を記し、十年日本より歸りたる記事あるを見れば、何を信とすべきや不明なるも、藤原經長の記に據れば、文永八年十月二十三日蒙古の船今浦に至るとあるを見れば、元史の記事は正確なるべしと感ぜらる。

- 一、同年三月乙丑(二十一日)旨を中書省に諭して、速に日本の使人を遣還せしむべき旨を議せしめたるに、安童は良弼よりの請に依れば、金州の兵を移して、妄に日本人の疑懼を生ぜしむる勿れとあるも、臣等は思へらく、金州の戌兵は既に彼國の知る所なるに、若し復た之を移成するが如きは、恐くは時宜に適せざる可ければ、只來使に對して、此戌兵は耽羅の爲に暫く設けたるものなれば、爾等は疑懼を要せざる旨を開諭すべきものなるべしと上言し、帝は善と稱したと云ふことである。

〔註〕 此項を見ると我太宰府よりは、趙良弼の來使せしむる機會に若干人を遣はし、大都に入らしめて其設備の虚實を伺はしめたるものにして、元朝の方面でも、我に對する金州方面の戌兵には、或程度の注意を拂ひ、良弼は之を他に移して、我使人に見せしむるを欲せざりしに、安童等は既に我の知る所と爲れるものなれば、之は其儘にして耽羅に對する戌兵であるとの説明にて、之を糊塗せんとしたるが如き狀況眞に迫るものがあると言はねばならぬ。

- 一、同十年六月戊申(十四日)日本に使せし趙良弼太宰府に至つて還り、具さに日本君臣の爵號、州郡の名數及風俗土産の記録を

上つた。

- 一、同年九月甲申(廿日)襄陽生券軍大都に至りたれば、伯顔に詔して之を諭して其の械繫を釋き、死罪を免して自ら部伍を立て、日本を征せしむるを許るし、樞密院に敕して鎧仗を給せしめ、且各人に鈔を賜ふた。
- 一、同十一年三月庚寅(廿六日)鳳州經略使忻都、高麗軍民總管洪茶丘等に敕して、屯田軍及女直軍、並に水軍を合せて一萬五千人に將として、戰船大小九百艘を以て日本を征せしむることとなつた。

〔註〕 本年十月元兵壹岐對馬に寇し、宗助國、平の景隆等は戦死した。

- 一、同十二年二月庚戌(十六日)禮部侍郎杜世忠、兵部郎中何文著を遣はし、書を齎らして日本國に使せしめた。

又同年同月丙辰(廿三日)征東元帥府日本戰功者に錦絹、弓矢、鞍勒等を賞せられた。

〔註〕 今年は後宇多天皇即位の年であつて、建治と改元せられたるが、元使杜世忠等は四月到着した。然るに九月に至り時宗は元使を斬り、十一月には北條實政を筑紫の探題に任命して、邊防を嚴にした。

- 一、同十五年十一月丁未(廿二日)沿海官司に詔諭して日本國人の市舶と通せしめた。

〔註〕 此年は元が全く支那を土を統一したるを以て、我國の宋と交通せる船舶が、元境に入りて交易したるを機會に、世祖は我を懷柔せんと欲して、日本船舶との交通を公許したのであるが、我國は改元して弘安元年と稱せられた。

- 一、同十六年二月甲申(廿九日)日本を征する爲に使用する戰船六百艘の製造方を揚州、湖南、贛州、泉州の四省に勅命した。
- 一、同年六月壬午(廿六日)日本を征する爲に要する戰船の製造を高麗に勅命するに當り、其材料の便宜なる所を國王より上聞すべき旨を附言せられた。

- 一、同年七月壬戌(七日)日本及交趾を征する戰船の製造を命じた。

- 一、同年八月戊子(三日)范文虎は、臣詔を奉じて日本を征討中なるが、近頃周福、藥忠及日本僧を遣はし、詔を齎らし往ひて其の國を諭さしむるに、來年四月を以て回報せしむるとし、其の從否の明なるを俟つて始めて兵を進めんと欲す旨を奏し、且

舊戰船の中より用ゆるに足るものを選んで與へられんことを請ひたるに、之を許された。

〔註〕 此使節周福等は時宗の爲に斬られたのである。

- 一、同十七年二月己丑(四日)日本國は、國使杜世忠等を殺したるを以て、征東元帥忻都、洪茶丘自ら兵を率ひ、往ひて討たんとを請ひたるに、廷議は暫く之を緩にせよとの命を降した。
- 一、同年六月壬辰(七日)茫文虎を召して日本を征するを議せしめた。
- 一、同年七月戊辰(十三日)前の從軍を請ひたるもの及張世傑の潰軍を總べて日本を征せしめ、又茫文虎等に命じて罪を避けて、宋、蒙古、回々等に附屬せる軍を招集せしめた。

一、同年八月戊子(三日)前の從軍を請ひたるものを集めて軍と爲し、茶忽領に之を附して日本を征せしめた。

一、同年同月戊戌(十三日)高麗王勝來朝して、兵三萬を益して日本を征せんとする旨を奏した。

一、同年十月甲戌(十九日)開元路等の軍三千を集めて日本を征せしめた。

一、同年同月戊寅(二十三日)兵十萬を發し、茫文虎に命じて將と爲し、又右丞相洪茶丘を將として日本を征せしむる新附軍に鈔及甲を賜ふた。

一、同年十二月辛未(十六日)高麗國王勝は、兵萬人、水手萬五千人、戰船九百艘、糧十萬石を領して、日本に出征した。又右丞相洪茶丘等に戰具として高麗の鎧甲戰襖を給した。又諸軍に諭するに日本を征するの兵が、道を高麗に取るも其民を擾するとなからしむる旨を以てしたるが、更に高麗の中贊金方慶を以て、征日本都元帥密直司副使と爲し、朴球、金周鼎を以て管高麗征日本軍萬戶と爲し、並に虎符を賜ふた。

一、同年同月癸酉(十八日)高麗王軍を以て中書省右丞相と爲した。

一、同年同月甲戌(十九日)復た日本を征する軍官に百の佩金符を授けられた。

一、同十八年正月戊戌(七日)朔日忻都、洪茶丘軍に陸行を命じて日本に抵らしむることとし、兵甲は舟運に依らしめ、過ぐる所

の州縣よりは其糧食を給せしむるとし、茫文虎の言を用ひて、漢軍萬人を附したるに、文虎は更に馬二千を請ひ且つ禿失

忽思軍及回々砲を給せられんことを請ひたれば、帝は戰艇安くんぞ此を用ひんやと稱して給せられなかつた。

一、同年同月壬子(六日)高麗王勝使を遣はして、日本が其の邊境を犯すを以て、兵を遣はして之を追はしめられんことを請ひたれば、詔して金州隘口の戌軍五百を以て之に付せられた。

一、同年同月癸亥(十七日)日本を征する諸軍に鈔を賜ふた。

一、同年二月戊辰(廿二日)侍衛軍四千を發し完正殿に於て日本に出征する軍中の射を善くするもの及高麗の火長、水軍等に鈔四千錠を賜ふた。

一、同年同月乙亥(廿九日)茫文虎等に詔して日本を征するの意を以てし、軍律を嚴申せられた。

一、同年同月丙戌(十日)日本を征する軍が出發するに臨み、衣甲、弓矢等を給せられた。

一、同年四月壬子(十二日)日本に出征する河西軍に鈔を賜ふた。

一、同年六月壬午(六日)日本行省の臣使を遣はして、大軍は巨濟島に駐屯せるが、對島に至りたるもの報告に依れば、太宰府の西六十里の地點に、元と戌軍ありしが、今は既に出で、戰ひつゝあるを以て、宜しく其虛に乗じて之を搏かんと欲する旨を奏したれば、帝は軍事は卿等當さに自ら之を權衡すべき旨を詔せられた。

一、同年同月庚寅(十四日)阿剌罕疾あるを以て、阿塔海に詔して軍馬を統率して日本を征せしめられた。

一、同年八月壬辰(十六日)日本を征する軍の歸途に際しては、所在の官は之が爲に糧を給すべき旨を詔せられたるに、忻都、洪茶丘、茫文虎、李庭金、金方慶の諸軍船は、風濤の爲に激せられて大に利を失ひ、餘軍の歸つて高麗の境に至りたるものは、十に一二を存するものが明となつた。

一、同年十月壬寅(廿六日)日本に出征したる將校に衣裝、幣帛、靴帽等の物を賜ふた。

一、同年同月辛酉(十五日)日本を征して歸りたる侍衛新附軍に冬衣を給した。

- 一、同年十一月己巳(廿三日)高麗國金州等の處に鎮邊萬戶府を置ひて、以て日本を控制することしたるも、高麗國王が濱海の城を完ふして、日本を防がんとするの請は之を充されなかつた。
- 一、同年同月丁丑(一日)日本より歸りたる軍人にて後に歸りたるものに救して、沿海を分戍せしめられた。
- 一、同年十二月己亥(廿三日)日本中書行省を罷めしめた。

〔註〕 此れは即ち弘安四年の出來事であつて、五月には元兵壹岐を犯し、其翌六月には更に太宰府を犯したるが、閏七月初日夜半西北の大風起つて、海に満ちたる三千五百艘の戦船は、俄に漂蕩せられ、或は破れ、或は陸上に吹き上げられて、完全なるものは殆どなく死屍の水に浮ぶもの其の數を知らず、『文虎夢の諸將は各自ら堅好の船を擇んで之に乗じ、士卒十萬を山下に棄てたれば、衆議して張百戸を推して主帥と爲し、之を號して張總督と云ひ、木を伐り舟を作りて還らんと欲したるに、七日日本人來り戦ひたれば悉く死し、其餘の二三萬は處去せられ、八日博多に至りたるに、蒙古、高麗、漢人等は盡く殺され、新附軍は唐人と稱して、之を殺さずして奴とせられた。蓋し行省官と軍人と議事相下らず、故に皆軍を棄て、歸りたるが、之を久しうして、莫青と吳萬五とは逃れ歸りたれば、十萬の衆にして、還るを得たるものは三人のみであつた』と元史日本傳の記述である。しかし其日附を元史では八日朔日と稱し、我國の記録では閏七月初日となつて居るか、予は閏七月説を是なりと信するものである。但し其理由は我國の記録は何れも皆七月説のみであつて、八月説は見當らぬからである。

四、至元十九年より大德三年までの大事記

- 一、同十九年七月壬戌(十六日)高麗國王自ら船百五十艘を造つて、日本征伐を助けんとを請ふた。
- 一、同年九月戊寅(二日)衣糧を新附軍の賈裕に給せられた。此時祐は日本國焦元師の婚であるが、江南に於て船を造ることを知り、來つて動靜を伺ふものなれば、軍馬境を壓するに先きだつて降附したものであるとの言を爲した。

〔註〕 此項頗る不明であるが、思ふに我國邊境の奸雄が自らかゝる言を爲して、世祖の虛榮心を唆つて利をんこしたるか、或は名を邦人に藉りて支那の邊民がかゝる言を弄したるかは不明であるが、要するに世祖を愚にして、衣糧並に財物を得たることは事實であ

つて世祖の雄心は昨年の大敗にても、尙未だ消磨せざるを知るに足るものである。

- 一、同年十一月甲戌(廿八日)中書省の臣より天下の重囚中の謀反、大逆、祖父母を殺したるもの、父母を殺したるもの、妻の夫を殺したるもの、奴が主を殺したるもの、姦によりて夫を殺したるものを典刑に正すを除くの外、餘の死罪を犯したるものを許して、日本、占城、緬甸を征する軍に充てんとを奏して之を許された。
- 一、同二十年正月乙丑(一日)高麗國をして日本を征する軍糧二十萬石を豫備せしめ、阿塔海を以て舊に依つて征東省行中書省丞相とした。
- 一、同年同月丙寅(廿五日)衛軍二萬人を發して日本を征せしめた。
- 一、同年同月壬申(廿六日)蒙古軍より舟師を習ふもの二千人、探馬亦尺人の水戦を習ふもの五百人をして日本を征せしめた。
- 一、同年二月甲寅(八日)出征日本軍官に八忽帯を、軍士に銀鈔を賜ふた。
- 一、同年三月丁巳(十一日)女直が日本出征船を造ることを罷めしめた。
- 一、同年四月己未(十三日)御史臺の臣より、平濤にて船を造り、五台山にて寺を造り、南城にて新寺を建つる爲、伐木其他に凡そ四萬人を役しつゝあるを以て、之を罷めしめんを乞ひたるに、木を伐り寺を造る事は即ち之を罷めしむるも、造船の一事は之を省臣と議せよとの詔を降すと同時に、前後衛軍より自ら日本を征せんと願ふもの及五衛漢軍千餘を選留し、其餘は、新附軍と共に出征せしめた。
- 一、同年同月乙丑(十九日)石奴忽魯帶に命じ、揚州に往て囚を録し、江北の重囚を遣はして日本を征せしめた。
- 一、同年四月丙戌(十日)侍衛親軍二萬人を以て、日本を助征せしめた。
- 一、同年同月壬辰(十六日)阿塔海は軍官中より舟楫を習ふものを求めて、同じく日本を征せしめ、又元帥張林、招討張暄、總管朱清等に命じて高麗に行かしめ、高麗王を以て行省を領じて日本の事宜を規畫せしめた。
- 一、同年同月乙巳(廿九日)樞密院に命じ軍官を集めて、日本を征する事宜を議せしめたるに、程鵬飛は賞罰を明かにし、有功者

には軍前に於て駕驗を給し、班師の日に於て改授すべき旨を請ひたるに、帝は之に従はれた。又都にて造りたる回々砲を發し及其匠張林等を征東行省に付屬せしめた。

一、同年同月辛亥(五日)日本に出征する後衛軍に衣甲を、大名衛輝の新附軍に鈔を給した。

一、同年同月己未(十三日)五衛軍を免して、日本を征せしめた。

一、同年同月甲子(十八日)揚州の淘金夫を益都に移し、討東行中書省を立て、高麗國王と阿塔海と事を共にせしめ、高麗國軍に衣甲を給した。御史中丞崔或は「江南の地盜賊相繼で起るは、皆水手を拘らへて海船を造らしむるに依り、民其の生に聊んぜざるものありに由り、日本の役は宜しく、之を止むべきものである。又江南の四省に於て軍需を辨ずるには、宜しく民力を量り、土地に産せざるものを以て民に強ゆべきものではない。又物價を給するにも實價を以てし、水手を召募するにも、當さに欲する賃を與ふべきものである。かくして民氣稍蘇し、我力粗ば備はるを俟つて、復た東征を事とするも未だ晚しとはしない」旨を上奏したるに、帝は従はなかつた。

一、同年同月甲戌(廿八日)日本に出征せしむる重囚を發して、占城、緬甸等に往ひて從征せしめた。

一、同年六月戊子(十二日)日本を征するを以て、民間騷動し、盜賊竊發するを以て、忽都帖木兒忙古帶より、兵を益し寇を禦がんとを請ひたれば、詔して興國江洲軍を以て之に付した。

一、同年七月丙辰(十日)阿塔海に諭して日本を征する造船を少しく緩にし、所拘の商船は悉く之を還付せしめた。

一、同年八月丁未(一日)浙西道宣慰使弼より、近來日本を征する船五百艘を以て、之を民間に科したるに、民之を病ふるを以て、宜しく阿赤八の所有船を取り、修理して阿塔海に付し、以て民力を寛にすべきものである。又鈔を沿海の民に給して、水手を募るべき旨を奏したるに、帝は之に従はれた。

一、同年九月壬戌(十六日)黎兵を調して同じく日本を征せしめた。

一、同年十月庚寅(十四日)日本を征する新附軍に鈔三萬錠を給した。

一、同年十二月辛卯(十五日)茶忽所管の軍六千人を以て日本に出征する準備を爲さしめた。

一、二十一年正月甲戌(廿八日)王積翁を遣はし、詔を齎らし日本に使用して、錦衣玉環鞍轡を賜ふこととなり、積翁は慶元より海に航したるも、日本の近境に至り舟人の爲に害せられた。

〔註〕 至元二十一年は我弘安七年にして元寇擊破の殊勳者北條時宗が卒去したる年であるが、執拗なる世祖も先の大破を雪辱せんとして、大敗北以後歴年日本征伐を繼續したるも効果なきに鑑み、茲に又一面には干戈に代ゆるに玉帛を以て、我をして朝貢せしめんとするに至り、王積翁を附するに、我俗佛を尙まぶを以て、有名なる補陀の僧如智を遣はして來使せしめたるに、舟中に行くを願はざるものあり、共に謀つて積翁を殺したるあるが、其の遣使の動機は、准西宣慰使昂吉兒が「民勞するを以て兵を廢めん」とを請ひたるに由るものであつて、要するにこの心氣一轉は、後年一寧一山渡來の因となつたものである。

一、同年二月辛巳(五日)高麗をして日本を征する船を造ることを罷めしめた。

一、同年五月癸巳(十七日)江南の諸行省か日本を征す船を造ることを喜はざるを以て、按察使に詔して沮撓するとなからしめた。

一、同年十月甲戌(廿八日)行中省に詔諭して、凡そ日本を征する船及長年の水手は、官より鈔を給し價を増して之を募らしむ。

一、同二十二年四月丙午(九日)日本を征する船を以て、糧を江淮に運び、且之に水戰を教へしめた。

一、同年同月辛酉(廿四日)就羅の造る所の船百艘を以て高麗に賜ふた。

一、同年六月庚戌(十三日)女直の水達々に命じ、船二百艘及日本を征する追風船を造らしめた。

一、同年十月癸丑(十六日)征東行省を立て、阿塔海を以て左相と爲し、劉國傑、陳巖を並びて左丞と爲し、洪茶丘を右丞と爲して、日本を征せしめた。

一、同年同月丁卯(三十日)樞密院に勅し、膠萊諸處の漕船、高麗、江南諸處に於て造る所の海船、江淮の民船を拾備して、日本を征するの備と爲し、仍ほ勅して海に泛ぶるを習ふものを募つて土工と爲し、千人に至るものは千戸と爲し、百人を百戸となした。

一、同年十一月戊寅(十一日)使を高麗に遣はし、告ぐるに兵萬人、船六百五十艘を發して日本を助征せしめ、且近地に於て多く船を造らしむるを以てした。

一、同年同月癸巳(廿六日)勅して江淮の米百萬石を漕して海に泛び、之を高麗の合浦に貯へしめたるが、仍ほ東京及高麗に令して、各米十萬石を貯へて日本出征軍の用に備へしめ、明年三月を以て發し、八月を期して合浦に會せしむるを以てした。

一、同年同月丙申(廿九日)囚徒赦して其面に黥し、且宋朝時代に私鹽を販きて海道に習ふものを招きて水工と爲し、以て日本を征せしむることとした。

一、同年十二月占城より遁出歸りたる忽都虎、劉九、田二等を舊職に復せしめて、日本征討軍に従はしめ、阿塔海の日本征討軍には戰士萬人、回々砲手五十人を増加せしめた。

一、同年同月己亥(二日)樞密院より嚴に軍籍條例を立て、壯士及有力者を撰んで之に充てしめんを請ひたれば、樞密院に勅して先には日本を征する爲に、故らに五衛軍を遣はし、家に還つて治装せしめたるが、今は悉く壯士を選び正月一日を以て京師に到らしむべく、又江淮行者は戰船千艘を以て水戰を江中に習はしむべしとのことであつた。

一、同二十三年正月甲戌(七日)帝思へらく、日本は孤遠の島夷なるに、重く民力を困むべきものに非ずと爲し、日本を征する事を罷めと欲して、阿八赤を召して闕に赴かしめ、仍ほ雇庸せる民船を散せしめた。

一、同年九月壬辰(廿五日)高麗使を遣はして日本の俘十六人を獻じた。

一、同年十月壬戌(廿五日)高麗使を遣はして日本の俘十六人を獻じた。
〔註〕 此時帝の意漸く動きて、日本征討の軍を收束せんせらるゝに當り、高麗より日本の使を獻し來りたるを見れば、蒙古來襲の發端より日元の兩國は、終始高麗外交に纏弄せられたるが如き痕蹟ありて、一種異様の感打たるものありて、此使節が果して二十六年の事件を引起す伏線となつて居るとは、史家の注目を要する點である。

一、同二十六年正月戊申(廿日)參知政事張守智、翰林直學士李天英を高麗に遣はして、日本を征するの勸を督助せしめた。

一、同二十九年六月己巳(十一日)日人來つて互市したるも、風三舟を壞ぶり、惟だ一舟のみ慶元路に達した。

一、同年十月日本の舟四明に至つて、互市を求めたるが、舟中には甲仗器具なるを以て、異圖ある事を恐れ、都元帥府に詔して、哈喇帶をして、海道を防がしめた。

〔註〕 以上は至元一年より二十九年に至る約三十年間に亘り、元の世祖が如何に對日經營に向つて、高價なる犠牲を惜まざりしかを知る足るものあると同時に、蓋世の英雄にして而も歐亞の二洲を席捲したる新興帝國の大軍を、前後三十年に亘りて完全に防禦したる我民族の光輝は、實に燦として光を放つものであるか、其間に於て龜山、後宇多の二皇に繼ひて伏見天皇か踐祚せられたるは、至元二十四年にして、正應元年と改元せられたるは、其翌年二十五年であつた。而して弘安前後に於て最も力を盡くしたる、北條時宗は弘安七年に薨去し、其翌八年貞時執權となりたるも、對元政策には寸毫の動搖を見ずして、能く終始一貫祖國の光輝を辱めざりし偉蹟を回顧すれば、今尙昨の如き感激を生ぜしむるものがある。

一、元成宗大德三年(日本後伏見天皇正安元年)三月癸巳(一三日)妙慈弘濟大師江浙釋教總統補陀の僧一山に命じて、詔を齎らして日本に使せしめた。

〔註〕 一山國師派遣の動機は、大德一年江浙平章事也速答兒より、兵を日本に用ひんとを請ひたれば、帝は今は其時に非れば、朕徐に之を思はん詔せられたるが、三年に至りて僧寧一山を遣はし、妙慈弘濟大師の號を加へ、商舶に附して往て日本人に使せしたるに、日本人は竟に至らざりしこの記事が、元史日本傳にあるのを見るに、一山國師の派遣は、成宗の宸斷より出でたるものなる事が明かである。

一、同年五月庚子(三十日)征東行省を復した。
〔註〕 右元の對日態度は、既に一變せんせしに拘らず、再び征東行省を復活したるは、即ち後年の所謂倭寇と稱する一群が、屢朝鮮沿岸を侵したるを以て、朝鮮側より成宗を促がしたるより、かゝる死灰再燃の情態を變じたるものであるが、要するに三十餘年に亘る、元の對日態度は甚しく我國民の義憤を激成したるものにして、國家としては、何等の指揮命令を下さざるに、先づ朝鮮沿岸を侵かし、進んで南北支那の沿岸を侵すとなつたのは、全く執拗なる不絶の刺戟に依りて起りたるものである。

第二章 進退兩難に陥りたる高麗

一、蒙古襲来に關係せし高麗

元の世祖の虚榮心を煽りたるは、朝鮮人の趙葵なりしとは既に前述の通りであるが、予は更に一步を進めて朝鮮側の文獻に顯はれたる、蒙古襲来に關する事跡を一瞥することとした。東國通鑑の記事に依れば、高麗紀の孝順王元宗七年(元の至元三年、日本の文永三年)の項下に、左の如き文字がある。

七年冬十一月蒙古は黒的、殷弘等を遣はし來り、詔して曰く、今爾が國人趙葵來り告ぐるに、日本と爾が國とは近隣にして、典章政治は嘉するに足るものがあり、漢唐よりこのかた或は亦使を中國に通じたことである。故に黒的等を遣はし、日本に往かしめ與に通和せんと欲するものなれば、卿は其の去使を導達し、以て彼の疆を徹し、東方を開悟せしめ、風に向ひ義に慕はしめよ。茲の事の責は卿宜しく之に任じ、風濤の險阻を以て辭と爲し、未だ嘗て好を通ぜざるを以て解と爲すこと勿れ。恐らくは彼れ命に順はずして、去使を阻すことあらんも、卿が忠誠に托して之を見んとするものなれば、卿は其れ之を勉めよ。

と云ふ意味を述べて。世祖は必ず高麗をして之が導達の任を果さしめんとした。併し之は高麗としては頗る迷惑千萬なることであるから、高麗側では趙葵に對して左の如き評語を下して居る。

葵は本と咸安の人であるが、初は僧と爲り、後に俗に歸して叛ひて蒙古に入りたるものにして、能く諸國の語を解し、帝所(世祖)に出入して本國(高麗)を譏毀するを以て事とするものであると。

と稱して居るのを見ると、高麗としては實際趙葵の言動には頗る困惑したることは明かであるが、弱小國の高麗としては、之を如何

何ともするを能はずして、終に樞密院副使宋君斐、侍御史金贊に命じて黒的等と共に日本に往かしむることとしたのである。

右の如くにして、其翌八年(至元四年、日本文永四年)春正月に至りて、宋君斐、金贊等は黒的と共に、巨濟の松邊浦に至りたるが風濤の險を畏れて遂に中途より引還へしたれば、王は君斐を遣はし、黒的に隨つて蒙古に往かしめ、奏して曰ふには、

詔旨の諭する所に違ひ、使臣を導達して好を日本に通ずる爲、謹んで陪臣宋君斐等を遣はし、使臣に伴ふて往かしめ、巨濟縣に至りて遙に對馬島を望みたるに、大洋萬里風濤天を蹴るものあるを見て思へらく、危険かくの如くなるに、安くんぞ上國の使臣を奉じて輕々しく險を冒して進むべきものに非ず、又對馬島に至りたりとするも、彼の俗は頑犢にして禮義なければ、若し不軌あれば將に之を如何すべきやと爲して、共に還りたる次第である。

且つ日本は素より小邦(高麗以下之に倣ふ)と未だ嘗て好を通ぜざるも、但だ對馬島人とは時に貿易に依りて金州に往來せるのみである。而して小邦は陛下の踐祚以來深く仁恤を蒙るも、三十年來兵革の餘に於て漸く蘇息することを得て、綿々として喘を存するは天大の聖恩に因るものなれば、誓つて報効せんと欲するものである。若し勢の爲すべきものあるも、しかも、其心力を盡さずんば、必ず天日の如きものあらん。云々

と稱して、巧に其使臣の導達を避けんと欲したるも、世祖はかゝる朝鮮式の外交辭令には満足せずして、同年八月宋君斐と共に、黒的、殷弘に命じて、復た高麗に來らしめ、左の如き諭旨を降して王を責めたのである。

さきに使を遣はして日本を招懷せしめんと欲し、卿に委して嚮導せしめんとしたるに、卿は思はざるの辭を以て辭と爲し、遂に徒らに還らしめた。思ふに日本と既に好を通ずるものなれば、則ち彼は必ず爾が國の虚實を知るを以て、故らに托するに他の辭を以てしたるなるべきも、しかも爾が國人の京師にあるもの少からざれば、卿の計も亦疎なりと云はねばならぬ。且つ天命は誰にし難く、人道は誠を貴ぶものなるに、卿は先後言を食むこと多きも、之は宜しく自省すべきものである。

今日日本の事は一に卿に委するを以て、卿は朕が此の意を體して、日本を通諭して、必ず要領を得るを以て期と爲すべし、卿は嘗て聖恩天の如く大なれば誓つて報効せんと欲すと云へるとありしが、此が報効に非ずして何ぞや。

云々と云はれたれば、高麗王は、實に進退兩難のはめに陥りたる次第であつた。故に王の忠臣李藏用は、潜に黑的等に左の如き書
を贈つて、世祖が日本と通好せんとするの意を阻止せしめんとしたのであつたが、しかし之も亦其効果はなかつた。

日本は海を阻つると萬里なれば、或は中國と相通すと雖、未だ嘗て歲毎に職貢を修めざるも、中國も亦以て意と爲さず、來る時
は則ち之を撫し、去る時は則ち之と絶ち、思へらく之を得るも王化に益なく、之を棄つるも皇威を損するをなしたるのである。
然るに今や聖明上にありて、日月の照す所盡く臣妾たらざるはなく、蠢爾たる小夷敢て服せざるものなしと雖、しかも蜂蟄の毒
は、之を慮からなければならぬものがある。故に國書を降すが如きことは甚だ宜しからざるものである。昔隋の文帝の時、上書し
て曰く、日の生ずる處の天子、書を日の没する處の天子に致すと、其の驕傲にして名分を知らざるを斯くの如し、安くんぞ遺風の
存せざるものなからんや。

然かるにも拘らず。國書既に入りたるに若し不敬の辭ありとすれば、之を捨てんとすれば則ち大朝の累となり、之を取らんとすれ
ば則ち風濤艱險にして、王師萬全の地でない。而して陪臣は、固より大朝の政は寛厚なるものなれば、必ずしも之を致さんと欲す
るものに非らざるを知るも、偶人の上言するものありたるに因りて。姑く之を試むるのみとのことであるから、之を取捨するに彼
の如くなりとせば、尺一の封書は之を降ざるを以て得策とするものである。

しかしながら、大朝の功德の盛なるを聞けば、計るにまさに入朝すべきものなるに、而も尙到ざるは、蓋し其の海の遠きを恃む
からである。然らば則ち期するに歳日を以てし。徐に其至るや否やを觀て、至る時は則ち其内付することを奨め、否なる時は則ち
之を度外に置ひて、其の虫々として自ら相忘るゝの域に、自活せしむると云ふことは、實に聖人天覆無私の至極である。況や陪臣は
再び天陛を觀て、親しく容渥を承けたれば、今避諫にありと雖、犬馬の誠を萬一に効さんことを思ふからである。

との意を以てしたるは、蓋し藏用は日本は竟に至らざるを以て、累を我國(高麗)に及ぼさんことを恐るが故に、密かに書を黑的に貽
りて、之を世祖に轉聞を請ふて日本を招懷すること寤めしめんと欲したるに、此の事を先づ王に聞せざりしを以て、王は貳心ある
ものなりと疑ひて雲興島に配し、接伴舍人潘阜も亦之を告げざりしに座せられて、彩雲島に流さるとなり、潘阜が黑的と對座す

るの時に當りて、突然阜を曳き出したれば、黑的は怒つて之を詰問したるに、藏用が書を贈りたることに因りて、終にかゝる意外の
事件が持ち上りたる所以を知り、藏用の書を還へし、且つ我若し歸つて此書を奏し、幸に之を聽かるれば天下の福であるが、若し之
を聽かれざるとするも、汝が國に於て何の罪かあらんと云ふて、固く之を止めたるに因りて皆免るゝを獲たと云ふ悲喜劇さへも演
せられたのであるが、弱小國の悲しさは、かゝる苦心も何等の効を奏せずして、高麗は己むを得ず起居舍人潘阜をして、蒙古及高麗
の國書を齎らして日本に至らしむることとなつた。

二、高麗の傳達せる蒙古及高麗の國書

之を要するに高麗としては、至元一年より始まりたる日蒙問題も三年に至りて、黑的等一行の派遣となりたれば、四年の春に至り、
己むを得ずして其臣に命じ黑的等を導ひて巨濟島に至らしめ、萬里の波濤を望見せしめたるのみにて、上國の使臣を奉じて輕しく險
を冒かさしむべからずと稱して之を還へらしめたるに、世祖は之を責むると益嚴にして、今や之を如何ともする能はざれば、其の起
居舍人潘阜を遣はして蒙古の國書を日本に傳達し、且つ之に付するに高麗の國書を以てしたることは、前述の通りなれば、左に其兩
國の書を譯出することとした。

大蒙古國皇帝書を日本國王に奉る。朕惟みるに、古より小國の君も境土相接すれば、尙信を講じ睦を修めんことを務むるもので
ある。而るに況や我祖宗は、天の明命を受けて、區夏を奄有するを以て、遐方異域の威を畏れ徳に懷づくもの悉く數ふべがらざる
ものがある。

朕は即位の初に於て、高麗無辜の民が久しく鋒鏑に瘁るゝを以て、即ち兵を罷めて其疆域を還へし、其旣倪を反へさしめられたれば、
高麗の君臣感戴して來朝せるものなれば、義は君臣であるが、歡は父子の如きものであると云ふことは、計るに王の君臣も亦既に
之を知らるゝことなるべくして、高麗は實に朕が東藩である。

而して日本は高麗に密邇するを以て、開國以來亦時に中國に通じたるものなるにも拘らず、朕が躬に至りては、一乗の使の以て

和好を通ずることなきは、恐くは王の國は、未だ之を知ること審ならざる爲なるべしと爲し、特に使を遣はし書を持し、朕が志を布告せしむるものなれば、冀くは今より以後間を通じ好を結んで、以て相親睦せんと欲するものである。且聖人は四海を以て家と爲すものなるに、相通好せずんば、一家となるの理なくして、爲に兵を用ゆるに至るものである。然らば其の執を好む所であるかは、王其れ之を圖られよ。

と云ふものであつた。しかしかゝる國書に對しては、到底日本の忍ぶ能はざる所なるは、潘舍人の傳達を俟つまでもなく、高麗國の君臣は既に之を諒知せることなれば、高麗國王は一面には己むを得ずして之を傳達する意味を述ぶると同時に、一面には如何にもして、名だけなりとも、日蒙を通好せしめんと欲して、左の如き國書を附して居る。

我國は蒙古大國に臣事して正朔を稟くること年あるが、皇帝は仁明にして、天下を以て一家と爲し、遠きを視ること適かきが如く、日月の照す所、咸く其徳を仰ひて居る。

然るに今好を貴國と通せんと欲して、寡人に詔するに日本は、高麗と隣と爲り、典章政治は嘉するに足るものがあつて、漢唐より以下屢中國と通じて居る。故に特に書を遣はして往かしむるものなれば、風濤の阻險を以て辭と爲すこと勿れとて、其の旨嚴なるものあれば、茲に己むことを獲ずして其官某を遣はし、皇帝の書を持し命じて前去せしむるものである。

思ふに貴國は好を中國に通ずること代として之れ無きは無きものである。而して今皇帝が好を貴國に通せんと欲するは、其貢獻を利せんとするには非ずして、無外の名を以て天下に高からしめんと欲するのみなれば、若し貴國が之と通好すれば、必ず之を厚待するものなれば、何んぞ一介の使を遣はして、往て之を觀ざるのであるか、貴國は宜しく之を商酌せられたい。

と云ふ意味であつたが、固より日本としては始より小國の君でも接國と修好するものである。然るに我は區夏を奄有し乃至日月の照す所、悉く其威を畏れ徳に懷くものであつて、高麗は我の東藩であると云ふ事は、既に之を知つて居る筈であるが、或は之を知ぬかも知らないから、使を遣はし書を贈るのは、聖人の四海一家の言を實現せんとするものである、故に之に従つて通好せざれば兵を用ひても、必ず通好せんとするものであるから、自ら之を圖れと云ふものなれば、如何に武備一片の鎌倉幕府でも、之を相

手にしないは當然であるが、氣の毒なる高麗國は之を知りつゝも、蒙古皇帝の提灯持をすること、前述の如くなる上に、「貴國は中國に通好すること代として之れ無きはないのであるに、今は皇帝が貴國に通好せんと欲して居るが、之は其貢獻の利を欲するに非ずして、天下に外なきの名を高ふせんと欲するのみなれば、貴國が若し之と通じて一介の使を遣はせば、必ず之を厚待するであらふ」と云ふ花より團子の功利觀念を以て、我を動かさんとしたるも、幸に我國は利の爲に動くよりも、其の名を惜む爲に終に之に答へざりしは、實に尊ぶべき達見であつて、之が爲に我國史は汚かされずして今日に至りたるは、實に我等後昆として、時の當局に對して感謝するの外はないのである。

三、世祖高麗使臣を嚴責す

右の如く、高麗は日本の對蒙關係は意の如くならざることを承知の上で、潘阜を遣はして、蒙古の國書及自國の國書を贈りたるものなれば、十一月に至り其旨を蒙古に報告する爲、安慶公涓を遣はし併せて新年の祝辭を述べしめたるが、安慶公は其翌九年（至元五年文永五年）二月歸來するに當り、王には西錦一匹、曆日一道を賜ふた。しかし世祖は趙懿の讒を信じて其怒未だ解けざる以て、涓に勅して左の如き嚴責を加へられた。

前日爾が國の奏す所に對して、朕は今之を詳説するから、爾は詳に之を聽くべしとの前提の下に、爾の國が日本と交通せることは、爾が國の此に來つて住せるものゝ知らざるものなきに、爾は前日何を以て未だ嘗て交通せずとて朕を欺きたるか、爾等が奏する所は皆是れ妄説なれば、必ずしも之に答へ得ないであらふとのことであつた。

然るに六月に至りて、蒙古は吾都止を遣はし、李藏用と偕に來つて戰艦軍額を閱せしめた。而して之は先きに藏用が世祖に謁したる時に於て、世祖は

朕爾が國に命じて師を出して戦を助けしむるとの語を爲したるが、爾等は師を出して何國を討たんとするをや知らざるべきも、是は即ち宋と日本とを討たんとするものである、朕は今爾が國を觀ること猶一家の如くなれば、爾が國に難あれば之は之を救ふも

のである、然れば朕が不庭の國を征するに當りて、爾が國も亦師を出して、之を助くるは當然なれば、爾は歸つて王に詔して戰艦一千艘を造り、其大きさは米三四千碩を載すべきものたるを要する。

爾が國は宋に行くには風順なれば、兩三日にして至るべく、日本に至るには、朝に發して夕に達することを得るものである。

このことであつた。故に高麗は六月に蒙古の檢閱使を迎へたるが、七月には關門使孫世貞、郎將吳惟碩を使はして蒙古の節日を賀する當り、更に起居舍人潘阜を遣はして偕行せしめ、左の如き上書を爲さしめた。

向まに臣に詔して日本を宣諭せしめられたるを以て、臣は即ち陪臣潘阜を差し、皇帝の璽書並に臣が書及國贖を齎らして、往ひて其國を諭せしめたるに、即ち王都に納れずして西偏の太宰府に留置せられたるもの、凡そ五ヶ月なりしが、其館待甚だ薄く詔旨を授けたるも報章なく、又國贖を贈りて多方告諭したるも、竟に聽がずして逼り送られ、要領を得ずして還りたるは、未だ聖旨に副はざるを以て、惶懼實に深きものがある。

然るに十月に至りて蒙古は、更に明威將軍都統脫朵兒、武德將軍統領王國昌、武略將軍劉傑等を遣はし來つて軍額戰艦を閱せしめたる機會に、日本の水道黒山島を視察せしめ、又耽羅に於て別に船百艘を送らしむることしたるに、更に又十一月には蒙古より兵部侍郎黑的、禮部侍郎殷弘等を遣はし來りて、詔して曰ふには、

向きに卿に委するに使者を導達して、日本に送至せしむることを以てしたるに、卿は即ち辭を飾るに風浪險阻にして輕々しく渉る可らずと稱して中道より還りたるが、其の言若しかくの如くなりとすれば、潘阜等は何に由つてか達することを得たるか、今潘阜の奏する所に由れば、爾等は日本に至り逼られて送還せられたとの語があるが、此も亦信を取るに足らない。故に今使を遣はして往かしむるは、必達を期する爲であるから、卿は當さに重臣をして導達せしめ、前の如く稽阻することを致す勿れ。

このことであつた。故に高麗は首鼠兩端を抱きて、彌々彌縫すればするほど、抜き差しのならぬ破目に陥りたるは、實に同情に堪へない次第であるが、終に又己むを得ずして、同年十二月知門下省事申思恂、侍郎陳子厚、起居舍人潘阜を遣はし、黑的、殷弘と偕に

日本に至らしめた。

四、蒙古及高麗使臣の窮策

かくして幾度海を渉るも要領を獲られざるを以て、蒙古及高麗の使者は、其翌十年(正元六年、文永六年)三月對馬島に來りしが、日本人は之を拒んで入れざりしを以て、塔二郎、彌二郎の二人を捕へ還り、四月申思恂を參知政事に昇任せしめ、黑的と偕に日本人二人を蒙古に送らしめたるに、彼等の一行は六月大都に着したるを以て、七月には蒙古より干婁等を遣はして、日本人を送還せしめたるが、世祖は日本人二人の俘を赦す時に當り、喜んで左の如き獎詞を高麗の使者に賜はつた。

爾が王は祇んで朕が命を稟け、爾等も險難を以て辭と爲さず、不測の地に入りて生還復命したる忠節は、嘉すべきものである。

とて厚く匹帛を賜ひたる後、日本人に對しても亦左の如き意味を詔して、之を懷柔せんとした。

爾が國は中國に朝覲すること由來尙しきものである。今朕が爾が國の來朝を欲するは、汝に逼らんとするには非らずして、只名を後世に垂れんとするのみである。

とて賜與のもの甚だ多かつたと云ふことである。

〔註〕從此先き我國にては既に蒙古と決裂の決心を爲し、且つ之を宗廟及全國の神社に報告して、國難來に對する覺悟を定めたるをば、既に大事記の項に於て一言したるが、我國の肥後(帝王編年集成)に依れば、文永六年三月七日九州より六波羅に達したる報告に「蒙古國の使人二人、高麗國の使人四人及從者七十餘人對馬に到着した」とある。此時北條時茂、北條時輔は六波羅にありて、關西方面の事を專斷し居れる時なれば、之に對して始めて彌四郎を遣はしたとあるから、塔二郎、彌二郎の二人は、果して生擒せるものなるや、將た又此時當局が虚實を伺はしむる爲に、同行せしめたるかば大なる疑問である。何となれば越へて二年後の八年には趙良弼の書狀官張鐸と二十二人(又は二十人)が大都に至りて、世祖に謁見したる記事と思ひ合せば、恐くは六波羅の命によりて使節と共に、蒙古に赴きたる彌四郎の一行を指してかくば、捏報して世祖を欺きたる高麗及蒙古使節の窮餘の策ではないかと思はれる。

其理由として今一つ考へ得らるゝをば、高麗人は既に崇神天皇(皇紀六二九年)以來任那府を朝鮮に開きたる、我國の威力を知悉し居るを以て、如何にもして之が領導を役を免れんか欲する上に、蒙古平原より來り始めて海を渉る使臣は、足未だ朝鮮を出でざるに既に意氣阻喪せるもの

なれば、七十人内外の團隊にて、二邦人を生擒するが如きとば、萬あるまじきと察せらるゝものなれば、著者は特に一言を發して、讀者の注意を喚起し、併せて識者の教を請ふとされた。

其翌十一年(至元七年文永七年)十二月高麗の世子諶が蒙古より還るに際し、斷事官不花孟棋等を遣はし、俱に來りて左の如き詔旨を傳へしめた。

爾が國は南宋及日本と交通しつゝあるも、卿は小人の言に惑はざれて、有を以て無と爲さんとするも、今年は行省に於て、南宋の商船及日本人が嘗て爾が國と往來するものあるの狀を獲て、朕に告げたるを見れば、朕は卿が平常の言は皆詐りなることを知つたとの實語を加へて、歴次の彌縫を素つば抜かれたるも、之に答える所を知らざりしと云ふことである。

其翌十二年(至元八年、文永八年)正月樞密院使金鍊を遣はして、蒙古に至らしめて通婚を請ひ、且日本及南宋と交通する所以を辯明せしめたるに、蒙古よりは更に秘書監趙良弼を遣はし來りて、左の意味の詔書を降した。

朕惟みるに、日本は昔より好を中國に通じ、又卿が國と密通せるを以て、嘗て卿に詔りして去使を導達して信を講じ睦を修せしめんとせしに、彼の疆吏の爲に梗せられて、明かに朕が意を諭することを獲ざる中、林衍が故を以て之を顧みるに暇あらざりしが、今は既に爾が家を輯すんじたるを以て、復趙良弼を遣はして、國信使に充て必達を期せしめ、忽林赤、玉國昌、洪茶丘を遣はし、兵に將として送つて海上に抵らしむるを以て、使者の還るまでは、暫らく金州等に駐屯せしむることとしたれば、其所需の糧餉は卿より官に委して、彼地に赴き近き處より供給すべく、又船艦を集めて金州に待たしめて稽緩置せしむること勿れ。

とのことであつたが、茲に又かゝる難題の外に、更に復一難を加へたはる、即ち高麗王は其詔書を郊外に迎へたるに、王が之を拜せざりしことを、洪茶丘に發見せられたるを以て、又中書省の牒を持ち來りて、王の叔父百壽を索めて質とすることを要求したれば、王は百壽を樞密院副使致仕に拜して將さに之を遣さんとしたるに、茶丘は故さらに遷延せしめて偕に去らしめざりしが、之は世祖の激怒を發せしめて高麗を平呑せんと欲したからである。此時趙良弼は又王の倖臣康見紹と偕に行かんとしたるを以て、王は已むことを得ずして之に従ふた。

然るに蒙古は三月に至りて忻都及史樞等を遣はし、阿塔海に代らしめ、且左の如き詔を降した。

朕は嘗て信使を遣はして日本を通諭したるに、思はざりき執迷固閉にして、善言を以て開諭し難きは、此れ卿の知る所の如くなれば、今は將に彼を經略せんと欲して、有司に勅して卒を發し、屯田して以て進取の計を爲さんとするは、即ち他日爾の國の轉輸の勞を免ぜんとするからである。依つて復た使を遣はし書を持して先づ招懷の意を示すものなれば、卿は心を悉くし慮を盡くして方略を裨賛し、以て成ることを期して朕が意に稱へよ。

其翌十三年(正元九年、文永九年)正月趙良弼は日本より還りて、書狀官張鐸をして日本の使十二人を卒ひて元に行かしめたることは、既に述べた通りであるが、其翌一月には世子諶は元より還るを得た。しかし夫迄には、世子の奄留甚だ久しきを以て從者皆は之を憂ひて、東歸するが爲に、世子をして東征の事を以て左の如く、帝に請はしめた。

惟みるに日本未だ聖化を蒙らざるを以て、戰艦兵糧を要するものなれば、若し之を臣に委せらるれば、庶幾くは勉めて心力を盡して、少しなりとも王師を助けんと欲するものである。

と云ふものなりしを以て、世祖は斷事官不花、郎中馬降を遣はし、世子を護して國に還へらしむると共に、中書省より移牒して舟糧を具して征戰を助けしむることとした。其時國人は世子の辨髮胡服するを見て、皆嘆息して泣を下したるものもあつたと云ふことである。

同年四月には、日本よりの使者十二人が、元より還るに當りて、此時世祖は張鐸に命じて、譯語別將徐備、校尉金貯等が日本に使して功ありしに依り、宜しく大職を加ふべきものであるとて、備を拜して將軍と爲し、貯を部將と爲したるが、高麗よりは、御史康之群を遣はして日本の紅を護りて歸國せしめた。越へて七月日本の船が金州慶尙道に至りたるに、安撫使曹子一は、交通の事が發覺して讒を元に獲らんことを恐れ、密に國に還らしめたるに、洪茶丘は此事を聞いて子一を嚴鞠し、其辭を修飾して帝に奏し遂に之を殺したと云ふ悲劇も行はれた。

其翌十四年(至元十年、文永十年)三月元は復た趙良弼を遣はし、日本に行ひて招諭せしめたるに、良弼は太宰府に至りたるも國都

に入ることを得ずして還つた。

〔註〕良弼が來航に關しては、我國の記録（吉續記）には「文永八年十月二十三日、是より先き蒙古の船が今津郡（太宰府を距る二里の地にある）に著して、牒狀を奉りたれば、此事によりて東使（鎌倉）洛に入りて、西園寺亞相に謁したるに、亞相は之を仙洞（後嵯峨）に執奏し、即夜之が對策を協議せられ、使者は牒狀を國都に持參すべしと主張したるも、之を拒みて入都せしめずして其寫を太宰の少卿より、關東に送りたるに其意は牒狀を投ずるも報なし、故に今回は十一月を以て期を爲し、若し答報なくんば、兵船を饋すべしとのであつた。故に衆議は之に報すべしとのにて、菅原の長成は答書を帥したるも、終に報せざるとした」との旨を記してあるのを見ると、文永八年に良弼が來りし當時の状況を知らるに足るものにして、十年の來航も其結果に於て前と異らざるは當然のものである。しかし元史に依れば良弼と太宰少卿との應酬は、兩者共に猛烈なるものありし如くなるも、今は蒙古が幾回來航するも我は全く石の如くにして、卷く可らざるものがあつたこと云ふを知らねば足るものなれば、之には之が引用を略して置く。

其翌十五年（至元十一年文永十一年）元は使を遣はして、軍五千人を發して日本を助征することを命じた。時に洪茶丘が領せる全羅道の造船に對する供給不足なる爲、東京晋州道内の米を輸して之を與へたるも、王は徭役の煩と轉輸の弊を患ひ、且農務に防げなるを以て、上將軍李汾禧を遣はし往ひて茶丘に説かしめたれば茶丘も之を然りとして、每船五十人を留めて其餘は悉く歸農せしめた。四月諫議大夫郭汝弼を遣はして元に往しめ、左の如き上書を爲して、高麗の苦痛を訴へしめた。

向きに洪茶丘より書を金方慶に移して、船三百艘に對して梢工水手一萬五千人を要するを以て、先づ之を備へよとのことであるが、小邦は地偏して人稀なるに加へて喪亂の後を承け、先きに耽羅を征したる兵卒萬師は、悉く造船の役に赴きつゝあるものなれば、今日日本を征する師は、何の地に於ても之を出すことを得ない。故に小邦は北界の諸城及西海道の逃租の民にして、往ひて東寧府に投ずるものは皆操舟に習ふを以て之を刷還せしめて軍額を補せんと欲するも、庚午（十一年）より今に至る五年間に亘るゝ軍糧を供給せしが爲め、早くも既に乏絶せるに、今又屯田及洪管軍及福州留守軍の軍糧を、悉く陪臣及百姓をして供給せしめんとするも繼くと能はざるを以て、特に聖慈を蒙り米二萬碩を運んで之を補せられたく、又糧價として絹匹を賜ひたるは報謝するに階無き次第であるが、公私共に既に財力竭き、又造船に因つて農は業を失ひつゝあるを以て、絹を賣つて糧と爲さんとするも、恐らくは意の如くならざるへし、

云々との上奏を爲したるも、八月には元より日本征討都元帥忽敦を派遣し來りたるを以て、十月には都督使金方慶を中軍に將とし朴之亮、金忻、知兵馬事任愷を副使と爲し、樞密院副使金忻を左軍使と爲し、章得儒、知兵馬事孫世貞を副使と爲し、上將軍金文庇を右軍使と爲し、羅裕、朴保、知兵馬事潘阜を副使と爲し、之を三翼軍と號して、元の都元帥忽敦、左副元帥洪茶丘、右副元帥劉復亨と共に蒙漢軍二萬五千人の外、高麗軍八千人、梢工及引海の水手六千七百人が戰艦九百餘艘に分乘して、合浦を出發したるが、越へて十一日の後、船は壹岐に到着した。

此時日本兵は岸上に陣したれば朴之亮等が、之を追ひしを以て降を請ひたるも、復た戰ひければ、茶丘は朴之亮とは千餘級を擊殺し、舟を三郎浦に捨て道に分つて進み、殺傷頗る多かりしに、日本兵は突如として中軍を衝きしを以て、方慶は一喝矢を抜ひて鬪聲大喝したれば、日本兵は避易して走つた、しかし朴之亮、金忻、李唐公、金天椽、申突等は殊戰して死したるも、日本は大敗して死屍麻の如きものありしに依り、都元帥忽敦は蒙人戰に習ふと雖、何を以てか之に加へんやとの語を發して賞讃せられたが、暮に及んで諸軍を解き、方慶は、忽敦、茶丘に向つて、我兵は少なるも、己に敵境に入りければ、人自ら戰を爲すものなれば、明晨舟を焚ひて、准陰背水の故智に仿ふて、決戦せんと欲するものであると請ひたるに、忽敦は小敵の堅なきは大敵の擒である、瘦兵に策つて大敵と戰ふは完計でない。故に軍を回するに如かずと云へる時に、劉復亨も亦流矢に中つて、先づ舟に乗りたれば、遂に兵を引ひて還らんとしたるに、偶夜大風雨ありし爲、戰艦は多く巖崖に觸れて敗ふれ、金先は水に墜ちて死した。

〔註〕右は朝鮮側の記録（東國通鑑）であるが、併し冷靜なる眼を以て之を見る時は、我兵が直に降服を申込んで而して後戰ふが如きとは到底邦人の氣象としてあり得べき事でもなく、又朴之亮が千餘級を斬つたこと云ふとも正直には受取難き説である。況や此役に於て彼等の自白せる所に依るに、副使朴之亮、金惟、左軍使金先等の高麗の重鎮が戰死したる外、元の右副元帥劉復亨が流矢に中つて先づ舟に乗つたこと云ふのを見ると、要するに蒙古高麗聯合軍の三萬九千七百人を以てした。第一回の壹岐侵入は失敗に終つた事は明かであること云はればならぬ。而して其失敗の材料は、彼等自らが供給して居るものである。

第三章 注目すべき高麗と蒙古の關係

一 忠烈王の繼位と高麗の態度一變

前項各節に於て歴述せるが如く、高麗は孝順王一代を通じて、心にもなき蒙古の御先き棒となつて日蒙の間に周旋したる結果が十五年十月（元の至元十一年、日本の文永十一年）の壹岐侵入の聯合軍となつたのであるが、しかし其結果は既述の通り多大の損害を蒙つて退却し、孝順王の世は茲に終局を告げて、蒙古に質と爲つて居つた世子諶が繼立して、忠烈王の元年となつたのは、即ち正元十二年であつた。王は嘗て世祖の公主に尙したるを以て自然に蒙古に對する態度は一變して、反日親蒙政策を取るに至つたのである。

然るに我國に於ても、文永十一年を以て龜山天皇は位を後宇多天皇に譲られ、其翌年は改元して建治元年と稱せられたるが、對蒙政策には何等の變化なくして、同年四月に渡來せる元使を鎌倉に送り、九月に至りて時宗は之を斬つたと云ふ有様なりしも、世祖の對日熱は未だ衰へざるを以て、忠烈王は元年正月門下侍中金方慶、大將軍印公秀を遣はし元に向ひて左の如き上奏を爲し、高麗の堪へ難き事情を訴へしめた。

小邦は近來逆賊（李衍の内亂を指す）を掃除する爲め、連年大軍の糧餉を戸毎に收めたるに加へて、倭邦を征討するが爲に、戰艦を修造せしを以て、壯丁は悉く工役に赴き、老弱は僅に耕種すと雖、早早晚水の禾は場に登らざるを以て國用彫弊するのみならず、兵に傷づつき水に溺るゝもの多くして、遺囀ありと雖、歲月を以て其蘇息を期すべからざるものあるに、若し復た事を日本に擧るゝが如きことありとすれば、戰艦兵糧は實に小邦の能く支ふる所に非らざれば、伏して望むらくは俯して誠款を收められんことを

と云ふ意味を述べて、婉曲に日本征討軍に對する負擔を免れんとしたるも、三月世祖は日本を宜論する爲め禮部侍郎殷世忠、兵

部郎中何文清を遣はし來らしめたる以外に、九月には又使を遣はして劍工古内と共に來らしめたるが、之は古内と云ふ劍工が世祖に對して、高麗より海を涉らずして直に日本に至るべき路があると云ふ出鱈目を並べたるを信じて、高麗に來らしめたのである。右の如き情況なれば、高麗としては之を如何ともするに能はずして、十月には金光遠を以て慶尙道の都指揮使と爲して戰艦を修せしめたるが、之は世祖の日本討伐の熱が收熄せざる結果なるとは云ふ迄もない所である。

其翌二年（正元十三年、日本建治二年）七月王は中贊金方慶、直史館文璉を遣はし、元に向ひて世祖の萬壽節を賀すると共に、中書省に對して左の如き上書を爲さしめた。

達魯花赤繼歴は、國綱を張り、明敏清平なれば、百姓之を徳とせるを以て、瓜期已に満ちたるも、留任せしめられんことを乞ふと同時に、陪臣金方慶は官軍を佐けて珍島、耽羅を攻破し、日本を征するに及んで戰艦を修して功あり、且兵を海上に掲げて實に力ありしを以て、虎頭金牌を與へて來者を勸められんことを乞ふ。

云々と云ふ意味を以てしたるが、要するに此上書は、高麗が從來の日蒙關係に對する中間的の態度を棄て、元の世祖と事を共にするの決心を爲したる、一の劃時代的の表示であつて、今後は世祖の使喚もあつたが、時には世祖の使喚を待たずして、自ら進んで世祖の對日熱を煽るが如き有様となつて來たと云ふことを注意せねばならぬ。

三年十二月世祖は復た日本を征せんと欲して、茶丘を以て征東都元帥と爲したと云ふことは、大事記中にも既に之を言及したる通りであるが、其翌四年（元の至元十五年我國の弘安元年）七月には忠烈王は自ら元に向ひて、世祖に謁して、

日本は一の島夷であるにも拘らず、險を恃んで庭せず、敢て王師に抗するものなれば、臣願くば、船を送り殺を積んで、罪を聲らし討を致さんと欲す。

と奏したれば、世祖は之に對して「王は邦に歸り宰相と熟計したる後、人を遣はして之を奏せよ」との答を發せられるを見れば忠烈王の折角の忠義振も、餘りに好くは買はれなかつたと云ふことも明白であると同時に、忠烈王の態度一變の裏面には、蓋し又己むを得ざる自己防禦の苦しき立場があつたと云ふことも、決して之を看過すべからざるものがあつたのである。

何となれば、忠烈王は世祖の萬壽を祝するの機會に、『元が合浦鎮に駐屯せしむる戍軍を留めて、以て倭寇に備へられたし』と請ひたるに、世祖は『何ぞ必ずしも之を留むるを要せんや、若し能く汝が民に害なくんば、汝は自ら汝が國人を用ひて鎮戍すべきものにして、倭寇は畏るに足らないものである』との旨を述べて、忠烈王の請は之を顧みられなかつた。

〔註〕朝鮮の歴史には、從來も倭邊に寇す云々の文字が現はれて居るも、要するに今後類々として行はれたる、復讐的意味より變じて掠奪的の八幡船を化したる所謂倭寇とは、其の撰を異にするものであつて、後世の倭寇は壹岐侵入以後を以て劃期的に擡頭したる復讐なるは、實に注目し得るものである。故に元より明の中葉まで朝鮮及支那沿岸に跋扈したる倭寇は、蒙古高麗の聯合軍が之を挑發したるものに加へて、我國は南北朝の分立を爲り、支那、朝鮮は易姓革命が行はれたる等の事件が、因と爲り果となりて、終に畏るべき慘劇と爲つたものである。

同五年（至元十六年、日本弘安二年）七月世祖は、使を日本に遣はしたるを以て、王は舌人郎將徐贊及梢工上左等三十人を遣はして之を同行せしめたるに、倭人は皆之を殺したるも、惟だ上左等の四人が逃れ還りたれば、郎將池瑄を遣はし元に往ひて之を奏せしめた。

二 蒙古の對日策積極的と爲る

同六年は即ち元の至元十七年にして、我國の弘安三年なれば、我國としては、實に有史以來の國難に直面せんとするの秋であつた。故に時宗は既に昨年より大兵を筑紫に遣はして蒙古に備へたるが、本年は又西海一帯の兵備を修めて、寸毫の隙もなき手順を定めたのである。蒙古の方面に於ても、屢々其の使節を斬られたる爲め、之を黙止するを得ずして、何等かの手段を取らざるを得ざる事となつて來た上に、搗て、加へて、本年五月には日本人が朝鮮の固城及漆浦に侵入したるに依り、朝鮮にては韓希愈を遣はして海島を防守せしめ、又忽赤巡馬の諸領府二百人を選んで、慶尙全羅道等を分守せしめたるに、日本人は又合浦に寇したるを以て、大將軍印侯、郎將池瑄を遣はし元に往ひて之を告げしめ、八月には王自ら元に往ひて、世祖に謁して急を告ぐると云ふが如き事態となつて來た。

故に世祖は忻都、茶丘、茫文虎等に東征の計劃を授けたるに『茶丘は臣若し日本を破らずんば、何の面目ありて復た陛下に見へんや』と稱し、茶丘、忻都は蒙古、高麗、漢人を合せたる四萬の兵を率ひて合浦を發し、茫文虎は蠻軍（湖南の永順江西福建其他南部支那の兵十萬を率ひて、江南を發して俱に壹岐に會し、兩軍の集合を俟つて直に日本を衝けば、城下の盟を爲さしむるは必せりと云ふ計劃を立てたのであるが、十一月には高麗より又右承旨趙仁規、大將軍印侯を遣はし元に往ひて、中書省に左の如き上書を爲さしめた。

小國は已に兵船を備ふるも九百艘と、兵士一萬、梢工、水手一萬五千人、兵糧は漢榘を以て量れば十一萬石の外、器械に至るまで皆備へたれば、希くは力を盡くして以て聖恩に報ぜんと欲するものである。

旨を述べたる外に、更に頃日行省の牒狀を得たるに、將に明年五六月を以て發船せんとの事であるが、我國は毎年五六月の候は霖雨止まざる上に、西風多くして海道霧暗きを以て、之が爲に若し或は時日を淹留して發船せずんば、恐くは軍民の糧食に缺乏を來すが如きとなきを保せずして、利害輕きに非らざれば、豫め先づ申覆せずんば、後に或は闕誤を生ぜん』云々と稱して、高麗の氣候と用兵の關係を述べたる後、従前の戰役に對して未だ元廷の論功行賞を見ざるに依り、之を請ふて左の如き上書をした。

小邦の軍官は、曾て珍島、耽羅、日本の役に當りて、累りに戰功あるも、未だ官賞を蒙らざるを以て、前功を追録せられんことを請ふ。

之に對して、元廷にては、十一月趙仁規、印侯の歸國に際し、世祖は左の如き論功行賞を行はれた。

高麗國王を冊して、開府儀同三司、中書左丞相、行中書省事と爲して印を賜ひ。

金方慶を以て管領高麗軍都元帥と爲し、朴珠、金周鼎を昭勇大將軍左右副都統と爲し、並に虎頭金牌の印を賜ひ。

趙仁規を、宣武將軍、王京斷事官、兼脫々禾孫と爲して、金牌の印を賜ひ。

朴之亮等の十人には、武德將軍、管軍千戸と爲して金牌の印を賜ひ。

趙扑等の十人を、昭信校尉管軍總把と爲して、銀牌の印を賜ひ。

金仲成等二十人を、忠顯校尉管軍總把に任命せられた。

しかし右の如き論功行賞を終りたる元廷は、高麗に對して「日本を征する戰艦軍糧は、高麗をして一切を幹辦せしむるとし、元帥忻都、右丞洪茶丘をして往ひて之を監督せしむるとした」故に高麗の君臣は、拱手して命を聽きたるも、其力は之に堪へざるを以て、李恒は王に言して、具に狀を以て之を帝に奏せしめたる結果、即ち是の命ありたるものにして、萬戸、千戸、百戸も俱に皇帝の宣命と符信を受けたるものなれば、今後は忻都等が自ら専らにするを得ざることとなり、東征に對する供給の策は勿論、軍機の措置は皆李恒より出づること爲つたのである。

〔註〕由來高麗は、日元兩強の間に介立して、事々兩強に牽制せられて、其自由を得ざるが如き中にありても、李恒の如き策士が顯はれて、始は蒙古の爲に使喚せられつゝありしが、終に逆に世祖を使喚して一方の強たる日本を倒さしめんさしたるは、實に朝鮮外交の妙技を發揮したるものであつて、史を讀んで茲に至るま、蒙古の來襲であるか、朝鮮の來襲であるのかを疑はざるを得ざるものがあると同時に要するに、朝鮮外交の妙味は、將さに明年を以て其最高潮に達するものである。

三 成功したる高麗の對蒙外交

忠烈王の即位七年は、即ち元の至元十八年にして、我日本の弘安四年であるから、恰も本年より之を起算すれば、星霜六百四十七年を隔したる國民的に思出の深い年である、而して屢々述べたる通りに、高麗は左せんと欲するも得可べからず、右せんと欲するも得べからざる苦境の中にありて、竟に夷を以て夷を制するの苦肉策を取るに決意したるもの歟、抑も又兩虎相戦はしめて、其間に若干の安息を得んと欲したるものなる歟は、吾人が今更深く之を研究するの要なきも、要するに高麗王は世祖の東征問題を藉りて、始めて積年の屈辱を免れ、元の使節と交換せし對等の禮を變じて、南面することを得たのである。故に吾人は暫らく其方面に筆を染めて、讀者と共に朝鮮外交の妙處を味ふのも、一興であると思はれる。

故に少しく其の當時の狀況を回顧すれば、忠烈王の六年五月日本人が漆浦方面に侵入したるを機會に、使を遣はして元に至らし

めて、征東問題を力説したる以外に、從來の征東役に關係したる功勞者に恩賞を乞ひたることは、既に述べた通りであつたが、其結果多數の高麗人は、何れも皆皇帝の宣命を奉じたる萬戸、千戸となりたるを以て、元より派遣せられたる忻都、洪茶丘等も、從來の如く事を專にするを得ずして、軍需の供給及軍機の措置も皆高麗人李恒が之を行ふこととなつたとて、高麗人は大に其の對元外交の成功を喜んだものであつたが、七年（至元十八年日本弘安四年）正月には、知密直司事韓康を忠清交洲道等に遣はして軍馬及馬糧を備へたるに、金方慶は元より還りて世祖が方慶に賜ひたる弓矢劍白羽の甲を齎らすと共に、世祖より弓一千、甲冑一百、緇纓二百を東征の諸將士に分賜せられたるを以て士氣大に振ふた。

此の機を逸せずして、三月には金方慶を元帥とし、朴球、金周鼎等の萬戸をして師を率ひて合浦に向はしたる外、元よりも忻都、洪茶丘を派遣し來りて、王に「駙馬國王の宣命と征東行中書省の印」を賜ふたのであるが、此の宣命は兼て忠烈王より「臣は既に公主に向するものなれば、請ふ宣命を改めて、駙馬の二字を益されたし」との上奏を爲したるに依り、世祖は之を許して右の如き宣命を降したのであるが、此の宣命の降下は、實に高麗王としては、元より往來する文武官に對して、極めて有利なる立場を有するものとなつたものであつて、高麗人の喜びは尋常一様のものでなかつたと云ふとは、東國通鑑に左の如き記事があるのを見ても明らかである。

王は忻都、洪茶丘と事を議するに當り、王は南面し、忻都等は東面することあつたが、元に事へてよりこの方、王は元使と相見ゆるには、東西相對することとなつてゐた。然るに今は忻都、茶丘等も、敢て抗禮せざることとなつたと云ふので、國人は大に之を喜んだ。

故に從來高麗王は、元使に對して南面し、元使は東面したるものが、何時とはなしに、王と元使とは東西より抗禮することとなりしものが、今回の宣命に依り、忻都、茶丘等も敢て王と抗禮するを得なくなつたと云ふので、高麗の君臣は、之を喜んで對元外交の成功を喜んだのも、無理のないことである。

右の如く駙馬の宣命を受けたる高麗王は、忻都、茶丘等が合浦に赴きたる跡を追ふて、四月丙寅（二十日）合浦に幸して自ら東

征軍を督勵した。

四、元高兩軍の日本侵入

かくして準備彌々整ひたる元高の兩國聯合軍は、日本征討の意を決し、元の方面では死刑囚すら之を釋放して、日本征討軍に従軍せしめたることは、大事記中に記載したる通りであるが、高麗にても父母の喪にあるものと雖、五十日を経過したるものには從軍を命ずると云ふ有様であつて、今回の日本侵入は從來の侵入に比すれば全く眞面目のものであつた。

右の如くして計劃せられたる聯合軍が、日本に向つて合浦を出發したるは、五月戊戌（二十一日）であつたが、其の陣容は元の方面では忻都、洪茶丘、高麗方面では金方慶、朴球、金周鼎等であつて、舟師を率ひて出征したるが、辛酉六月十五日には、忻都、洪茶丘、金方慶等は日本の世界村の大明浦に至り、通事金野をして檄諭せしめんとしたるに、金周鼎は先づ船を下つて鋒を交へたれば、諸軍皆舟を下つて戦ひ、郎將康彦、康師子等之に死したるを以て、諸軍は壹岐島に向ひたるに、船軍の百十三人と梢工三十六人は、風に遭ふて之く所を失ひたるを以て、郎將柳庇を元に遣はして此旨を報告せしめた。

六月金方慶、金周鼎、朴球、朴之共、荊萬戸等の諸將は、日本兵と力戦して三百餘級を斬りたるも、日本兵が突進し來りたる爲聯合軍は潰走し、茶丘も亦馬に乗つて走りしが、王萬戸が横より出で、之を撃ち、五十餘級を斬りたれば、日本兵も漸く退き、茶丘は僅に免るゝを得たるも、翌日復た戦ふて敗績した。

右の如く聯合軍の成績甚だ振はざるに加へて、陣中に疫病流行して病死するもの三千餘人に及びたれば、忻都、茶丘等は連戦の不利なる上に、茫文虎等が期を誤りて到らざるにより、軍を回さんとの議を發したるも、世祖の詔旨に江南軍と東路軍は、六月十五日前に於て必ず壹岐に會せよとのとなりしに、今に至るも南軍來らずして、我等の軍のみ先づ到り、大に戦ふと數度に及び、船は腐朽し、糧は盡きんとするものなれば、之を如何にすべきやとの輒論も盛に起つて來た。

しかし其時は、方慶等も黙して居つたが、十餘日の後又議すると初の如くなりしを以て、方慶は我等は既に聖旨を奉じて三月の

糧を資らし來り、今尙一箇月の糧が存在せるものなれば、南軍の來り合するを俟つて之を攻むれば必ず島夷を滅し得るものであると稱したれば、諸將も復た敢て言ふものなくして、茫文虎の來り合するを俟つこととなつた。既にして文虎は戰艦三千五百艘と、蠻軍十餘萬を率ひて來りたるも、適々大風に値ふて蠻軍は皆溺死し、死屍は海潮に隨つて浦に入り、浦は之が爲に塞がり、死屍を踐んで往來することが出來ると云ふ有様であつた。

此時元は復た兵三百騎を合浦に遣はして之を成らしめ、高麗王も亦巳酉の日を（二十四日）以て、合浦より戰場に來りたれば、金方慶は郎中將朴晷を元に遣はして軍狀を奏せしめ、一面には軍を太宰府に進めて、交戦の後退きたるが、蠻船五十艘又來り會して戦に加はりたるを以て、又使を元に遣はして所獲の甲冑、弓矢、鞍馬等の物を獻じたれば、世祖は晷を拜して攝將軍となした。

以上は前後十數年を費やし、兵卒十數萬と戰艦四千餘艘を以て日本に侵入したる大事件も、要するに大風一過して戰艦兵卒は、玄海の波に漂はされて何時とはなしに收熄を告げたのである。故に高麗王は、秋八月左司議潘阜を遣はして、元の敗將忻都、洪茶丘、茫文虎等を送つて元に還らしめたるが、元軍の返る事を得ざるものは無慮十有餘萬に達し、高麗軍の還らざるもの七千餘人であつた。依つて元は鎮邊萬戸府を金州に置き、虎符及印を賜ふて張舜龍に命じて、宣武將軍鎮邊軍總管と爲し、以て日本の入寇に備ふることにしたのである。

（五）世祖再舉を企てたるも成らず

右の如く五月の出征以來、聯軍は六七の二ヶ月を費やして、既に其の膽を奪はれつゝも、茫文虎が率ゆる十萬の大兵を頼りとして、辛ふじて之を支へつゝありしに、秋七月初の大風の爲に茫文虎の軍は三千餘艘の船と共に覆没したるを以て、再び其陣形を整ふる事能はずして、敗將は高麗の使節に送られて元に歸りたる有様なれば、最早東征は諦めてもよき筈なるに、世祖の一代を通じて之を思切る事能はざりしは、元及高麗人民の爲には不幸此上もなき事柄であつた。

八年（至元十九年、日本弘安五年）正月元は詔して征東行中書省を罷めたるを以て、高麗にても征東軍の戦死者に對しては、怠

納税金の免除令を出したるも、三月には上將軍印侯をして合浦を成らしめて、日本の入寇に備へたるに、四月に至りて元は、復た不八思、馮元吉等を遣はし來りて兵糧を調査せしめたる結果、東征の爲に高麗の費したる、兵糧は十二萬三千五百六十餘石であつたと云ふ事が明になつた。然るに元は更に、兵三百四十人を遣はして合浦に駐屯せしめ、京城には六十人を派して不虞に備へしむ等、絶へず種々の口實を設けて東征に關する未練を残したる行動を取りつゝありしが、六月に至り蠻軍の總把沈總等の六人が日本より逃れ歸りたるを以て、上將軍印侯、郎將柳庇を遣はして、元に送還せしめた。

かくして元と高麗とは、東征の善後策に就て終始互に相往復しつゝある中、十一月に至りて元は又秀渾、賀仲謙等を遣はし來りて、日本を征する爲の戰艦の修造を命じたれば、王は知密直司事、宋瑋を慶尙道に、同知密直司事金伯鈞を全羅道に、密直副使禹濬冲を忠清道に、判司宰金之卿を西海道に遣はして、之を董督せしめた。

九年（至元二十年、日本弘安六年）正月高麗は、郎將仇千壽を遣はし元に往ひて東征の緩急を覘はしめんとしたるが、平樂州に至りて戰艦を修造せるを見て中途より引返へした、然るに元は復た東于、李良茂を遣はし楮織三千錠を資らして、戰艦を修造するの費に當てしめたるが、爾後高麗人瘦弱なるものより、世祖に對して、

蠻夷を以て蠻夷を攻めしむるは、即ち中國の勢である。故に請ふ高麗の蠻子を以て日本を征せしむべきものなれば、今後は蒙古軍を遣はす必要なく、又高麗をして兵糧二十萬石を備へしめられたい。

と奏したるに、世祖は之を許したれば、高麗人禿魯花、金忻等は、颯に對して『汝は高麗の黔弱資諒が孫ではないか、然るにかくの如く自ら汝の國家を破壊せんとするは何んぞや』と問ひたるに、颯は之に答へて『汝が國王は泥にて塑成せる佛像であつて、尹秀、李貞、元卿、朴義、梁大善等は、民を剝くを事とするものなれば、其取る所は以て軍糧を備ふるに足るものがある。故に我は左右の姦臣を去り、三韓を正さんと欲するを以て、かゝる言を爲すのである』と云ふ意味を答へたと云ふことである。

然るに三月元より還りたる中郎將柳庇は、世祖は江南軍を徵集して、八月には日本を征せんとしてゐるとの情報を齎らしたれば、高麗側は再び東征軍の準備に着手せしに依り、人民は往々屋を撤して逃るゝものあるを以て、逃亡者の田を奪ふて從軍者に與へ

之を知りて告げざる隣舍には白金一斤を課するとし、又其逃亡者を隠匿したるものには二斤を課するとし、人を遣はして諸道に督促せしめたのみならず、諸王族及百官、工商、奴隸、僧徒に至るまでも嚴令して軍糧を納めしめ、又使を諸道に遣はして軍器戰艦を修造せしめたるも、事容易ならざりしを以て、副知密直司事趙仁規を遣はして元に赴き、軍糧を減ぜんを請はしめたるに、世祖は人の言を聞くに、汝が國は糧二十萬石を備ふるに足ると云ふことであるが、若しも誠に之を充たすと能はざれば、力を量つて之を爲せよ

とのことであつたにも拘らず、四月には元より塔納阿字禿刺を遣はし來りて、戰艦の修造を督せしむることとなつた。故に高麗は其供給に堪へざるに、茲に又東界杵城の人宋蕃なるものあり、元に對して

高麗の東西界の地は元廷に歸するものなるに、其の田は今尙高麗人の所有と爲つてゐる。故に其畝を計れば穀四萬石を得るものなれば、請ふ之を以て東征の軍糧に充てられたい。

との言を以てしたれば、中書省は人を遣はして之を徴したるに依り、王は宰相に問ふに『元廷蕃の言に依りて、軍糧四萬石を増發せしめんとするが、之を如何にせば可なるや』との言を以てしたるに、宰相は之に對へて『先きに度調の請に依る二十萬石を賦するが爲には、家毎に抽き、戸毎に斂めて、糶獨者に及びたるも、僅に四分の一を得るのみなるに、若し更に四萬石を益せば、何を以てか之を糶せんや、宜しく人を遣して其不能なる所以を奏請すべきものである』と答へたと云ふことであつた。

然るに五月鄭仁卿等は元より還りて、世祖は東征の事を寢められたとの報告を齎らしたるに依り、王は喜んで、戰艦の修造と、兵卒の徵募を停止したるに、六月には王を冊して征東中書省左丞相と爲し、尙征東問題の責任を脱せしめざりしが、十年一年は何等の事件なくして無事に経過したるに、十一年（至元二十二年、日本弘安八年）十二月に至り、元は又人を遣はし來りて造船を命じたるを以て、同知密直司事宋瑋に命じて慶尙道造船指揮使と爲し、又使を諸道に遣はして造船を監督せしめ、且軍糧の貯藏を命じたるが、元の中書省は更に軍糧十萬石の調發方を移牒して來た。

十二年(元の至元二十三年、日本弘安九年)正月元は使を遣はして大赦の詔を發し、又東征を中止することし王の來朝を免じたるが、越へて二年後の十四年(元の至元二十五年、日本正應元年)四月には又東征の議が行はれて、王を以て征東行尙書省左丞相に任じたるも、實際問題としては何等の行動もなかりしが、四年を越へたる十八年(元の至元二十九年、日本の正應五年)八月高麗の世子が元に入朝したるに、世祖は人が曾て『江南の戰艦は其制大なるを以て風浪に遇ひ岸に觸るれば、則ち毀損して利を失するものなれば、若し高麗をして船を造らしめば、再び日本を征して之を取るべし』との言を爲したるに依り、之を機會に東征を提起されたるも、洪君祥は之に對して軍事は至大なれば、宜しく先づ使を高麗に遣はし、高麗の意を問ひたる後に於て之を行ふべきものであると奏したれば、世祖は之を然りと爲し、九月洪君祥を高麗に遣はし、高麗をして日本人を護送して國に歸へらしむると共に、又君祥をして日本を招諭せんと欲して、世祖の命に依りて日本再征の事を問はしめたるに、王は之に對して、

臣は既に不庭の俗と隣するものなれば、庶くは躬自ら討伐を致して、以て微勞を効さんと欲するものである。依つて監察御史金有成を以て、大僕尹に陞せて宣諭使と爲し、直文翰署郭麟を陞せて、供驛署令と爲して之を護送せしめ、併せて書を送り諭するに禍福を以てせむ。

との意味を以てした。然るに此時書狀官が闕員なりしを以て、人多くは計を以て之を避けんとしたるも、麟は忠直にして文章ありし上に、衆に語つて『事に當りて難を辭せざるは臣子の義であるから、我は之を辭すを欲せず』と稱したる言を宰相が傳聞して喜んで狀元に抽きんでられたれば、麟の婦翁崔誦は宰相に謁して覆奏せんとしたるに、麟は奮然として『死は一であつて、國事に死するは、妻子の手に死するに勝るものである』と云ふて、遂に日本に行きたるが、日本は曾て爲したる東征を憾むを以て、之を皆拘留して還さざりしに依り、二人の存没は世に聞へずして終つたと云ふが如き事件もあつた。

其翌十九年(元至元三十年、日本永仁元年)秋元は萬戸洪波豆兒を遣はし來りて造船を管せしめ、錢寶庫副使騰思丁をして軍糧を管せしめたるは、即ち復た日本を征せんとする爲めであつた。然るに洪波豆兒は高麗人福源の孫であるから、王官を望んで馬より下り涕を流して曰ふには『錦を衣て卿に還ると雖、職としては是れ民を苦勞するものなるは、愧づ可の至りである』とて、宰相に

對して禮貌甚だ恭きものがあつたと云ふが如き哀話もあつたが、高麗は之に對して都指揮使判密直金之淑を忠清道に、知密直崔有淦を全羅道に、都僉參議事金輝を慶尙道に遣はして船糧を備へしめたる外、更に郎將宋英を元に遣はし、王が親ら入朝して日本を征するの事宜を奏せんとを請はしめたる。

二十年(元至元三十一年、日本永仁二年)正月先づ戰艦の修造を罷め、且つ人を元に遣して東征の事宜を陳せんとしたるに、偶世祖の崩御に遇ひたるを以て、洪君祥は丞相完澤に上言して東征の事を罷めたる上、十二月に至り元は又中書舍人愛阿赤を遣はし來りて、曾て日本を征する爲に江華島に貯藏せる江南米十萬石の中より、遼東の飢饉救済用として五萬石を運搬せしめた。

以上の記事は、極めて概略ではあるが、弘安の役を中心とする前後三十年間に亘る、蒙古及高麗の二國が、如何に大掛りの準備行為を爲し以て之に臨んだかと云ふことを、知るに足るものなるを以て、之元と高麗の兩者に分ちて編年體に之を列記し、當時の國難を偲ぶと共に、世祖は其の世を終るまで、日本に對する執着が、如何に熱心であつたかと云ふことも、併せて之を想察せしめんとしたるものである。しかし予が本篇を起艸したる其目的は、弘安の役其のものゝ舊怨を温ねて、其の敵愾心を煽らんとするものには非ずして、寧ろ其反對に、かゝる逆縁を背景とせるをも拘らず、心地圓明なる、一山國師の渡來に依りて、數十年來一切の紛糾を淨化し去られたる、圓融無碍の法門が展開せられたる跡を追懷せんとするにあるを以て、項を改めて、國師來朝當時の狀況より、進んで其説法及示寂前後の道風を提唱することとした次第なれば、現今に於ける日支關係の改善は勿論、内鮮兩民族の融和を實現せんと欲せば、決して目前に顯はれたる事件を處理するのみを以て能事畢れりとするが如き陋風を改め、少くとも一事を行ふに當りては、事件其物が精神的並に文化的方面に如何なる効果と影響を發生するものなるやと云ふ點までを考慮して之に當れば勞少くして效之に倍するものあるは、之を一山國師の來朝に徴するも明かである。何となれば元の世祖が三十年の心血を費やしたる對日武力侵略の善後策として成宗より派遣せられたる一山國師は其國書すら之を我國に示さずして、純一の精神文化を高潮せられたる結果、鎌倉の執權は云はずもがな、時の主上を始め奉り、傾國の歸崇を受け、日支最惡の關係を化して、最好の範を垂れられたるは、吾人の學ぶべき教訓であらねばならぬ。

第四章 一山國師來朝後の道化

一、一山國師の來朝と其使命

三八

不世出の英雄元の世祖の資質を以てしも、其世を終るまで日本のみは終に之を致すと能はずして已みたるとは、既に前節の各項に於て歴述せる通りであるが、世祖の世を終りて成宗の世となるも、先朝の遺策は直に之を棄つるに能はずして、機會だにあれば、必ず日本を其膝下に屈せしめんと欲したるものにして、大徳二年（日本永仁六年）江浙平章政事世速答兒は、兵を日本に用ひんことを請ひたるに、成宗は「今は其時に非らざれば、朕は徐ろに之を考へるであらふ」と答へられたるは、既に大事記の項下に於て述べたる通りである。

然るに、其翌大徳三年（日本後伏見天皇正安元年）に至りて、成宗皇帝は、日本人が佛教を信ずを以て、佛教上の關係を利用して日本を入朝せしめんとの方略を樹てられ、普陀山僧一寧一山に勅して、江浙釋教總統と爲したる上、更に妙慈弘濟大師の徽號を加授し、日本に到りて其入朝を勸誘慰撫せしめんとせられたるものなれば、一山國師の來朝は全く成宗の「震斷より出でたるものである、しかし其手續としては、中書左丞行浙東道宣慰使をして、其の詔命を國師に傳達せしめられたるものであつて、其の文書は載せて『一山國師語錄』中にあるから、其大要を抄譯すれば。

今本使は、寶陀堂上一山總統大師に對して、中書省右丞より齎らし來りたる宣命を奉じたるが、寧一山に、妙慈弘濟大師、江浙釋教總統を授け、又錦欄の袈裟、鈔一百錠を賜ひ、隨行の伴侶五名には、緞子の表、並に詔書を齎らして、慶元路（今の寧波）より、倭船に附して出發せよとの事である。故に本使は、僧錄司に命じて、官と共に、之を傳達せしむるものなれば、此通知が一山總統の手に達したる時は、其の行期を定め、隨行の伴侶五名と共に、城に來り、飲んで宣命及賞賜を受け、倭船に搭乘するの準備を爲して、之を捧持すべきものである。又此旨を併せて愚溪長老に致すものなれば、希くば此旨を法照せられたい。

云々の意味を傳へたのであるが、其の月日は、大徳三年五月二十一日であつた。

しかし、國師の行狀に依れば、これより先き、大徳二年の夏、日本の商船が、明州に泊したる機會に、愚溪長老をして、日本に行かむることとなつて居つたのであるが、愚溪長老は老病の爲に出發するを得ざりに、三年再び日本の商船が至りたりと聞ひて、急に其任に充つべき人を撰び、一山國師に此重任を下したるものであつて、之が傳達の爲には、宣慰使阿答剌は、省郎及慶元府判官、僧錄司知書、昌國州知州、僧正司知書等五十餘人を普陀山に遣はし、宣慰使の手書及僧錄司の官書を出して曰く、皇帝の聖旨省府に下り、師に金襴衣及妙慈弘濟大師の號を賜ひ、溟波に泛んで日本に到り、二國の好を通ぜよとて、乃ち衣帖を師に付し、輒語を以て慰勞したりたれば、師も道る可らざるものとして、之を受けたれば、其翌日師を請して府に到らしめたるに、府には、府官、僧官等皆列座して、通好の事を細説したる後、元主の國書一通を付し、又官吏五人を差遣して、待衛せしめたとの事である。蓋し之は師の逃匿に備へる爲であつたと云ふのであるが、幾許もなくして、燕京の參政は皇帝の詔書及省部の文書を齎し來りて、之を宣讀し終ると同時に、急に舟に登らんとを請ひたれば、師は普陀に歸つて宿する一日にして、行省の官吏に促がされ、三隻の船に護られて、劇に日本の商船に搭じて、彌々萬里の波濤を越へて東航せらるゝこととなつたのであるが、風浪鼓蕩して、檣折れ舵摧けたるも、僅に之を修補して進馳すると三四日の後、高麗の邊境に着し、再び又濤山浪嶽の間を速奔すると一日にして、博多に到着するを得た。

(註) 以上は元史及一山錄の行實を綜合したる事蹟であるが、元史の成宗本紀に據れば、大徳三年三月癸巳（二十三日）妙慈弘濟大師、江浙釋教總統補陀の僧一山に命じて、詔を齎らして日本に使せしむることし其詔書には、「有司の奏陳する所に據れば、向きに世祖皇帝は、嘗て補陀の禪僧如智及王積翁等を遣はし、再び聖書を奉じて、好を日本に通ぜしめんとせられたるも、咸く中途に阻害ありて還つたことであるが、爰に朕が臨御してよりこの方、諸國を綏懷して、薄海の内外共に遐遣する所がなければ、日本との好も、復た宜しく通問すべきものである。然るに今如智は既に老ひたれば、道行素より高き、補陀の一寧一山をして、往いて諭せしむべく、商船に附して行かむるものなれば、庶くは、必ず達して特に朕が請に從はしむべきものである。蓋し之は、先帝の遺意を成さんと欲する爲であるから好を厚ふし、民を息ふの事に至りては、王は自ら審に之を圖られたい」と云ふ詔書を附せられたる旨を記してある。次に王積翁及如

智の事蹟に關しては、元史日本傳中に至元二十一年、其俗佛を尙ぶを以て、王積翁と補陀の僧如智を遣はし、往ひて使せしめたるに、舟中に行くを願はざるものあり、共に謀つて積翁を殺したれば、至るをを得なかつた」と云ふ記事があるのを見れば、一山國師の來朝は、元朝の僧侶派遣としては、實に其の第二回の派遣であると云ふことが明かである。

二、日本に到着せる一山國師

正安元年六月上旬を以て商舶に附して、博多に來着せる一山國師は、其舶主が書を以て、其來朝を鎌倉幕府に報告したる爲、幕府にては、敵國の使命を帯び來れるものは之を殺すべしとのとであつたが、又一説には、使者の命は之を奪ふて可なるも、其使者の僧儀たるを如何せんとの議が起つて、一先ず之を殺すと云ふを中止し、伊豆の修禪寺に編置することとなつたのである。

然るに、或人の云ふには「宋僧の我國に入るものは、多く道術を挾むものなるが、傳へ聞く所に據れば、寧公は元國の望士であると云ふとなれば、其の重寄を受くるものなるべきは之を知るべきものなる上に、其來使せるは、全く抑逼せられたる爲であると云ふのである。況や沙門は一切衆生の福田であるから、有道の士は、萬物に對して無心なるべきを以て、元國にありては、元の福となり我邦にありては、私の福となるべきものなれば、何ぞ必ずしも、區々たる子郷の節を慕ふものではあるまい。故に彼をして長く、窮裔に朽ちしむるは、吾土の比丘を郷ふるの素に非ずとの議を爲したるものありしに因りて、之を鎌倉に移らしめたるもしかも、尙之を僻處せしめて、府寺(建長、圓覺等を指す)に入らしめなかつた。

此より先き、師が來朝すると同時に伊豆に禁錮せらるゝ由を聞きたる、我邦の僧侶は、大に之を悲みたるに、夫が鎌倉に來たのであるから、僧俗は奔波禮謁して、只後るゝを恐れ、之か爲に山内の寓舎は、門前の市の如き盛況を呈し、同年十二月七日に至りては、即ち府命を奉じて、巨福山建長禪寺の法席に主となり、陞座拈香して、左の如き法語を唱へて、時の陛下後伏見天皇の聖壽萬歲を奉祝した。

此香、至尊至貴、爲瑞爲祥、本一眞以化育群靈、根至妙而出生萬物、恭爲祝延

今上皇帝聖躬萬歲萬歲、萬々歲、恭願、金輪永御、揭中天日月之明、玉燭常調、同大地山河之壽、次に征夷大將軍久明親王及文武官の爲に拈香して曰く、

本根秀異、技葉繁昌、沛膏澤於天潢、布清陰於東國、奉爲、吏部親王征夷大將軍泊文武僚、同增祿算、伏願、乃心王室、益懋維城之功、弘護佛乘、不忘靈山之記。

次に、執權北條貞時の爲に拈香して曰く、

靈根深固、間氣清明、垂恩蔭於四方、繼芬芳於萬世、奉爲、大檀越相模太守、增祿算、伏願、道同佛祖、以深慈拯濟黎元、德合乾坤、以至仁鎮隆社稷

次に、本師阿育王山廣利禪寺頑極和尚の爲に拈香して曰く、

此香無些子氣息、且要炙地薰天、供養前住大唐慶元府阿育王山廣利禪寺頑極老和尚、用醞法乳之恩。以上は、師が建長に晋山するに當りて、三門の法語其他を畢りて、陞座せる時に唱へたる法語であるから、實に日本に於ける、最初の獅子吼である。故に予は此時に於ける師の提綱をも、之を省略するに忍びずして、之を左に抄譯することとした。

法幢を建て、宗旨を立す。法幢已に建ち、宗旨已に立せば、極微塵の利海も、只一毫端にあり、盡無量却も、悉く彈指の頃に歸し、塵々味まさず、法々全く彰るゝと、帝網珠の光に交はりて、相雜るが如く、獅子兒の遊行して無畏なるが如くにして、豈に去來の相あらんや。何ぞ曾て彼此の分あらんや。便ち見る拈花の付法は、笑裏の刀鎗にして、面壁の安心は、口頭の人事なれば、衣孟の傳授は、當仁を屈辱し、棒喝の交馳は笑を作者に取るものである。況や自餘の弓を張り箭を架し、主を列し、賓を分つは、正に是れ、空を鑿ち端を造り、胡を欺ぎ、漢を瞞するものにして、畢竟太平の時世に、何ぞ干戈を説くべきものならんやと云ふべきである。故に山僧は萬里西來するも、只正に素面を相呈して、更に勞攘すべきものは無い。然もかくの如くなりと雖、此の身心を將て、塵刹に奉ず。則ち是を名づけて、佛恩を報ずと爲すものである。

右の提綱を畢りて、復た舉して曰く、

首山和尚は衆に示して、佛法は國王大臣有力の檀那に付囑し、人々燈々相續して今日に至る、且らく云へ、箇の何を續ぐ、須らく是れ、迦葉師兄にして、始て得んと云はれたが、山僧は、首山和尚が靈山の付囑を發揚したるとは、固に是れ光明なるも、要するに、只是れ一期の方便であつて、いかでか今日大力量の人があつて、親しく記莚を承け、二千年後に向つて、日本國內に此の一燈を續ぐに如かんやと云はねばならぬ。との拈評を爲したる後更に語を續いで、直に得たり今に輝き古に耀くを、諸人還て見るやまた否や、若しまた見ずんば、山僧更に爲に之を點出するであらふ。靈山の佛法王臣に付す、今日扶桑話又新なり、一道の恩光塵刹に徧く、東溟の天曉けて金輪を涌かす。

と云ふて、下座せられたが、實に堂々たる初轉法輪であつて、鎌倉の天地を衝動せしめたるのみならずして、扶桑國裏の禪風を鼓蕩せしめたるは、蓋し決して偶然の事ではないのである。而して、之を國師が博多に來朝せられたる日より、起算すれば、僅に半歳にして、殆んど傾國の歸崇を受けられたと云ふとは、東西の佛教史乘も稀に見る事跡であると云ふの外、更に之が敵國より來朝せる人にして、かくまで速に朝野の尊信を受けられたと云ふとは、國師の道風が與かつて力ありしとは勿論であるが、其の半面には、又邦人の性格が、如何に光風霽月であつて、是は之を是とし、非は之を非とするの雅懷に富めるものであるかと云ふをも、充分に之を立證し得るものと云はねばならぬ。

三、一山國師の郷貫と修養

記して此處に至れば、然らば一山國師とは、果して如何なる人物にして、其の修養は、如何にして之を積みたる人であるかと云ふを檢討するの必要がある。故に予は、茲に極めて概觀的に、其郷貫及性格並に修養の一端を述べることとした。しかし支那の史籍には、往々各種の人物を描くに當りて、只主觀的に其性格を高調するのみであつて、其の事跡及地名年月等に對しては、頗る不用意なるを常とするものであるが、一山國師の場合に於ては、幸に其行實、其他の方面に於て、或程度までの資料を得らるゝを以て、予は

其行實に依りて、宋の淳祐七年（即ち日本寶治元年）を以て浙江の臺州に生れ、俗姓は胡氏であつて、其性格は容止端嚴にして氣貌秀發なりしと云ふ事が明かにしたが、幼にして州の鴻福寺無等融公に投じたるに、衆皆矚目して之を識らざるものなかりしと云ふを見れば、幼時より既に宗門の麟鳳たるの資を備へたと云ふことが分る。しかし此處は久しからずして去つて、應眞寺に往ひて律を學び、延慶寺に往ひて臺教を習ふ等、精勤修練寒暑を憚らざりしが、己にして歎して曰く、三乘十二部教は、浩繁に堪へず、之を學ばんと欲するも、誠に沙を算するが如しと稱し、即ち之を棄て去つて、天童に上り簡翁敬和尚に依りて禪要を悉ひ、繼ひて鄧の藏叟及東叟愷、寂窓照、頑極彌等の諸尊宿に見へて、互に相敲磕して、朝夕を分たざりしが、爾後頑極彌の言下に於て頓に所疑を悟り、尋いで其の印證を獲たるも、尙環溪、横川等の諸老に見へて、益々其の造詣を深ふせられたるが、至元二十一年五月十八日を以て、

四明鰲峰の祖印寺に住せられたるは、即ち世壽三十八歳の時であつた。かくて祖印寺に住せらるゝと十年の後に至り、普陀の老宿愚溪和尚は老を以て院務を辭し、強ひて國師に請ふて其後席を董さしめた。故に其年月は詳かならざるも、國師が普陀に轉住せられたるは、至元三十年又は三十一年なるべければ、大德三年（日本正安元年）五月に商舶に附して東渡せらるゝまでの住山期は、六年間を過ぎざりしも、道譽は早く既に天下に滿ちて國師の渡日を促がしたるを見れば、國師は幼にして文字を通曉し、而して後臺教律を學びたる上更に禪門に入りて苦修精練せし人天の導師であつた。況入國の初に於て或人が北條執權に對して、傳へ聞く寧公は元國の望士にして其寄重を受くることの深きも、亦知るべきものがある。況や又身沙門にして衆生の福田なれば、若し有道士なれば、萬物に對して無心にして、元國にありては、元の福となり、我邦にありては、我の福となるものなりとの言は、實に至言であつて、其行藏に寸毫の凝滯なく、玲瓏たる玉の如くなるは、蓋し資性高邁なる上に、加ふるに文字の精練と、座禪の苦修とを兼ね備へたる後に非らずんば、到底企及すべからざる、自受用三昧を備へたる結果である云ふの外はないのである。

故に足一度我國に入るや、寸毫も俗事に拘泥せずして、國主の詔書さへも卷いて之を懷にして呈露せず、亦之を伊豆に錮するも知

らざるものゝ如く、之を鎌倉に招くも平然として喜ぶの色なく、更に巨福の名利に瑞世せしむるも何等の得色なく、前掲拈香の法語に現るゝが如く、淳々として祖道を提唱して、自他内外の畛域を泯絶し、道譽國を傾くるに至りて、遠く楓宸より黃敕の召を忝ふするも、何等平常と異らざるのみならず、後宇多法皇の教旨に依りて、洛東南禪の法席を董せしめらるゝや、却つて之を以て煩なりとして、一夜潛に之を逃れ去らんとしたるが如きは、到底尋常一様の禪客學匠の爲し能はざる所なるは、今更吾人の如き末學が煩叙を要せざる次第である。されば予は、國師の性格に對しては、天稟高邁なる上に、刻苦精練の工夫を積まれたる結果、渾然として道一如の境界を體得し、隨緣隨所に法雷を鼓し、法雨を雨らして、一切の有情を饒益せられたる人天の大導師であつたと云ふの外は、敢へて胡廬を描いて國師の大を讚仰するの言辭を有せないのである。

されど強いて吾人の管見を以て、國師の有せらるゝ報身上の受用を概観すれば、實に不可思議な程の伽藍縁と衆生縁とを兼備せられたる人であつたと云ふとは、支那にありて鰲峰及普陀の名山に主となりて、江浙釋教の總統として妙慈弘濟大師の勅號を賜はり、日本に來るや直に建長、圓覺、淨智、南禪等の名利に歷住し、龜山法皇、後宇多法皇等の比類なき眷遇を蒙り、示寂の後は法雨の塔號及國師の徽號を賜りたるのみならず、其の遺骨は龜山法皇分骨の兆域内に陪葬せられ、其の靈廟は法皇の靈廟に陪祀せられると云ふが如きは、國師の外には、一人も其儔を見ざる所である。しかし是は悲智圓滿にして二利を双行して倦むとを知らざる國師としては、蓋し當然の自受用三昧であるかも知れないが、兎に角末世に於ける古佛出世の概があつて、六百年後に於て之を追懷するだけに、一掬の道氣に打たるゝの感を生じて、隨喜鑽仰の念に禁へざるものあるは、思ふに國師の遺徳が然らしむるものであらふ。

四、國師に對する後宇多法皇の觀眷

前述の如く我邦に來朝後の國師は、九死の中より一生を得たる上、幾許もなくして、建長よりして圓覺、圓覺よりして建長に移られたる後、更に老病を犯して、淨智寺を領せられたるが、國師の道譽は、既に國師渡來の當時に於て、龜山法皇の聖聽に達したれば、法皇は敕使を遣して禪要を問はせ給ひたるに對し、國師は左の如き奉答を爲した。

上 龜山法皇

佛祖大事、明白徑截、離相離名、唯貴大智願、大力量人、於纖塵未動已前、猛著精彩、一提提得、便見輝赫古今、照耀天地、大而梯杭九有、津濟四生、小而語默動靜、俯仰折旋、靡不左右逢原、遠近中的、所謂大人具大見、大智得大用是也、若也智願微、力量小、循情塵、纏世網、不能勇自決裂、與夫務探集、銜見知、逞詞辯、弄精魂、不能頓自休歇、皆當面蹉過者也、故達磨大師、對梁皇只道箇不識、無業唯云莫妄想、後來或擎叉、打地、豎指、豎拂、行棒、行喝、種種垂慈、無非觀面提持、要人直下便領、豈肯落

二落三耶。仰惟

陛下、受記靈山、統御海宇、累劫薰習、篤信宗乘、茲蒙賜問、誠媿菲薄、謾以管見、槩陳如右。天縱之聖、悟不由師、正眼豁開、全機獨脫、則一切處一切時、至於導養聖子、光宅天下、日應萬機、開物成務、莫非本有光明之妙用、佛祖向上一著也、外此別求、則非所謂道矣。

併し是は國師の道譽が全國を傾蓋したる結果なるは勿論であるが、國師も亦全力を傾倒して法皇の悲智の二願を玉成し、啓沃し奉らんとした蹟が現れて居る。故に是が機縁となりて、後來龜山法皇崩御の後に、後宇多法皇が、綸旨を降して北條熙時に國師の上洛を命ぜられ、正和二年八月一日を以て、南禪寺に住持たらしめられたる原因であるが、しかし其半面には、又後宇多法皇が、龜山太上天に對せらるゝ追孝の至情よりかゝる召命を降下せられたと云ふことを知らねばならぬ。故に國師は敕を奉じて南禪に住したる開堂には『黃勅を招じて、箇の一著には、殊勝中の殊勝、奇特中の奇特であるが、且く道へ、是は箇の何物ぞや、見るや又否や、良久して曰く、法皇の大賢、九天より降る』との香語を唱へられ、其翌二日龜山聖廟の爲に上堂して、左の如き法語を提唱せられた。

猶是

大人具大見、大智得大用、於一毫端現實王刹、坐微塵裏轉大法輪、卷舒立方外乾坤、縱橫掛域中日月、乃至建造伽藍、悟明已事
先皇自己運用底事、只如末後大事光明緯燁、且道只今在甚麼處行履、諸人還會麼、良久而云、巨闢十三華藏界、藏身無跡海騰波

と云ふ語を見ても、後宇多法皇の龜山太上皇に對らるゝ教旨に酬ひ奉り、兼て龜山法皇に對し奉りては、其顯幽の如何に拘らず、大智大用の自受用三昧を培増し奉り、啓沃し奉らんとして居るのは、尊ぶべきの極みである。

故に後宇多法皇も國師に對して、益隆眷を加へさせられて、荐りに南禪に幸して道を問はせ賜ひ、輦下の縉紳公卿も亦入つて國師の鉗鎚を受け、靈山に其人を獲たるを喜びたるも、國師は老病日に加はるを以て、屢上表して退休を請ひたるが、法皇は日に優渥なる眷遇を加へて、之を許し給はざりしを以て、國師は潛に遁れて越前に去りたれば、法皇は長くも左の如き宸書を飛して之を慰諭して、歸山を促がし給ふたのである。

親書特告南禪長老一山禪師

朕聞師之道價久矣、所以下詔關東、以官差請來也、一得會晤、宛如獲司南車也、慕德欽風、三閱青黃、而聞有心退席、而數々理行裝也、去年親詣寶刹爲勾之也、近者亦聽打拚行李、以書慰諭
公乃屈蒲輪來、諾許朕意、不料暗裏出城、遠涉山川矣、若得回來再相見、必許隨自便、養病庵中、追於懷璉之古風、何須更歸東關矣、直饒燕居南禪東堂、使小師等如元安着、有何不可、寧又有魔賊之擾乎。大都公長化此方、廣結四衆之緣、則朕所願也、千萬切要面晤、不備

五月六日

一山國師

洞隱叟中（後宇多法皇の御密號である）

と云ふ、誠に恐懼に堪へざる至優至渥なる宸翰なれば、之を拜受しては、如何に退休の念切なる國師も、欽命に背反し奉ること能はずして、歸洛したのである。而して右の宸書中には、三度青黃を閱すとの語を詔らせ給ひたるを見れば、國師の逃亡事件は、即ち正和四年の出来事であると云ふ事が明かであるが、要するに右の宸翰を拜すれば、法皇の眷遇が如何に至渥であつたかと云ふことを證して餘りあるから、予は此の以上に蛇足を加ふる必要は無いが、國師と法皇との左の唱和は、之を省略するに忍びないから、茲に之を

抄録することとした。

正和丙辰立春日

太上皇幸慈濟菴護成野語上奏云

結庵聊爲養衰殘、敢望 皇明顧野蒼、陋巷士民瞻 寶仗、近鄰兒女覲 堯顏、和融陽煦生寒谷、赫奕衣冠耀掩關、感荷 睿恩三祝願、福同東海壽南山

御製和卽席

瞻觀河東到此庵、載陽雪盡路邊蒼、參禪向夜訪問坐、慈濟迎春謁老顏、花色水聲通意地、臘梅寒樹悉機關、靈光今照從天外、新月始昇牆上山。

右の如く慈濟庵に太上皇の行幸を忝ふして、前記の唱和が行はれたのは、即ち正和五年であるから、國師越前より歸洛せられた翌年であつて、示寂の前年であると云ふことも明かにすることを得るものなれば、國師の傳記としては極めて貴重な資料であると云はねばならぬ。

五、北條氏と國師の關係

龜山、後宇多兩皇の眷遇が至隆であつたと云ふことは、既述の通りであるが、然らば國師を伊豆の幽閉より鎌倉に招きたる北條貞時以下の歴代の執權は、如何なる態度を以て國師を遇したるか云ふに、是又正安元年十二月七日の建長に於ける上堂に參列したる以來、痛く國師の感化を受けて、曩に之を幽錮したることを慚愧し、護法の念を生じて國師の提唱を請ひ、或は退休の爲に玉庵雲を建立する等禮恭至らざるものなかりしは、建長、圓覺、淨智等の名刹に入山の度毎の上堂の法語でも明かであるが、左の一文は國師が親しく、貞時を鉗鎚せられたる婆心惻徹の垂示であるから、左に之を抄録することとした。

示相州太守

即心即佛一轉語、眞是渾鋼鑄就、如今欲明此旨、但存正信、心具決定、志於應酬事物、折旋俯仰、行住坐臥、飲食起居、一切處、一切時、常々提撕、反覆究觀、常令身心虛豁、正念現前、久久之間、必然心體廓然、如雲開日朗、塵盡鏡明、直下可無疑滯矣、況此心本來明妙、蓋由無始無明、妄想執着、所以昏蔽、若一旦洞徹、則與諸佛無二無別矣、從上佛祖、出興于世、種々化誘、不過令衆生明了此心而已。但學道之人、根有利鈍、緣有淺深、若上根利智、一聞千悟、穩鎮家堂、更有何事、若中下之機、當勉自修習、仰山和尚所謂若不安禪靜慮、到者裏總須茫然、是也、然安禪之時、必有二障、一謂昏沈睡眠、二謂雜想變亂、此障起時、只提箇即心即佛、便可一截斷、又不可將心湊泊、不可用意搏量、不可緩、不可急、又不可自生疑慮、我塵俗身心、如何便言是佛、又不可預憂此心如何便得明了、才有此念、便成障道矣。但請如此用功、忽然築著磕著、直下如桶子底脫一番、不妨是箇了事大丈夫也、古人云、但辨肯心、必不相賺。

右の外、最明寺時頼の像に賛して、

以英明盛德、丕贊皇猷、以菩提大心、興隆佛法、世間出世間、一一俱超越、靈機運妙無窮、千古恩光照塵刹

と云ふを始め、最勝園寺の像賛あるを見出れば、北條氏と國師との關係は、單に歸依とか、護法の檀越とか云ふ關係以外に、貞時以下の執權は親しく國師の室に入りて參禪問法したと云ふとは、前掲の貞時に示された法語でも明かである。

以上の各節は、國師が正安元年に來朝せられ、文保元年十月二十四日の示寂に至る、十有九년간に亘る行藏の概要を略述したるものであるが、其臨終より示寂後の感化と殊策とは、特に傳ふべきものなれば、項を改めて之を叙述することとした。

第五章 一山國師の臨終と滅後の道價

一、國師臨終の至榮

國師は兼て南禪の院務を辭し、關東に歸休して其の老病を養はんと欲し、屢之を太上皇(後宇多)に奏請したるも、上皇は車駕親臨の上之を慰留して許し給はざりしは、前々項の一山禪師に告ぐるの宸翰中に於て拜せらるゝ通りであつた爲、國師は潛逃を謀りて、越前に至りたるに畏くも至優至渥なる宸翰を拜し、再び歸洛の後老を南禪山内慈濟庵に養ひつゝありしが、太上皇は同庵に臨幸の上、前々項の如き唱和を拜するまでの眷遇を垂れさせ給ひたるも、奈何せむ國師の幻質は、化縁既に盡きたるにや、其翌文保元年十月二十四日を以て、終に四大分離して示寂せられたのである。

然るに國師の道風を慕はせ給ふ上皇は、國師の疾篤しとの奏を聞召すや、直に駕を命じて南禪寺山内にある龜山法皇の聖廟に駐驛あらせられ、時々其病狀を問はせ給ひたるは、獨り緇門の光榮たるのみならずして、實に山門の至榮であるとして、全山の僧衆は恐懼したる次第であつたが、國師は殊に其眷遇に感激せられたるものと見へ、臨終に至りて左の如き遺表を手書して上皇に奉られた。

一 山 頌 首

法皇陛下、聖駕幸本山、寔緇門觀光也、一山不幸臥疾、數日百體舉而不仁、不能再瞻望

龍顏、大變時至、幻質將摧、潛據忠情、入無生三昧耳、

文保元年十月二十四日臣一山頌首

といへる遺表の外に、遺偈としては『一世橫行、佛祖飲氣、箭旣離弦、虛空落地』と書かれ、筆を置くと共に、座化せられたるは

同日の曉天にして、世壽は實に七十有一歳であつた。此時龜山廟に駐驛あらせられたる陛下は、右の遺表により蒼皇寢室に幸し給ひ儼然として跌座すると宛も生けるが如き、國師の遺貌と永訣遊ばされたるが、君臣共に此の態度には嗟嘆せざるものはなかつたと云ふのである。

此に於てか、陛下は直に其翌日を以て、左の如き御製の宸奎を賜ひ、國師の號を追諡せられたるが、其御製を拜讀すれば、陛下と國師の道契は蓋し尋常一様のものに非ずして、暗黙の中に、國師は如何に陛下の道念啓沃に力を盡し奉りたるかは、之を想察するに餘りあるも、奈何せん之を立證すべき文献なきは遺憾であるが、幸に陛下の宸奎に因りて、之を恐察證明するは、千百の資料に勝るものあるを以て、茲に之を録出することとした。

朕會聞師道風、思欲一觀德儀、頃年下詔請來、補

先皇聖跡南禪、遂獲酬夙志、神交道契、頓增法味、有得於中矣、師告以衰暮、屢乞歸休、朕嘆祖道微運、固留止焉、五載于今茲、法躰違和、疾至於彌留、臨期告別、唱寂於本山、末後全提、靈明天眞、所謂無心道人、大法主盟者也。稱以國師、欲報老師眞示之的旨、旌鷲嶺付屬之金言云爾。

文保元年十月二十五日

一 國山師門徒等

右の御製に因れば『神交道契頓增法味有得於中矣』との天語と云ひ、又『稱以國師欲報老師眞示之的旨』と宣し給へる聖旨を拜すれば、予の所謂千百の資料にも勝るものであると云はねばならぬ。加之陛下は有房卿に命じて、左の如き祭文を作つて之を祭らしめ給ふた。

維大日本國文保改元十月二十七日

敕特進前御史大夫源有房、昭告于

一山國師大和尚之尊靈曰、摩騰來漢、顯宗致欽、初祖入梁、武帝紆襟、增崇至道、稽古乃今

先皇梵刹、揀託保任、靈山附屬、眷命弗替、克明克哲、問法問心、麟鳳爾德、金玉爾音、光輝祖域、榮敷繡林、千載逾期、功與化參、倏矣歸眞、不留幻質、隕茲偉人、若亡良弼、思慕罔罄、死生如一、賜諡國師、以名副實、聖衷孔昭、青天白日、時令奠香、靈饗可必、尙亨。

然るに、陛下は更に敕して國師の遺骨を、龜山法皇の廟側に分葬せしめられ、之に宸筆『法雨』の額を賜ひたるが如きは、全く我邦歴史中に其類を見ざる榮典を施されたものであつたが、陛下は其翌々年即ち元應元年國師の畫像が成るに及んで、左の如き御製宸筆の贊を遊ばされた。

内充而爲道機、外發而爲德儀、竹篔橫揮兮、威風動沙界、金欄斜搭兮、慈雲覆坤維、拓開人天區域、培破佛祖藩籬、宋地萬人傑本朝一國師。

元應元年初冬二十五日

芝山老叟書(後宇多法皇御密號)

右の畫像以外に、國師の木像が彫刻せらるゝや、陛下は敕して之を南禪院の宸殿内に南面して奉安せらるゝ、龜山法皇の御法體の御像の西側に東面して之を陪祀せしめ給ふたのである。故に國師は、正和二年旨を奉じて入洛以來生前の五年間は、到底言語に絶したる法皇の眷遇を忝したるものであるが、示寂の後に於ても、前項に述べたるが如く、諡號の追賜、敕命の祭文、塔銘の宸翰、御製の像贊、木像の陪祀と云ふが如く、あらゆる方面に亘りて、驚くべき至榮に浴したるものなるが、此は一に國師と法皇との間に行はれたる、神交道契の結果が、偶示寂と云ふ機會に發露したるものなるべしと恐察するの外はないのである。

因みに遺骨の一部分は、門弟子が之を奉じて、國師が入洛前に休養の爲に創立せられたる、玉雲庵に埋葬したと云ふことである。

二、示寂後の支那に於ける國師の道價

其後四年を経過したる正應二年（元の延祐七年）に至り、國師の門弟は國師の臨終の狀況及國師の語録を齎らし、元に入りて國師の故舊及名宿に題跋を求めて、恩師の萬一に報ずると共に、國師の道價を其故山に高からしめたのである。故に國師と同門同參の故舊たる芝靈石禪師は、左の如き序文を附して、往事を追懷せられた。

一山國師語録序

我宗無語句、亦無一法與人、若有一法與人、土亦難消、古人與塵水泄不通、不知此語此錄、何從而有、向未啓口未落筆前會得、方見我

一山和尚傳頌翁不傳之秘、倡道扶桑、大用峻機、若震霆擊空、巨黍破的、王臣師仰、學者景從、洞徹死生、了無凝滯、雖所說雲興水涌、所錄充棟汗牛、不爲剩矣、一山與余生臺嶠（台州臨海）、夏同玉几（阿育之別名）、講磨奮勵、道術相忘、戡化以來、嗟悼不已、延祐庵申（七年）神足緣首座、所錄七會（祖印、寶陀、建長、兼住圓覺、再住建長、淨智、南禪）語、爲示、披覽以還不覺拊卷而言曰、佛法東漸、干以見矣、禾城、本覺如芝書、

次に阿育王山の徳明和尚は、頑極禪師の法嗣にして、而も其法弟たる關係より、左の如き跋を附して居る。

慶元路育王弟徳明、拜觀

一山法兄禪録、道無南北、人有古今、

大唐日本七座勝棲、提唱語意、出人意表、走龍象、得翳晴之妙、端可尊爲

一國之師、予與同條生、不與同條死、要竟末後句、分明只是、歲次庚申（延祐七年）三月望日無異堂書

と云ふを始として、鄱陽永福寺古林茂禪師は、國師と同參であつて、而も國師が四十二年前に育王にありて、大藏の鎖鑰を掌りたる時代の舊友なれば、之に題して、

中峰破沙盆、三傳而至痴絕、更二傳而至

一山、其金聲玉振、若黃鐘大呂之音、能起人於瘖鬱聾瞶矣、故

外國王臣、尊禮師之、此豈操朽索馭奔輪者同日而語哉、予識師於至元戊寅（十五年）掌藏鑰于玉几時、今四十二年矣、緣首座持

此錄爲示、觀其顯發呈露、開東山法門、見之即心死路絕、使人浩嘆不已、因題其後云。

延祐七年夏五月二十日鄱陽永福住山 茂書

次に有名なる中峰本禪師も亦左の如き跋を付せられて居る。

是心何用安名、至寶不吝酬價、西庭柏侍者、出乃師

一山和尚垂示語要、求跋語、予於禪道佛法、素所未解、以故生平不敢妄加一字於尊宿語中、恐貽酬價之誚於大方也、柏韻首而掩

卷焉、幻住、中峰本

と云ふが如き序跋を得て歸朝したる後、此等の事實を綜合したる行實が、時の巨匠虎關師鍊禪師に依りて之が起艸せられたるは、

其翌元亨元年であつた、

故に國師が我國に來朝以後の消息は、右の如く國師の二門弟の入元に因りて、再び國師の故山に知れ渡りたるは、全く緣首座、柏侍者の努力に因るものなるは、今より之を追懷するも、師弟の情誼が如何に厚きものあるかを知るに足るものありて、尊ぶべきの極みである。

三、入國後の國師の家風

右の如き門弟子の入元の一事を見ても、國師の感化の如何に偉大なりしかを知るに足るものあるを以て、予は更に正安元年國師が來朝以後の家風を一瞥するの必要を感じ、之を行實に其他に徴したるに、國師の資性は慈和にして更に涯岸なく、他の法柄を把るも

のは、嚴壯威重を以て法助と爲すの傾あるものなるに、國師は只一榻に孤座して、來者に謁せられたるが、而も其出入に對して齒謁を用ひず、自由に出入せしめられたるを以て、遠來と新到とを問はず、間斷なく參請するを得たと云ふことである。加之國師は、更に何等索隱とすべき參考書を持ち來られざりしが、禪苑の故事其他に對して、疑あるものは之を國師に質せば、直に之を明白ならしむるを得たと云ふことである。

されど國師は我國の國語に通ぜられざるを以て、一切の通問は皆筆録に依られたと云ふことであるから、片言隻語と雖、朝夕の參問者に對する示教は、蓋し容易ならざるものありしも、國師は對し、筆を執つて之に酬ひられたるが、其參問者は決して、禪要を諮決するのみに非ずして、或は教乘を質するものあるかと思へば、儒道より諸子、百家、碑史、小説よりして、郷談俚語に至るまで、苟くも疑あれば、來つて之を質したるを以て、國師は之に對して動もすれば、連篇數紙を費やして、詳細に指導せられたるに依り、學者は國師を推して博古の人と稱したるが、國師は此外書道に對する造詣深き人なりしを以て、紙帛を携へて揮毫を請ふもの多かりし事は、國師の門閥が此等出入者の履蹟に由りて穿たれたと云ふを見て、如何に多くの人が出入したかと云ふ事が想像せらるゝのである、故に國師の示寂を去ると六百十餘年を経過したる今日に於ても、比較的多數の墨蹟が保存せられつゝあるのは、蓋し其在世中に揮毫せられたるもの多かりし爲であること云ふことが分かる。しかし今日に於ても、國師の遺墨は比較的多數に保存せられつゝありとは云へ、之を藏するものは鴻璧も管ならざるの思を以て、之を寶貴しつゝあるを以て、市價の如きも眞に一字千金の概あるは、國師の家風がかくの如く、自を捨て、他の爲にせられたる遺徳の然らしむるものと云はねばならぬ。

以上の記述に依りて、國師の徳化の大なりし所以も、道價の高かりし所以も、自ら明瞭となりたる次第であるが、其淵源は實に國師の家風が徹底的の利他であつた結果、其遺弟も師恩を報ずる爲に、身を挺して元に入り、師の語録に題跋を求むると云ふが如き、麗はしき孝道の發露となつたものと思はる。

四、民國緇素の紀念碑建設

星霜六百年後の大正十四年十一月は、即ち日支兩國佛教史上に特筆せらるべき、東亞佛教大會を東京に開催せられたる紀念すべき年であつたが、其大會に引續き、支那より出席せる僧俗二十二名は、東京及地方の名山大刹を見學することとなり、十一月十日より七日迄、京都南禪寺に宿泊したる機會に、南禪寺に於ては、特に一山國師語録を印刷して、之を一行に分ちたれば、一行は之に由りて痛く國師の道化に感激したるは勿論、龜山、後宇多兩皇の優渥なる護法の聖旨に感銘し、特に其筋に請ふて、龜山法皇の御分骨所に參拜すると同時に、國師の法雨塔を禮したるが、日支兩國史に其類例を見ざる前後三十餘年に亘る、蒙古來襲の後を承けて來朝せる國師がかくまでに傾國の歸崇を受け、祖道を宣揚せられたるは、佛教の本分たる大悲平等の發露たる佛作佛行としては當然のことではあるが、しかし之を事實の上に示されたる、兩皇陛下と國師の勝觸は、吾人後昆としては仰ぐべく、尊ぶべきの極みなれば、せめては國師の墓前に紀念碑なりとも建設して、其の遺徳を瞻仰したきものであるとの議を決し、資若干を醸出して、之が建設に關する事務は擧げて、南禪寺と日華佛教聯絡委員たる不肖に一任することとなりたれば、不肖は之を南禪寺執事長井上義洲師と謀り、宮内省諸陵頭に出願の上、其允裁を得て之を建設し、其の落成式を擧げたるは、昭和二年十月十八日であつた。故に其碑文を左に録して、六百年後の民國緇素が如何なる敬意を捧げたるかを明かにすることとした。

祭 一山國師覺靈文

昔民國十四年十一月十六日、赴東亞佛教大會、中華代表釋太虛、釋道階、釋持松、釋弘傘、釋佛智、釋曼珠、信士王一亭、胡瑞霖、徐鴻賓、韓德清、韓哲武、楊鶴慶、張宗載、甯達蘊、李榮祥、馮卓、劉鳳鳴、及從者釋滿智、釋開權、釋鏡容、釋覺力、信士游如淵等二十二人、具清香、淨水、鮮果、新蔬、仰白於一山國師之覺靈曰

維應眞之有自兮、誕天台之聖鄉、
由教麟而宗鳳兮、傳佛燈爲國光、

蒙古來襲と一山國師の歸化

主淨慈之名刹兮、坐寶陀之法堂、
冀正法之弘通兮、策支駕於扶桑、
得傾國之歸敬兮、闢南禪之道場、
隆三顧於帝眷兮、流千載之德芳、
我華夏之釋裔兮、會法友於東邦、
欽風烈之猶在兮、陳蕪辭以讚揚、
願寂靈之垂照兮、張教聖於八荒、

右は前述の如く、一行が墓前に参拜したる當時の表白文であるが、之を其儘紀念碑に刻することとなり、上海の信士曾彝氏が敬書したるものであるから、支那の後昆が其遺徳を追慕するの情が、明白に顯はれて居るのは、洵に床かしき限りである。

五、建碑の落成式

而して右の碑文の落成式には、南禪院に奉安せる國師の遺像を南禪寺の法堂に奉遷し、河野管長以下山内の清衆總出頭にて、其前晚より報恩法會を執行し、當日は京都臨濟各派本山の執事長及末寺總代等の法侶を招待したる上、京都市長、荒木京大總長、諸陵寮京都出張所長清岡子爵、神戸在住の華僑有志等數百名の賓客を招待し、東京よりは特に不肖が日華佛教聯絡員として、建碑事務に關係したる因縁に依りて参列の上、午前十一時より法堂に於ける献湯式に引續き楞嚴行道あり、來賓一同燒香の後、先づ龜山法皇の御分骨所に到り、讀經燒香を爲し、最後に國師の墓前に進みて讀經の後、不肖は來賓に對して建碑に關する諸般の報告終るや、井上執事長の手により紀念碑は除幕せられたるが、此時不肖に更に進んで前掲の碑文を朗讀し、之に引續いて杉諸陵頭以下各方面よりの祝電を披露して式は全く終了した。

夫より南禪寺にては、大方丈及寢殿に於て、前記各方面の來賓に對して淨齋を供養せられたるが、其席上には之が爲に特に編纂せられたる『南禪寺其と師檀塔』の一書を頒布して龜山、後宇多兩皇と、國師の關係を來會者に明瞭ならしめたるは、好箇の思出であつたが、同寺にては、更に龜山法皇の御分骨所の側に創立せられたる南禪院内に奉安せる、龜山法皇の御遺像及龜山、後宇多兩法皇の宸翰並に、國師の遺墨及元亨年間に出版せられたる宗門の系譜等幾多なる資料展觀をせられ、古香掬すべき中に於て、京都特有の抹茶の接待があつて、滿山に染出す紅葉の色にも、兩法皇の英靈と國師の覺靈は、今日の供養を心から容納し給ひたるものなるべしとの感に打たれ、一同は時間的には六百餘年を隔てたる事柄も、眼前咫尺に其の當時の光景を見るが如き心地であつた。

六、結 語

右の如く予は一山國師の建碑問題に關係し、親しく建設に關する事務を執筆したるのみならず、最後には其落成式に参列して、兩皇の宸翰及國師の遺墨を展觀したる當時の感激は、終に予を驅つて本篇を挿せしむるの動機となつたものであつて、覺へず筆を呵して國師の來朝せらるゝ前後の事情を一瞥することとなつた結果が、前篇の如く章を累ねて、日蒙日麗關係までにも、旁及したる次第であるか、要するに國師の來朝は我國に勃興せんとする禪門の發展に向つて、一の大なる衝動を與へられたる以外に、間接には我國の朝野が、三十餘年に亘る、蒙古問題に對する宿怨を忘れて、國師に歸崇して後るゝことを恐れたるが如き事跡は、人をして法性海中には自もなく、他もなく、怨もなく、親もなくして、同一鹹味のみなる所以を示されたものであつて、國師の前には、日もなく、元もなく、只一息相通する期間は、之を大法護持に任せられたる結果が、即ち國師の寂後數百年を経過したる今日も、猶昨今の如き感を以て之を迎へらるゝ所以なれば、人類として永久の生命を保ち、不變の光輝を放たんと欲せば、精神的文化を描ひては、更に何物もないと云ふ貴ぶべき實物示教を貽されたるものである。

故に予は本篇の稿を終結するに臨み、繰返して日支關係の改善及内鮮融和の實を擧げんとするの士は、永久不滅なる精神文化の上

に立脚したる、經營に注目すべきものであると云ふの一語を高潮して、之を以て本篇の結語とするものである。しかし、本篇に引用したる資料は、元史及東國通鑑、並に一山錄等の書籍のみに依つたものであるから、蒙古襲來に關する日本側の記録は、全然缺如せるを以て、其缺陷を補ふ爲には、會て生前に親交を忝ふしたる關係より寄贈せられたる、故文學博士八代國治氏の『蒙古襲來の研究に就て』の一篇を卷末に附して、蒙古襲來當時に於ける我官民が、如何に眞摯なる態度を以て、有史以來未曾有の國難に當り、祖國の光輝を維持し得たるかを偲ぶるとしたれば、讀者は全篇を通讀して、其間に龜山、後宇多の兩皇の教旨と、一山國師の態度とを看取せられたいものである。(昭和三年三月十九日稿了の日記をす)

蒙古襲來に就ての研究

故文學博士 八代 國治

一 總 論

「蒙古襲來と國民の自覺」 文永弘安の蒙古襲來は元主忽烈が亞細亞を征服し、歐羅巴を蹂躪した餘威を振り我國を併呑せんとしたる國難である。上は後宇多天皇龜山上皇を始め奉り、執權北條時宗英斷事を處し、下は國民協同一致外敵に當り國威を發揚し、金匱無缺の國體をして益光輝あらしめた國史上の一大事件であつた。この事件は一は我が國民をして外敵の慘虐にして恐るべきを知らしめ、一は外國に對する國民の自覺心を喚起せしむる最も偉大なる教訓である。

「舊來の著書及び論說」 後世この事件に注目し、これが研究を試みて、大橋訥菴の「元寇紀略」、小宮昌秀の「元寇始末」埴保巳一の「登龍抄」を始め、多くの著書が出来て居る。就中山田安榮氏の「伏敵篇」は竹崎季長の蒙古襲來繪詞、八幡愚童記を始めとして、當時の日記古文書遺蹟物等を最も博く蒐集して、頗る學界に裨益するところが多い。其の後この役に關する新史料が出て、この大事件に就て闡明するところが多い。田中文書は三浦博士の「鎌倉男山八幡宮司田中俊清氏所藏の異國征伐の古文書、正傳寺宏覺禪師の願文、壬生家弘安四年日記抄等がこれである。田中文書は三浦博士の「鎌倉時代の外征計劃」(征戰偉蹟)辻博士の「鎌倉時代の外征計畫と國民の敵愾心」(海外交通史話)正傳寺の文書は三上博士の「安覺禪師蒙古降伏祈願文」(征戰偉蹟、書苑)弘安四年日記抄は三浦博士の「元寇に關する新研究」(史學雜誌)として發表せられて居る。余は又「觀福寺の佛像弘安の役」(歴史地理)「宮崎宮の敵國降伏の宸翰に就て」(神社協會雜誌、書苑)として研究の一端を發表して置いた。醫學博士中山平次郎氏等は遺蹟遺物より調査して「元寇遺蹟の新研究」をして發表せられ、漸次蒙古襲來に就ての真相が明められつゝあるのは學界の爲め喜ぶべきことである。

「勸仲記」 余は最近に於て蒙古襲來に關する貴重史料の原本を閱覽するを得た。勸仲記と、弘安四年日記抄と、圖書寮の異國御祈文書等である勸仲記は廣橋家舊藏で、今岩崎家の所藏に歸したものである。これは勸解由小路兼仲の日記で、兼仲は儒官を以て聞ねたる日野家の人で經光の二

男である。藏人辨官の重要な官を経て權中納言五位に叙せられた。其の記す處はいづれも政治上の重要な事件を漏すことなく、最も簡明に記し鎌倉時代の日記中の白眉と稱すべきである。勅仲記の寫本は從來九條家本として史料編纂に藏せられて居るが、闕脱が頗る多い。殊にこの文永弘安の記事は、僅に弘安四年の四、五、閏七月の三ヶ月のみで事件の發生當時の事情を窺ふことが出来なかつたのである。今回閲覽したものは悉く自筆の卷子本で、文永五年十月から正安二年まで三十三年間の記事（文永六年より八年までと、其の他少しは闕て居る處はあるが）で七十六卷ある。其の中文永十一年は全部、弘安四年は四月以後全部完全して居りて、只に戦役に關する史料のみならず、京都に於ける情況を最も明にすることが出来る。此は大正六年七月東京帝國大學卒業式に、天皇陛下幸の折り長くも天覽に供へ、黑板博士之が御説明を申上られたのである。

〔弘安四年日記抄〕 弘安四年日記抄は既に三浦博士によりて發表せられて居るも、未だ全部を閲覽するの機會を得なかつたが、これ亦黑板博士によりて天覽に供へられた後に始めて閲覽することを得た。これはも壬生家舊藏で今は狩野亨吉氏の所藏に歸して居る。弘安四年五月五日から同年八月十日までの記事を室町時代の中頃に抄録したもので、反古裏に寫されてゐる。後に整理の時に順序を亂したので頗る錯雜して居る。弘安四年は地下傳、壬生家譜等によりて見ると顯衡の時であるから、この日記は顯衡の書いたものでなからうか、之を勅仲記と對照して研究することを得る所がある。

〔異國御祈文書〕 宮内省圖書寮の異國御祈の文書は僅に三通であるが、これまた從來の史料にない新史實である。これも舊は壬生家のもので弘安四年日記抄など、關聯するものである。又名古屋市關戸氏所藏の異賊降伏の文書も未知の新史實である。今これらの新史料によりて、伏敵篇に漏れたる師守記、鶴岡社務記録、明王院文書等と合せて、余が新に研究し得たる一端を披瀝して高教を仰ぐこととする。

二 文永役

〔蒙古高麗來牒と幕府の決斷〕 龜山天皇文永五年正月一日高麗の使者太宰府に來りて蒙古の國書及び高麗の牒狀方物等を上つた。少貳資能は、之を鎌倉幕府に致し、幕府は更に之を朝廷に上り奏聞して裁決を仰いだのである。朝廷では議定の未返牒を遣はさないことに決定した。翌六年三月蒙古及び高麗の使者が對馬島に來著し、その報知が三月七日六波羅に達し、四月廿六日院殿上に評定があつて、また返牒を遣らなかつたので、使者は島人二人を捕へて歸つた、其の後ち九月十七日に至り、高麗使金有成高柔等が對馬島にまた來りて、牒狀と蒙古中書省の牒狀を上つた。

よに於て朝廷では議あつて、この度は返牒を遣はすことに決し、蒙古高麗への返書を草し清書して關東に下し、異議なくば太宰府に遣すべきことを以てした。然るに幕府では斷然返牒を遣らぬことにした。師守記貞治六年五月九日大外記中原師茂異國牒狀に就ての勅例の内に、

文永六年四月廿六日、於院有評定、異國間事、去比蒙古國并高麗國者上下六十餘人來著對馬島、是去年帶牒狀到來之時、無返牒之條、蒙古國成

疑貽、爲尋聞實否也云々

件度連年牒狀到來之間、有沙汰被清書下返牒、無相違可遣太宰之由雖被仰合、關東不可被遣返牒之旨、計申之間被略舉、と見わたるにて明である。外國に對する鎌倉幕府の強硬な意見と見るべき正確な記事は、只だこの師守記あるのみである。五代帝王物語に「文永五年正月の牒狀に對し返牒に決し、菅長成返牒を草し、藤原經朝清書して關東に遣はされたが、幕府は牒狀の書辭無禮なるを怒り抑へて遣らず」と記してゐるのは、六年の牒狀に對する返牒の事柄を誤つたものであらう。本朝文集によれば、菅長成が中書省への返牒を草したのは文永七年正月で、高麗國への返牒は二月である。されば關東に下し幕議にて返牒を遣はさぬことに決したのは、二月の末か三月の始めであらう。

〔朝廷の祈禱〕 返牒を遣さず使を遣還すと共に、朝廷では宣旨を諸寺に下して異國降伏の祈禱を行はしめた。宮内省圖書寮所藏の文書に

（端 書）

御文從儀師相秀 異國御祈事

異國御祈事、任先日宣旨、欲令施行諸寺候之處、如被宣下候者、可讀經誦咒之由雖被載之候、可爲何經何咒之由不被載之候、若諸寺不審事候者、何様可令返答候哉、於異國事者、先例不分明候、伺准據之例候之處、或可令轉讀仁王經、或可令造立圖畫不動之由被宣下候歟、所詮隨重御計總令施行候也、恐惶謹言

文 永 七

三月十五日

從儀師相秀

壬 生 殿

と見てゐる。この文書のうちに不動を造立圖畫することが見えて居るが、井上侯爵所藏傳長隆筆不動明王は、元寇の時祈禱の本尊たりしものと傳へて居るは蓋しこの時のものであらう。これによりて當時の僧侶が熱誠を以て國家の爲めに敵國降伏を祈れるかを想像することが出来やう。諸

寺に祈禱の宣旨を下すと共に幕府にても鎮西諸將に命じて防備に力を盡したらうと思はるゝが、未だこの方面に關する史料は見當らぬ。
 「來襲に就ての日時」 文永八年九月十九日蒙古の使趙良弼が筑前國今津に着し國書を上つたが、依然として返牒を遣らぬことにした。この年蒙古は國號を元と改めた。十年三月趙良弼復た太宰府に來たが、これもまた空しく追ひ歸された。かく屢々返牒がないので、蒙古王は大に憤り、終に文永十一年の來襲となつたのである。從來の所説によれば、蒙古高麗の聯合艦隊の對馬に來襲したのは十月五日で、守護代宗助國の戦つたのは六日となつて居るが、勘仲記の原本を見ると守護代が對馬で戦つたのは十三日で、兼仲は十八日早くも來襲の風聞を耳にし、更に詳細の報告に接したのは二十二日であつた。

勘仲記 文永十一年十月十八日、庚申、異國賊徒等來着對馬島之由有風聞云々、鎮西使者已下向關東云々
 廿二日、甲子、去十三日於對馬島筑紫小卿代官凶賊等合戰云々、依此事資能法師差遣飛脚於關東云々、興盛之沙汰驚遽無極者也、我朝神國也
 定有宗廟之御冥助歟、可貴者也

一代要記には十月十三日對馬壹岐に亂へし、翌十四日守護代庄官等戰死としてある。歷代編年集成には對馬來襲を三日とし、京都に報告のあつたのを十七日として居る。この三は十の字を脱せしものか、若し十の字を脱したものとすれば、一代要記と共に勘仲記と一致するやうだ、太平記に八月十三日とあるのは月を誤つたものであらう。或は博多から六波羅に達する飛脚は概して、七八日を要して居るから、十三日の來襲を十七日に六波羅に報告のあるのは早過ると考へられぬともないが、當時鎌倉から京都まで約百二十餘里の道を、早馬では三日間を以て往復して居るから、博多から京都まで約百八十餘里の道を、早馬で五日間に往復するのは容易であらうと思ふ。

「北條時定の九州下向」 かくて賊軍は勝に乗じて壹岐を屠り、終に進んで博多沿岸を侵したのは二十日であつた。然るに我軍は一人宛の接戦に馴れて軍隊的活動が出来なかつたので大敗に歸し、民家は焼かれ宮崎八幡宮は焼かれて敵の蹂躪するに委せた。この敗報にはさすがの剛膽な時宗があつても關東幕府中には頗る騒いだ様である。勘仲記に、

十月廿九日、辛未、異國賊徒責來、有興盛之由風聞、關東武家邊騷動云々
 とあるので幕府にて騷動した有様が何はれる。然し直にこれが處置をしたと見れて、又同日の記事に

或説云、北條六郎井式部大輔等打上云々、是非未決怖畏無極者也

と見えて居る。北條六郎は爲時で、式部大輔は北條時廣である、この文章の意味簡單にて明瞭でないが、關東より兵を率ゐて打上り、鎮西に赴いて外敵を防禦することを意味するものであらう。關東執權六波羅鎮西探題等系圖、關東開關皇代並年代記所收、時頼の弟、爲時の註に「字北條六郎、本名時定、遠江守從五位下、爲異國警固住肥後國」とあれば、時定はこの時九州に下向したものでなからうか。大友文書文永十一年十一月一日幕府御教書に「蒙古人襲來對馬壹岐、致合戰之間、所被差遣軍兵也」とあるは蓋し時定等發遣のことをいつたものであらう。肥後國滿願寺の緣起に文永十一年時定の建立といへるは根據あるに似て居る。時定の下向に就ては滿願寺年代記に建長七年北條六郎殿時定阿蘇下として居るが、餘り早過るやうである。弘安四年には時定は博多に赴いて戰場に臨んだ様である。弘安四年七月二日龍造寺季時が壹岐瀬戸浦に於て戦功ありしことを翌五年九月九日に證判したことが見えて居るので明である。其の後姪濱に奉行所を置き肥前國人をして異賊警固のことに勤めしめたことが龍造寺文書に見えて居る。

「大友頼泰停廢を擡へて上洛す」 十一月二十日の夜大風雨で賊艦漂蕩して悉く碎け、溺死者一萬餘人に及び、賊船一隻志賀島に抑留し、捕虜を得たことは八幡愚童記、歷代編年集成等に委しく見えて居るが、勘仲記原本には未知の新史實が見えて居る。

十一月六日、戊寅、或人云、去比凶賊船數萬艘、浮海上、而俄逆風吹來吹歸本國、少々船又曉上陸上、仍大朝式部大夫(○頼泰)郎從等凶賊大友頼泰の部下が五十餘人を捕虜とし、之を具して上洛することば從來全く見ぬ事柄である。大友頼泰は鎮西奉行で少貳資能と共に頗る重要な地位にあつたことは、大友文書によりて明である。從て大友氏がこの役に活動し捕虜を得て上洛することばなつたのであらう。

「龜山上皇の軫念」 この役に當りて龜山上皇は震懼を惱ませ給ひて、諸寺に祈禱を命じ、諸社に奉幣して祈禱せしめられたことは、少からぬことであつたらうと思はるゝが、勘仲記の原本でこれらの事柄を詳にすることが出来る。十一月二日には神功皇后以下八陵に異國降伏の御祈として勅使を發遣し、又六日の條に近日内外法御祈、諸社奉幣連綿無絶事云々とあり、七日には伊勢石清水以下十六社に奉幣使を發遣して異國降伏を祈

禱せられた。大風によりて我軍大勝となつた報知があつた後八日には上皇親しく石清水八幡に御幸して報賽せられ、翌九日には賀茂北野兩社に御幸になつて居る。この兩社御幸はこれまた異國御祈報賽の爲めであらう。

〔宮崎八幡宮焼失によりて廢朝〕 宮崎八幡宮が十月二十日兵火の爲めに焼かれたことは八幡愚童記、皇代曆に見え、尋で十一月十四日に陣定を行はれたことは歴代編年集成に見えて居るが、勘仲記には十四日の條に、依宮崎宮火事、自今日三ヶ日廢朝云と見え、裏書にも同様の文が記してある。宮崎宮は外貨通接の境にありて來敵防禦の爲に崇められた神社であるから、古來尊崇せられて居るが、今燒失に逢うたので特に廢朝を行つて尊崇せられたのであらう。竹内少佐の「蒙古軍上陸に關する新研究」に文永十一年に宮崎宮炎上の事は記録に見えないから、博多宮崎は敵の馬蹄に蹂躪せられたものでないことを確信するといはれて居るが誤であらう。宮崎宮が燒けたとは右の通り確であるから、恐らく蒙古軍は百道原に上陸し血原、鳥飼、赤坂等に我が軍を敗り、進んで博多宮崎を蹂躪したものであるまいか、宮崎宮燒失後朝廷より筑前備前二國を寄せて造營せしめられた、造營成りて延治元年七月まことに正遷宮を行はんとするに際して、龜山上皇は「敵國降伏」の四字を紺紙に染められ、之を神座及び柱の下に納められた、これは蓋し祈願の意を込めたものであらう。この事は委しく書苑に記して置いたからこゝには省くこととする。

〔惟康親王太神宮に祈禱〕 朝廷で伊勢太神宮を初め石清水八幡以下諸社に祈禱して敵國降伏を祈られて居るが、これと同時に鎌倉幕府にありても同じく鹿島社及び伊勢太神宮に祈願して居る。鹿島社に祈つたことは勘仲記弘安元年十月廿一日裏文書に、

異國降伏卷數給候事、丁寧之條難有候謹言
十一月廿一日

建治元

鹿島神主殿

相模守在列

と見えて居る。追書に建治元とあるは文永十一年の誤であらう、鹿島社に祈りし上は香取社にも祈つたこと、推想することが出来る。又伊勢太神宮に祈願を込めたことは、敵軍を撃破した後、伊勢桑名神戸地頭職を寄せて報賽し、殊に御願成就して異國降伏したことを御寶前に啓せしめて居る。勘仲記正應元年九月の裏文書に

伊勢國桑名神戸地頭〔職〕事、御寄進狀被獻之、御願成就異國降伏之由、殊可令啓太神宮御寶前給之由〔所カ〕候也、恐々謹言
(北條時宗)
相模守判

建治元年十月廿一日

謹上祭主三位殿

と見えてある。この文書は北條時宗が、將軍惟康親王の命を奉じて神戸郷御寄進のこゝを祭主に告げたものである。これによりて獨り皇室のみならず我が國民が伊勢を崇敬し國家大難の際には上下一致して太神宮の加護を仰いだことがしらる。いふまでもなく我國民は太神宮中心主義である。源頼朝擧兵の時にも伊勢に祈禱し、源行家も義經も同じて祈禱して居る、また承久役に當ても政子は伊勢太神宮に祈禱して居る、この太神宮中心主義は即ち皇室中心主義であつて、我が國民の信念のある處はこの文書によりても知ることが出来るのは愉快である。

三 弘安役の一

〔異國征伐の爲め大和の寺衆國民を擧す〕 文永の役後蒙古では猶懲りずに使を送つて來た。建治元年四月杜世忠の一行が長門の室津に着いた、幕府はこれを龍口に斬りて大に其の意氣を示した、幾くもなく前上總介北條實政を鎮西に使用して異賊征伐の事を掌らしめ、又少貳經資に命じて異國征伐の壯舉を企てた、この事は、既に三浦辻兩博士によりて精細に發表せられてあるが、勘仲記弘安五年十月十六日の裏文書から未知の新史實を發見した。

爲異國征伐、大和國寺僧國民被召之間、可蒙免許事(副衆徒申狀)
とあるものが是である。これは文書の目録を書いたもので、本書が見當らないから、精しい事は詳でないが、これによりて幕府が異國征伐の兵士として、大和國の寺僧と國民とを徵發したことは明である、元來大和國には諸寺の領及び衆徒が多いので、幕府は守護地頭を補してないから御家人たる武士は居らぬ、之に反して衆徒が兵仗を帶して頗る勢力を振ふた、これが即ち僧兵で單に衆徒も寺僧ともいつた、この僧兵の下にありて庄園内に於ける俗人の兵仗を帶したものを國民と稱した、これまた衆徒と共に武力が盛んであつたから、幕府はこれを異國征伐の軍隊としたものであらう。これによりて幕府が鎮西及び中國の武士のみならず、近畿の武士をも徵發したる頗る大規模の異國征伐であつたことが想像される。か

る一大計畫の外征が何故に中止になつたか頗る疑問で、大に研究すべき事である。

〔來襲の日時〕 弘安四年役の來襲の日取については八幡愚童記一本に五月二十一日とし、伏敵編も又これに従つて居るが、弘安四年日記抄、勸仲記によれば對馬壹岐に來襲したのは五月二十二日で、其の報知の京都に達したのは六月一日であつた。

弘安四年日記抄 六月二日、異國船襲來、去月廿二日被打入壹岐對馬二島之由、自鎮西飛脚夜前到來于六原云々、即打通關東之由風聞、實説可尋之、

勸仲記 六月一日、乙丑、異國賊徒舟襲來之由、宰府飛脚到來

これは太宰府使者の報告であるから確である、一代要記に六月一日、申刻異國兵船五百艘計襲來對馬之澳之由、自宰府飛脚到來とあるのは蓋しこれら記録によりて書かれたものであらう。

〔我が將士夜襲して敵艦を撃沈す〕 この役に當り我が將士竹崎季長、大矢野十郎、河野通有等夜襲して敵船に乗じて敵將を或は虜にし、或は之を斬りて壯烈なる戦鬪をなしたことは、蒙古襲來繪詞、八幡愚童記、豫章記等にて知られるが、勸仲記に六月四日、戊辰、異國船一艘自日本令夜討、即自鎮西飛脚到來と見え、又弘安四年日記抄に六月十六日鎮西早馬又到來歟異、(○以下缺文)討取三船之由申上候了、襲來(○以下缺文)彼是展轉之説(○以下缺文)とあるので、我が將士が奮闘して敵艦を屢々撃沈せし壯烈なる活動を想像することが出来る

〔長門國來襲〕 賊船は五月二十二日對馬壹岐を侵し、進んで博多沿岸に迫りしが、これと同時に別隊として多數の船艦を送りて長門沿岸を攻撃した、これは勸仲記原本等によりて發見せられた新史實である。

勸仲記 六月十四日、戊寅、自武家邊内々申云、今日宰府飛脚到來、異國船三百艘着長門浦云々、聞鎮西直令着岸之條、怖畏之外無他

弘安四年日記抄 六月十五日異國賊船襲來長門與(盛力)(○以下缺文)

長門來襲に就ては八幡愚童記に「人口さま」なるに九國既にうち落され長門におしよせたり、今攻のほりなんさいひしらひ」と書かれて風説として居るが實際の事柄であつたのである。又太平記には門司赤間關を経て長門周防へ押渡るとして居る。太平記の蒙古襲來の記事は文永弘安兩役を混同して誤が少くないから、從來信用されて居ないが、勸仲記、日記抄によりて長門へ來襲の一事は信じられることとなつた。一度我が國を侵

さんとするもの博多方面に注意すると共に長門沿岸に注目するのは地形上自然のことである。建治元年四月杜世忠の一行が長門室津に着したのを見ても、蒙古の軍がこの地方の偵察を遂げたことは想像に難からぬところである、弘安四年に賊艦が博多を突くと共に長門を突いたのは蓋し戦略を得たものといふべきである。鎌倉幕府でも早くよりこの地方には注意して長門守護職を特に置かれてあつた。文永十一年も既に異國襲來の風説があつたと見え、十一月一日幕府は武田信時に命じて安藝を警固せしめた、東寺文書に蒙古人襲來壹岐對馬、既致合戦之由覺惠所申也、早廿日以前下向安藝、彼凶徒寄來者、相催國中地頭御家人並本所領家一圓地之住人等、可令禦戰、更不可有緩怠と見えて居る。又建治元年五月十二日又信時に令して、長門の警固薄きを以て更に周防安藝を加へ、異國襲來の時には三ヶ國をして防戦せしめ、同月廿日更に令して備後を寄せ、四ヶ國をして要害を警固せしめた、同二年八月二十四日更に山陽南海兩道の兵勢を以て長門を警固せしめ、弘安四年閏七月十一日相模七郎業時を播磨に遣して、賊船出陽の海路に亂入せば御家人を催して之を防戦せしめむとして居る。以て幕府が如何に長門中國に力を盡し、かを推測することが出来る、弘安六年十月に北條實政を筑前から長門警固に補したのは、蓋しこの敵艦來襲に鑑みて殊に一族中の有力者を選んだものであらうか。日記抄に興盛とあるから、長門來襲の敵軍も亦頗る優勢であつたことは想像せられる。只だ何處の浦に來り侵したか明記されていないのは頗る遺憾である、山田安榮氏の長門の元寇(史學雜誌)に「長門國豊浦郡神玉村の西端土井ヶ濱は蒙古殘黨上陸の古戰場にして、蛭子社、鬼の松、錨石、鎌倉社、鶴岡神社等は其遺跡なり、土井ヶ濱の北に水田あり、當時は原野なりしも開墾作田の時地中より掘出したる軍器八箇あり、現に同地の二宮神社に保存せり」と記してある。それで新史料に見えた來襲の長門浦は土井ヶ濱ならんを推測したるに、神玉村神功皇后神社所藏の實物を見るに及びて發掘の蒙古遺物は極めて薄き鐵片にて出來たもの、一見して數百年を経たと思へない新しいもので、更に子細に點檢すると錆付て居るが、延寶三乙卯十一月日、奉寄進有田門とあるものと、延寶五年の字が見え、其の裏に姓名が見えて居るものと二箇あつたので、大に失望した。これは蓋し延寶年間神寶として奉納したのが、一旦地中に埋れ、更に發掘せられて其形が少しく變りて居るので、よくも見極めず蒙古の遺物と唱へ、終に蒙古の古戰場さまで唱へらるゝに至つたものであらう。

〔江南軍の來襲〕 新史料によれば、六月中旬に再び敵の船艦對馬島に來着し進んで博多沿岸を侵したと云ふなる。即ち勸仲記に

六月廿四日、戊子、自宰府飛脚到來、宋朝船三百餘隻着對馬云々、

と見え、弘安四年日記抄に

六月廿一日、鎮西早馬去夕又到来、異國□□□□□□□□□□田申上云々□驚(○以下缺文)

廿四日、鎮西早馬到来于六(○以下缺文)申上云々(○以下缺文)

廿七日、異國又襲来鎮西合戦之由早馬先(○以下缺文)委可尋記之

と見えて居る。これ等は從來我が史料には見えない新史實である。初め元高麗聯合艦隊は分つて二とし、一は忻茶丘、金方慶等將として東路軍を率ゐて合浦を發し、一は范文虎を將として江南軍を率ゐて江南を發して東路軍と會し、共に進んで博多沿岸を突かんとする方略であつた、然るに忻茶丘、金方慶等の軍は先づ至りて對馬壹岐を略し、博多沿岸を侵したが、我が將士の勇猛なる夜襲によりて船艦は沈没せられ、糧食は缺乏し、疫病流行し、將士戦死し、加ふるに范文虎等期に後れたので、一旦士氣大に衰沮したが、范文虎等船艦三千餘艘元軍十餘萬を率ゐて來會したので更に士氣が振ひしこが東國通艦に見えて居る。范文虎はもと宋將の元に降つた人で、其の率ある蠻軍も南方漢軍であるから、勘仲記に宋船といへるは范文虎の軍の來着を指したもので、日記抄の襲来鎮西合戦といへるはこの聯合艦隊の再び博多沿岸に來襲したのを指したものであらう、然るに少貳資經、大友頼泰、菊池武房、竹崎季長、大矢野十郎、河野通有、松浦黨等の諸將奮闘勇武を著ぼして賊軍をして一步も上陸するを得ざらしめたのみならず、進んで屢々敵船を夜襲して大將を虜にしたので、賊軍は止むこを得ず退て肥前鷹島に據ることになつた。八幡愚童記に「蒙古この度は甚おしつまりて軍をいそがず何事をはかるとにかあらん、兵船もはるか沖の方なる鷹島へこそこぎよせにけれ」と見えて居る。弘安四年日記抄に

七月十二日、異國賊船等退散之由風聞、實説可尋記之

とあるは、この時のこまを指したものであらう。賊船は一旦退いて士卒を休養し、再び兵備を調て博多沿岸に迫りしものゝ如し、弘安四年日記抄に

七月廿一日、異國賊船重來襲之由、昨日飛脚到來云々、事體非無怖畏、□□□□返々驚嘆(○以下缺文)

と見えたるにて想像が出来る。八幡愚童記以下諸記録に鷹島に退いてから以後、彼我艦隊の間に戦闘があつたこが見えて居らぬが、これにより

て見れば七月中にも頗る激戦が行はれたこであらう。

〔武士の奮闘と神風とによりて大捷す〕 かくて我が勇猛なる武士は五月末より七月に渡りて約三ヶ月半上下一致和衷協同して外敵に當り、奮戦苦闘終に猙獰なる蒙古の軍をして一步も上陸するを得ざらしめた。この時に當りて神風吹いて敵艦漂蕩し、破損するもの沈没するもの相續いた、これに勢を得て我が武士は更に奮闘して終に悉く敵軍を破るに至つたのである。人事を盡した後に天祐を得たものといふべきである。この大風のあつたのは閏七月一日の夜で、只に九州方面のみならず京都方面に及びしと見え、勘仲記一日の記事に「入夜暴風大雨如沃如何、終夜不止、匪直也事也」といつて居る。我が軍大捷の報告のあつたのは九日のこである。

弘安四年日記抄 閏七月十一日、異國賊船去一日夜逢大風大略漂没破損、船濟々被打寄之由、鎮西飛脚一昨日歟到來之間、天下大慶之由謳歌者也、誠以不能左右、

更に詳報の來たのは十四日の事である。

弘安四年日記抄 閏七月十五日、去夜鎮西飛脚到來云々、蒙古賊皆以滅亡、所殘二千余人、爲降人之由申上云々、冥助□□□事也(○勘仲

記十四日の記事があるが、これは既に伏敵篇にも收められて普く知られ居る記事であるから省くこゝとした。

〔俘虜の待遇〕 一度神風の冥助あるや我が軍は進んで、或は鷹島に、或は千崎島に、或は御厨子崎海上に追撃し、彼十餘萬軍中生きて歸るもの僅に三千人に過ぎなかつたのであるから、我が武將によりて或は殺さるゝもの、或は捕虜となるもの或は降を請ひしもの多きこまは想像に難からぬこである。弘安日記抄には俘虜二千人としてあるが勘仲記に殺戮並生虜數千人と見えて居る。これらの俘虜は諸將士に分ち預け厚く待遇して居る。弘安四年九月十六日の野上文書に異國降人事、各令分預置給分云々とあり、正應五年高麗より贈れる國書に頃在辛巳年(○弘安四年)因邊將所奏、發兵往征、戰艦因風濤播蕩間、或失水軍、有遺漏不還者、今聞耽羅所送商人言、貴國皆收護處養、似頗好生之聖德、此一幸也とあるので、我が國民が俘虜を篤く給養したこが明である。弘安五年圓覺寺成るの後ち北條時宗は自ら發願して地藏菩薩一千體を造立供養して彼我戦死者溺死者の冥福を祈つて居る。これは佛法の法界一味冤親平等に據つたものであるが、固より我國民仁慈の天性に出でたものである。

〔戦争結末の奏上〕 かくて二十一日に至り關東より鎮西に遣はせし使者上京し、奏上して戦闘に關する事件は落着いたのである、弘安四年日記

抄に

閏七月廿一日、自關東差遣鎮西使者兩人今日上洛、異國賊無殘誅了之由申上云々、實證猶可尋之と見えて居る。九州から京都に使者の往復は大概片道五六日位を要するから、異賊を残りなく誅して戦争の結末の付いたのは蓋し七八日の間であらうか。蒙古襲來繪詞、五條文書、都甲文書によれば大風以後も各地に戦闘行はれ、都甲惟親が七日に鷹島の東浦で戦つたのが最後であるから、この日記抄の文と丁度一致する様である。

〔戦争中心地〕 舊來の説によれば弘安四年の戦闘は、東路軍も江南軍も對馬に據らず、直に壹岐を侵し進んで博多灣に入り、志賀島鷹島が戦争の中心であつたとして居るが新史料によれば、東路江南兩軍共に對馬に來襲したと明記してあるから、賊軍は高麗に近き對馬を根據地として壹岐、志賀島、鷹島等が激戦地であつたらしい。比志島時範、河田資盛等は六月二十九日壹岐に戦ひしことが比志島文書に見え、龍造寺季時、同家益等は七月二日に壹岐瀬戸浦に戦ひしことが、龍造寺文書に見え又松浦榮及び其一族が同島に於て戦つたことが、松浦文書同系圖等に見えて居るので壹岐が戦闘の中心であつたことが明である、之を要するに弘安役に於ては敵艦隊は對馬島を根據地として壹岐、志賀島、鷹島、博多灣によりて九州大陸に迫らんとし、我が軍は博多灣によりて壹岐以下諸島に迎へ戦て敵の將卒を虜にすると共に、少貳資能、河野通時等戦死し、戦争最激烈を極め、五月より閏七月に至るまで三ヶ月間上下和衷協同して外敵に當りしが、神風の援によりて我が軍大捷を得て終に敵軍を殲滅するに至つたのである。

四 弘安役の二

〔龜山上皇の軫念〕弘安役に於ける京都附近の情況も新史料によりて從來の史闕を補ふことが多い。六月一日異賊船來襲の報太宰府より來るや、龜山天皇はいたく宸襟を惱まされ院殿上に於て頻りに評定を行はれた。三日には修法以下廿二社御祈等のことを定められた。勘仲記に、

三日、丁卯、參殿下、早且御參仙洞、依異國事被評定

と見ゆ弘安四年日記抄に

四日、五位出納重俊云、異國事昨日於仙洞有評□□□□以下令參行、又廿二社御祈事、今日被仰重俊(○以下缺文)可被參云々、其狀云、異國襲來之由、有其聞、早參籠社頭、抽丹 誠可祈請者、藤宰相殿御奉行如此、仍執達□□(如件)

六月 四日

東市 正重 俊

謹上 賀茂神主殿

追 申

惣官社司各參籠、至靜謐□□不可有緩懈之儀候、其間勤行條々、追可被□□□□由同被仰下候也、と見ゆて居る。四日より異國御祈の大法を始行し、圓滿院宮圓助法親王は櫻井本坊に於て尊星王法を行ひ、淨土寺慈基僧正は延曆寺四王院に於て修法せられた、九日に儉約の制符に就て院殿上に評定を行ひ、十三日に再び評定ありて儉約制符を下した。藏人頭藤原爲世、中御門經氏兩人は御前に於て裾を切捨て、院旨を實行し、決意を示した、勘仲記に緯已爲嚴密といつて居る。十四日再び關白鷹司兼平前關白基忠、左大將同兼忠、僧正慈基、前中納言平時繼、前參議藤原信輔以下諸大夫院中に祇候して評定し、十八日以後龜山上皇、後深草上皇以下、諸院宮三槐九棘次第に其日を點し祈禱を行ひ、且つ諸社に千度竝百度詣を行ひ、諸寺に仁王講千座讀經を行ひ、又五大尊護摩供養法を修し、佛像を造立し、近臣以下諸人心經六十三萬八千餘局を轉讀することを定めた、國家を思ふ熱烈なる誠心を伺ふことが出来るから、左に勘仲記の全文を示すこととする。

六月十四日、戊寅、自殿下有召所馳參也、異國御祈、始自十八日毎日可被行、件日新院御分、十九日本院御沙汰、廿日此御所御沙汰、其間事如何様可被行哉之由有評定、殿下、前關白殿、左大將殿、淨土寺僧正御房等御坐、前平中納言、前宰相信輔朝臣等已下、至諸大夫祇候、次第始自祈事、有御沙汰、信輔朝臣予等於御前執筆注付之

- 一諸社千度竝百度詣
- 賀 茂 百 度 (公賴朝臣 信輔朝臣 予)
- 平 野 百 度 (經 親)
- 春 日 千 度 (神主 正 預)
- 松 尾 百 度 (行 職)
- 稻 荷 百 度 (顯 相)
- 大 原 野 百 度 (神 主)

附 錄

日吉 百度(重有)
 吉田 千度(神主)
 祇園 百度(範有孝有)
 宗像 千度(茂氏季茂)
 梅田 千度(可仰經賴朝臣)
 法成寺惣社 千度(可仰寺家)
 平岡 千度(可仰本社)
 已上舉俊朝臣可奉行之
 一氏三社御讀經
 一乘院禪師御房
 春日唯識論十部
 可仰本社供僧
 大原野 金剛般若經百卷
 梅宮 百度(仲忠行連)
 廣田 千度(可仰伯三位)
 北野 千度(在嗣朝臣、在兼朝臣)
 紫野今宮 百度(行康)
 東三條角明神 二千度(行繼)
 宇治離宮 千度(可仰本社)
 フトノト敷 百度(仲高助康)
 太詔戸

同 吉田 同經百局
 已上同奉行歟

一讀經
 大般若 一部(興福寺可被申寺家)
 金光明經百部 (五十部淨土寺僧正御房、五十部盛尊僧正)
 華嚴經 一部(梅尾)
 觀音經 千卷(清水寺 可被仰承通法印)
 最勝王經 十二部(宗澄法印)
 藥師經 百廿局(中堂 淨土寺僧正御房)
 金剛般若經 (二百局東南院僧正御房百局東寶塔院々主良清)
 千手經 百卷(行願寺)

法華經 百部 (五十部淨土寺僧正御房 十部勸解由小路禪尼)

十部公什法印 十部公尋僧都 十部圓顯僧正

殿中内外祇候人等面々可轉讀

心經六十三萬八千三百三十三局
 已上顯相奉行
 一仁王講千座
 多武峰 百座
 平等院 三百座
 法成寺 三百座
 法性寺 二百座
 東北院 百座
 (於御所可被行之)
 十二座不斷仁王講

已上予奉行
 一心經觀音經最勝王經金光明經仁王經一日書寫供養事
 淨土寺僧正御房 前平中納言、法性寺前宰相已下祇候人皆參可書寫
 已上業行朝臣可奉行

一真言
 不動咒 一落反 金輪 十三萬反 愛染 卅萬反
 一御佛造立供養
 一字金輪 澄惠法印可造進
 不動(三尺) 幸圓法橋可造進
 印佛 千手觀音像千二百體
 一五大尊護摩供養法事
 不動護摩 十二座 (六座實相院僧正御房 六座淨土寺僧正御房) 於御所可被行
 降三世供養法 廿二座 圓遷法印

軍茶利 供養法	廿二座	圓守法印	靜禪法印	各十一座
大威徳 供養法	廿二座	殿助法印	範愉僧都	各十一座
金剛夜叉 供養法	廿二座	寛智法印		
已上時方 可奉行				

これによりて十八日龜山院御所に於て異國御祈を始められ、公卿殿上人上北面以下三十萬卷の心經を轉讀し、一人分千二百卷持佛堂にて結番して轉讀し、寢殿に於て大般若經御讀經を行はれ、上皇屢出御あらせられた。これから毎日行はれて十九日には後深草院の御沙汰として御祈を行はれ、廿日は關白兼平の沙汰として祈禱し、解由小路仲兼心經を轉讀し、廿三日には大宮院の沙汰として祈禱を行はれ、翌廿四日は觀音經を供養し、廿九日龜山上皇より御沙汰ありて近臣をして三十萬卷の心經を轉讀せしめられ、七月一日には頼忠阿闍梨天下泰平異國降伏の祈として三ヶ日、七月二日には室町院の御沙汰として、仁王經心經の轉讀を行ひ、小槻顯衛は家中の男女を率ゐて異國御祈三十萬卷のうち般若心經を轉讀し、十一日には基忠の沙汰として百座仁王講を行ひ、十七日には兼忠の沙汰として、唯識論を書寫し不斷仁王經を轉讀し、二十七日には、異國御祈三十萬卷のうち雅定の沙汰として心經を讀誦し、二十九日仁王經最勝王經を修し、三十日には天慶長和の例によりて大元帥法を行はれ、閏七月七日兼平の持佛堂に心經百卷を轉讀し、金輪竝不動眞言各千反を咒して異國降伏を祈られた。殊に兼平は勸學院の不動像を摸作し、不動供花を行はうて異國退散を祈禱した、勘仲記に七月五日、戊戌、參殿下、自今日被行不動供花（此本尊等身不動、被摸作勸學院不動像云々）年來有供花、近年中絶、且爲異國御祈被始之、結番人々殿上人少々予候之と見えて居る。

〔石清水日吉社等に御參籠〕 かく大法を行はるゝと共に、龜山上皇は諸社に參籠して神樂を行ひ、異國降伏を祈禱せられた、六月二十日石清水に御幸あらせられて祈られしことは、既に八幡愚童記、増鏡等に見えて居るが、學者の一部には二書共に根本史料にあらざれば、石清水御幸のことは疑ふべきである否定した方もあるけれども、勘仲記に

六月廿日、甲申、傳聞新院幸八幡宮寺、爲異國報賽被行御神樂、所作人、笛宗冬朝臣、篳篥兼行朝臣、和琴（大炊御門三位中將良宗）柏子（本實清卿、末資行朝臣）

廿一日、乙酉、上皇自八幡還御

とあり、弘安四年日記抄に

〔廿一日新院カ〕 □□□□御幸八幡、異國御祈禱可有（○以下缺文）

とあるので八幡御幸は確である。但し勘仲記に報賽の爲めとあるが、この時は元軍の勢盛にて未だ報賽の期でないから兼仲がふき書き誤つたものであらう。又上皇は七月十一日春日社に、十九日日吉社に御幸あらせられて異國降伏の祈願を込められた。從來一代要記にこの兩日御幸のことはゆるも御祈のことは詳らかでないが、勘仲記に

六月十九日、癸未、（○上略）參仙洞、御祈等結願、事畢參殿下、來月十一日春日御幸、宇治御儲條々事所何定也、七月十九日、壬子、上皇今曉幸日吉社、院司忠世奉行、自禪林寺殿出御、爲異國御祈、於社頭被行御神樂、其儀委可注記、廿日、癸丑、上皇早旦自日吉還御、勅願成就、神感炳焉者也

と見えて異國降伏御祈の爲め參籠御神樂を行はれて居る。

〔後宇多天皇の軫念〕 後宇多天皇、上皇と共に甚く宸襟を惱まされ、六月十八日には別勅を以て祇園北野兩社に祈禱を命じ、七月には五畿七道諸國の神社をして祈禱せしめられたやうである。弘安四年日記抄に

七月廿五日、異國御祈猶可被行（○以下缺文）、可注進之由藏人大輔仲兼示送之□□所歟（○以下缺文）と記し、又宮内省圖書寮所藏の文書に

異國御祈事（弘安四年七月廿五日）
念大切候也、口宣案候者□□切候也

異國御祈猶□□（可被）行候、宣下五畿七道事、先例可注給候也恐々
弘安四 七月廿五日

と見えて居る。この文書は前の日記抄に見えた仲兼の書狀であらうと認められる。この文書の後に、異國御祈事として寶龜五年以下祈禱の例が記

してある。これは先例を勘注した案文と思はれるが、惜いかな終りが缺けて結末が詳でない、勘仲記六月十八日の條に其外諸社諸寺護摩供被行種々御祈等、藤宰相奉行を見えてあるから、恐くは五畿七道の社寺に命じて祈禱せしめられたものと思はれる。二十日には勅使を遣して宸筆の御書を神功皇后の楯列御陵以下、山階(天智天皇)大内(宇多天皇)圓宗寺(後三條天皇)法性寺(後白河天皇)大原(後鳥羽天皇)金原(土御門天皇)淨金剛院法華堂(後嵯峨天皇)の八陵に獻せられた。

〔身を以て國難に代らせ給ふ〕 閏七月二日には伊勢太神宮に公卿勅使の發遣ありて宸筆の御願文を上られた、この御願文のうち身を以て國難に代らせ給ふべきことを御誓ひなされた、この事は從來龜山上皇の御祈願を傳へられて居るが、これは恐らく誤りであらうと思はれる、この説の根據は増鏡であるから、今全文を左に掲げて説明しやう。

〔増鏡〕(十二、老のなみ)弘安も四年になりぬ。夏頃後嵯峨院の姫宮かくれ給ぬ(○中略)その頃蒙古起るさかやいひて世の中さばきたちぬいろ／＼さまざまに恐しう開ゆれば、本院新院はあづまへ御下あるべし、内、春宮は京にわたらせ給ひて、東の武士ども上り候ふべしなご沙汰ありて、山々寺々御いのりかすしらす。伊勢の勅使に經任大納言まゐる。新院も八幡へ御幸なりて、西大寺の長老召されて眞讀の大般若經供養せらる。大神宮へ御願に、我が御代にしもかゝる亂出でて、誠にこの日本のそこななるべくは、御命をめすべきよし御手づから書かせ給ひける。大宮院いさあさましき事なりと、猶聞えさせ給ふぞこゝろにあらはれる。されども七月一日(閏脱カ)おびたゞしき大風吹きて異國の船六萬艘兵乗りて筑紫へよりたる、皆吹き破られぬれば、あるひは水に沈み、おのづから残れるもなく／＼本國へ歸りにけり、(○中略)さて爲氏の大納言伊勢の勅使にてのぼる道より申しおくりける。勅をしていのるしるしの神風によせる浪ぞかつくだけつる。

かくしつまりぬれば、京にも東にも御心どもおちめてたさかぎりなし。

右増鏡の文章を熟讀すれば、蒙古が來襲したので諸社諸寺の祈禱が行はれ、後宇多天皇は公卿勅使として大納言吉田經任を遣し親しく御祈願あらせられ、龜山上皇は八幡へ御幸大般若經を供養せられた。さて天皇太神宮への御願には宸筆を以て國難に代らせ給ふべきことを御誓ひなされたのを大宮院がこれを聞召して御諫になつた。閏七月一日神風が吹いて敵船覆没し我が軍大捷を得た。爲氏は經任の誤りで、經任が御願を終へて歸京の

途中大捷利の報知を得て喜びの餘り、勅使として伊勢太神宮に外寇を平げむことを祈り給ひしかば、神明も納受し給ひて靈驗をあらはし、ふき起る神風に襲ひ來れる蒙古の兵船は悉く破壊したと歌をよまれたといふ意味であらう。然るにこれを續本朝通鑑には新上皇幸八幡社留宿、祈蒙古之事、自作願文曰、當朕執政之時、有此變、今若我國爲異賊所掠、則神可先早奪我命、大宮女院聞而太悲之と記し、大日本史龜山天皇の本紀に、弘安中蒙古來寇帝深憂之、御書願文奉太神宮、祈以身代國難(増鏡)として、兩書共に龜山上皇御祈願とせられて居るのはいかなる理由であらうか試に推測して見れば、一には「太神宮への御願に」といふ文句が、新院も云々の次にあるから、文章が連續して龜山上皇の御願と認められたものであらう。されどもこの文章は「供養せらる」で一段落付いたもので、太神宮の御願は公卿勅使を受けたものと認むるのが穩當で、太神宮の上にてといふ字を入れて見るさよく意味が通ずる様に思ふ。二にはこの時龜山上皇の院政であらせられた時であるから、上皇の御願と考へたものであらうか、然し上皇の政治であらせられても、國家重大の事柄に關しては惣て詔勅宣旨にて行ふ例であるから、この御願も天皇の御願と認むべきであるに宸翰を染められたものであらう。殊に「我が御代にも」とあるのは、既に皇位を退き給へる上皇では申されないことであらうと思ふから、かた／＼この御願は後宇多天皇であらせられたものと認められる。三には大宮院は龜山上皇の御母儀で特に上皇を御寵愛せられて居るから諫められたものと認められたものであらうか、成る程龜山上皇は大宮院の御寵愛の方であるが、大宮院は又御孫に當らせらるゝ後宇多天皇をも深く寵愛せられたことが増鏡に見えて居るから、後宇多天皇と認めても差支ないと思はれる。四には「爲氏の大納言伊勢の勅使にて上る」とあるので、龜山上皇より院公卿勅使が別に立られて御願があつたものと認められたものであらうか、院公卿勅使が立つのも先例のあることであるから、爲氏を院公卿勅使と認めたのは尤もな解釋であるが、院公卿勅使は院司の中の公卿が勤むる例であるから、この時も院司が勤むべき筈である、然るに爲氏は此頃の日記類を調べても院司の中に列して居らぬ。即ち竹林院左府記(文永十一年二月七日)及び洞院家記に龜山院の院司公卿殿上人の名前が列記してあるが、爲氏の名は見當らぬのみならず、經任が却て院別當たることが見えて居る。されば爲氏が院公卿勅使として伊勢に使用するのには頗る疑問である。またこの増鏡の文章の連絡上から爲氏は經任と同一人でなければ前後照應しないから、爲氏の二字は誤であらうと信ずる。續史愚抄閏七月二日公卿勅使發遣の條の注に、或記前藤大納言爲氏、爲勅使向伊勢云々、案新院密被立歟と疑を存したが、本文には院公卿勅使は認めて居らぬ。

和田英松、佐藤球兩氏の増鏡詳解も「このまきの公卿勅使は上にも見えたるが如く中御門大納言經任なれば、爲氏の二字は誤なるべし」といはれて居る。經任と爲氏は草書にては最もよく似て居る上に、爲氏は定家の孫爲家の長子で歌を以て名高い人であるから、後人が轉寫の際誤つたものであらうと信ずる。又爲氏の歌集が宮内省圖書寮に藏せられてゐるので、これを閲覽したが、勅として祈る云々の歌は見當らない。固より歌集は其の人の歌が全部蒐集されてあるとは認められないから、歌集にないからといふて確證をばし難いが、また爲氏でない傍證をすることが出来やう。今回發見の勅仲記及び弘安四年日記抄等によりて考究するに、兩書とも外寇に關する大小事は殆ど網羅して、後宇多天皇の宸筆御書を山陵に獻せらるゝことを初めとして、龜山上皇が石清水、日吉、春日社等に御幸して異國降伏の御祈願を込めらるゝこと等まで委しく記されてゐるにもか、はらず、院公卿勅使を發遣したことが見えて居らぬ。これに反して天皇の公卿勅使發遣のことは兩書共に委しく記されてゐる。

〔弘安四年日記抄〕 六月九日、伊勢公卿勅使（異國御祈）可爲來月廿二日、中御門大納言經任卿可被勤仕云々

七月廿六日、伊勢公卿勅使日時定也、上卿右大臣殿（以下缺文）勅使召仰今日云々

閏七月二日、今曉寅刻行幸大政官依異國御祈、爲令發伊勢公卿勅使、任延久建久例依可有臨幸神祇官、也勅使中御門大納言經任卿、

十日、酉刻許公卿勅使（以下缺文）

十一日、公卿勅使中御門大納言經任卿參内、殿下同御參内云々、異國賊船去一日夜逢大風大暑漂沒、破損船濟々被打寄之由、鎮西飛脚一昨日歟到來之間、天下大慶之由謳歌者也、誠以不能左右公卿勅使有臨幸被發遣之希代之御願也、觀慮異他之子細宗廟無納受歟、而今出神力給雖未代猶感涙難抑事也

〔勅仲記〕 閏七月二日、乙丑、今曉天皇行幸官司廳、可被發遣伊勢公卿勅使日也蓋依蒙古征伐御祈也、日出之程着束帶（丸鞆帶）參官廳入東門昇殿上、以朝所東庇爲殿上、（立臺盤机辛櫃如例）神寶御覽、所役勤之、此間奉行職事藏人勘解由次官雅藤、每事催促、神寶辛櫃昇居南庭口之、土御門大納言定實着衣冠内々祇候、朝間有御浴殿事、宸筆宣命御清書程也、勅草御侍讀無祇候之儀、殿下大將殿御參、（幕下局纒、令懸纒給）入御々直廬、以西廂北面爲御直廬、假懸互御簾、于時殿下御參、先有神寶御覽、其儀朝所南御簾卷之、主上御座畫御座、南敷菅圓座殿下御座（圓座）東敷之、御座前南北行敷筵二枚、（中央有路、出御以前運置神寶於筵上、納辛櫃蓋、（内宮西筵上、外宮東筵上）予、顯相、親顯

六位成朝、季邦、敏基、仲經等運置之

一御劔（管上敷袋置之、副平緒、不付東西妻）

二御弓一張 御矢八筋 御鋒一柄 幣串四本

三御幣管一合 御鏡管一合 玉佩管一合 麻桶一口 線柱一本

不及臺 作花管一合（加火取玉） 金鳳管一合 唐錦一段 唐綾一段

錦蓋一流 已上置辛櫃蓋

四御裝束一襲 裏平裏納御衣管置辛櫃蓋

色目 御袍 半臂 下襲 柏 單衣 表袴 大口 帶 襪 扇 挿鞋 入帷

五彫馬 在踏板下敷辛櫃蓋

持參之時載辛櫃蓋置筵上、蓋撤却之

已上 内宮 御料

次 外宮 御料 御劔以下次第同内宮、但無御裝束、又銀鳳也

次 荒祭 宮 御料

師子形二頭安管蓋、置辛櫃蓋

各運置畢役人退、次出御（帛御裝束）着御圓座、殿下令候廣庇座給、頭中將經氏朝臣（局纒、壺胡篋、持弓）參進開幣管置御鏡管覽之（次内宮、次外宮）又覽荒祭宮師子形、次入御、本役人五位六位參進撤神寶給行事官等、次垂御簾、有神馬御覽、頭中將候毛付、府官人番長引之三匝了引出、次上卿右大臣殿被奏宣命草清書等、此次申使王御馬事、次勅使權大納言經任卿參入、候朝所東廂邊（殿上）次出御、先之局畫御座廂御簾、次奉行職事召勅使參御前給宸筆宣命奉勅語、次行幸神祇官、公卿列立正廳北軒下（西上北面立、右大將（平胡篋、蒔繪劍淺沓）參進進

立御輿西（東面北上左大將殿東）勅使大納言參進立大將列下、而此樣非也、權中納言立正廳北軒之間、大納言退入頗不可然由、民部卿伊賴難之進寄御輿（菴花）左右近將相隨（次將已下諸衛縫袍、壺胡籙、蒔繪劍、卷纒、考懸、淺沓、隨身壺垂袴、今日衛府人々或存警固由、或召仰□□不可然之由確執、奉行職事召仰以前不可然之體令存歟、今曉行幸無解陣上者警固條勿論之由人々大略一揆、左大將已令負平胡籙給御參上者可謂勿論）次出御（帛御裝束、無文御冠、同巡方玉御帶、白御革鞋）無反閑並園司給奏、大將被仰御綱、右將不渡、出御東門、於神祇官北門官人獻大麻歟、本官事不見及、路次行列、

左衛府 佐顯家

左兵衛府 權佐邦高

公卿 懸裾正笏步列

新宰相基顯朝臣 仁和寺三位顯名 別當親朝（平胡籙、門部壺垂袴、火長如例、看督長不召具之）

洞院中納言公守 權中納言師親（勅使）中御門大納言經任 左大將殿（兼忠）

右大將通基（兩大將二卿先御輿前）

次御輿

近將

左 經氏朝臣（藏人頭） 宗實朝臣 伊定朝臣 隆氏朝臣 資行朝臣 雅持朝臣 業顯

右 教經朝臣 顯資朝臣 宗嗣朝臣 季顯朝臣 長相朝臣 俊通朝臣 實躬朝臣 冬季朝臣 家親朝臣

關白殿下令步御後給（前驅御隨身候傍）

職事俊定仲兼雅藤等供奉

神祇官儀可尋記、無程事畢遷御、殿下御退出、予又退出、未斜勅使渡路次、精進屋中御門西洞陰（日來宿所）所令出立也、予中御門高倉邊見物

先前驅笠持二人

次家前驅二人（布衣半靴）

次殿上人（爲先下蔭）

頭中將經氏朝臣（束帶）

治部卿濟家朝臣（衣冠）

權右中辨經賴朝臣（布衣香帷）

少將冬季朝臣（束帶）

右衛門權佐定光（束帶）

兵部大輔經有（布衣）

左衛門佐顯家（束帶）

兵部權少輔通俊（束帶）

散位定房（童二人、雜色二人、各如木侍二人相副、小年仁也、左大辨宰相經長刺息）

次勅使

權大納言藤原經任卿（衣冠、召具御厩舍人、上皇御車前御隨身二人爲構、自大炊御門朱雀至二條京極邊取之）

後騎

右少辨爲方（平禮、布衣）

次檢非違使中原信季

次侍九人（交名可尋記、此處院北面輩四人被遣催）

次乘替二疋

次衣櫃一雙（在冠櫃）

次下家司左衛門府生爲重（二藍狩襖、上下郎等童等濟々焉召具）

附 錄

去夜終夜風雨太、今日天氣快晴神靈炳焉。至勅願成就之基也。自今夕至參宮日每夜可有御拜云々、是先例也、官方奉行左少辨信輔朝臣云々

十一日、甲戌、公卿勅使昨夕歸洛、今日參内、殿下御參内、仙洞評定

これによりて見れば、閏七月二日曉天に公卿勅使を發遣せられたが、この時は丁度九州にて賊船覆没し、我が將士が盛に活動して勝利を得た時であつた。日記抄に希代之御願觀慮異他之子細、宗廟無納受歎さあるは、蓋し増鏡にいふ身を以て國難に代らせ給ふの御願あらせられたものと推察し奉るべきが出来る。公卿勅使の歸京したのは十日で、翌十一日に參内して御願の趣を奉答して居る。太宰府より神風によりて大勝利を得た報告のあつたのは九日の事であるから、勅使の聞かれたのは途中の事であらう、増鏡に「爲氏(經任)の大納言伊勢の勅使にてのぼる道より申送りける、勅ましていのるしるしの神風によせる浪ぞかつくだけつる」とあると最もよく吻合して居る。また日記抄に今出神力給、雖未代猶感涙難抑事也といひ、勅仲記にも今度事神靈炳焉之至也、天下大慶何事可過之乎、匪直也事也、雖未代猶無止事也、といつて、神風は天皇御願の爲めてあると信じて居る。以上の事實によりて増鏡の太神宮への御願は後宇多天皇の御願で、龜山上皇の御願でないことが明かとなり、爲氏の二字は全く經任の誤であることが推斷されるのである。

〔報賽御祈〕 戦捷の後閏七月七日祈年祭奉幣使を遣はして宣命辭別に異國降伏の事を告げ、石清水八幡宮には權中納言二條經良を遣はし、二十一日内侍所に臨時御神樂を行はれた。弘安四年日記抄に依異國御祈御願也とあるから報賽の爲めであらう。二十五日龜山上皇の御沙汰として仁王經百部二百卷、金光明經百部四百卷、其他多くの經を書寫して日吉社に奉納して供養し、八月十一日には思圓上人に命じて石清水八幡宮寶前に於て三日間一切經を轉讀せしめ、上皇御幸あらせられて親しく之に臨み、大宮院新陽明門院も行啓あらせられた。弘安四年日記抄に

八月十日、自明日三ヶ日於八幡宮寶前、思圓上人催集諸僧、可有一切經轉讀、是異國退散報賽御祈也云々、仍駕尾長老相率弟子等今日被參向云々、僧供料可爲上皇御沙汰云々

□□(十一日カ)新院(○龜山院)今朝自龜山殿御幸八幡於(○以下缺文)其上思圓上人自今日於八幡可被轉讀一切經云々、兩女院(○大宮院、新陽明門院)自慶殿同御幸御同車云々、有免者、上卿右衛門督實冬卿、依八幡一切經會被行之

と見えて居る。勅仲記に八月十一日、甲辰、新院今日御幸八幡、可有御參籠云々、放生會可有御結緣云々、此條先規頗稀歎さあるので、龜山上皇

八幡御幸は思圓上人一切經會に臨むと共に放生會結緣を兼ねたもので、十六日の放生會に臨御あらせられ、十七日に御還幸遊ばされた。西大寺文書のうちに異國襲來祈禱注錄一卷ありて、奥書に弘安四年九月二十二日於河州教興寺阿一記之とありて、いかにも其當時の記録の様に見ゆるが、其の内容を讀むと、思圓上人が龜山院の信任を得て文永以來異國降伏の祈禱を行ひ、殊に弘安四年閏七月一日から八百餘人の僧侶を率ゐて七日七夜大法祕法を修し、靈驗の著しきことが頗る大仰に誇張して書かれてある。事實として疑ふべきものであらうと思つて居つたが、弘安日記抄と勅仲記とに比較すれば、祈禱の日時も修法讀經の種類も悉く相違して居るから、祈禱注錄は愈々當時のものでないことが確となつた。十七日龜山上皇石清水より還幸の後其日に賀茂社に御幸あらせられ、九月七日再び賀茂社に御幸御參籠あつて御百度詣の御願を始められた。勅仲記に鄭重無止事也といつてある。これはいづれも報賽御祈の爲めであらう。

五 弘安役の三

〔幕府防備の周密〕 幕府が建治元年四月元使を龍口に斬つて決斷を明にすると共に、九州御家人の京都大番役を停めて海岸防備に力を盡さしめ公武の公事を減省し儉約を行ひ、民力を休養して軍旅の充實を謀つたことは、鎌倉年代記に見えて居る。弘安四年日記抄によれば、元軍の入寇あるや六月廿八日御教書を下して鎮西九國及び因幡、伯耆、出雲、石見四國に限りて年貢の上納を停め、國衙領家本所一圓領の得分並に民間富有の仁の所有する米穀は、現在のまゝ點定し置かんことを命じて兵糧米の供給を謀つた。閏七月九日には非御家人を其指揮の下に置かんとし、諸社の職掌人本社を警固すべき事、及び諸國社寺領本所一圓地の庄官以下武家の下知に従て戰場に向ふべき事の兩條を宣下あられんことを奏請した。其の發表に先ちて九州の捷報京都に達したので、朝廷では猶豫したが、更に幕府の請により二十一日を以て九日の日付にて宣下があつた。この宣下は時機遅れたので實際には効力がなかつたが、幕府が意を用ふるこゝかに周密であつたかの一端が窺はれる。この事は三浦博士が既に精しく述べて居るからこゝには省くこゝとする。

〔北條時宗鶴岡八幡宮香取神社に祈願〕 時宗は戰國防備に力を盡すと共に深く國家の安危を憂ひ、神社佛寺に祈念して、敵國の降伏と國土の安泰とを祈つたのである。弘安四年七月二十一日佐々目僧正頼助をして鶴岡若宮本坊に於て一七日間尊星王護摩を修し、尋で閏七月三日鶴岡社下宮經所に於て五壇法を修し、不動は社務頼助、降三世は圓勇僧都、韋奈利頼辨法印、大威徳は承俊律師、金剛夜叉は隆成律師これを勤めて異國降

伏を祈つた。結願の十三日に九州捷報の早馬が到着したことが、鶴岡社務記録に見えて居る。又幕府は香取神社にも異國降伏の祈願を込め戦捷の後弘安五年八月一日香取の本地佛釋迦、十一面觀音地藏菩薩、藥師如來の四體を造立して報賽した。今千葉縣香取郡西村の觀福寺にその佛像が現存して居る。香取神社は幕府の祈願所で武の神であるから、これと同じ武の神鹿島神社に祈つたことは文永の例にて考へられる。其他幕府祈願所の諸社にも祈つたことは推測せられる。又朝廷と同じく伊勢太神宮へも祈念したことは文永の例によりて想像に難からぬところであるが、史料が見當らぬは遺憾である。

「時宗の信仰と頼助僧正」 時宗が自ら血を刺して金剛經、圓覺經、般若經等の大部の經卷を書寫して大休子元に命じて供養せしめ、國土安穩と異國降伏とを祈念したことが大休語録に見えて居る、其の文章をよむと字々血涌き、肉躍り鐵火進る勢ひで「一句一偈、一字一畫悉く化して神兵となる」句の如きは、眞に壯烈で時宗の熱烈なる意氣を窺ふことが出来る。鎌倉明王院文書によると、又眞言の秘法を修して異國降伏を祈つて居る。明王院文書は僧正頼助祈禱のことを其の弟子元瑜の書いたもので、弘安四年四月十一日から二十九日までの記事がある。祈の初めから用途の注進、壇所の壯嚴、毎日の祈禱の有様が精細に書かれてある。伏敵論には弘安四年異國御祈禱記として引かれてあるが、重要な點を省略してある。今其實を擧ぐれば四月二十日より將軍の御所を祈禱壇所として、僧正頼助大阿闍梨となり、伴僧十三口を以て秘法尊勝法を一七日間行ひて異國降伏の祈禱を致され、幕府よりは使を遣して之を奉行せしめ、頗る嚴重な御祈願であつた。初めこの法を行ふに就て頗る議論があつたが、時宗は斷然として時の社務頼助に命じたのである。時宗はまた岡屋僧正をして勝長壽院に不動法を修せしめ、日光法印をして日光山に五大尊護摩、猪熊法印をして明王院に五大尊護摩を修せしめて、敵國降伏を祈禱したのである、又時宗の書狀によれば六月中旬に異國降伏の祈禱を行つて居る。

異國降伏祈禱事、昨日滿散之由承候畢、歡悅無極候、猶可被懸御意候、一兩日之程必有來臨候、恐々謹言

六月十九日

時 宗

文中に昨日滿散であるから六月十八日に異國降伏祈禱が結願になつたことが明である。祈禱は禪宗では行はないからこの異國降伏の祈りは恐らく眞言の祈禱で一族の頼助僧正の修したものであらう。この文書は名古屋市關戸守彦氏所藏で、最新に黒板博士發見し、特に提供せられたのは深く感謝するところである。

從來時宗は新佛教の禪宗の興隆者として、固き禪宗の信者の如く解せられて居る、然し、時宗が新佛教のみならず舊佛教の天台眞言をも信仰したことが明王院文書、時宗の書狀でも明である、頼助は後に東寺長者となつた名高い僧であるが武藏守經時の息で、時宗とは従兄弟であるから、時宗の信仰がこの頼助より感得した點も或は深いであらうとも考へられる。古來より政治家たるもの神社を崇敬すると共に新舊佛法をも尊信して信仰は偏狹でない。時宗の父時頼は關蹊道隆に従て出家受戒して居るが、太神宮に納めた祈願文によりて見ると全く舊佛教の信仰者である。偉大なる時宗が新佛教の禪宗を信すると共に、又舊佛教の天台眞言を捨てないのは固よりであらう。

以上述べた如く後宇多天皇身を以て國難に代らせ給ひ、龜山上皇石清水日吉社等に御參籠して祈られ、また嚴重な儉約の制符を下して牢固たる御決心を示し給ひ、幕府の執權北條時宗は血寫經をまで供養して勇猛な大英斷を示したので、國民感激し、將卒勇武を振ひて終に十餘萬の大軍を擊破して、國家的武士道を發揮するこゝを得たのであらう。(大正六、十一、四稿)

支那時報叢書第五輯

蒙古來襲と一山國師の歸化

昭和三年六月二十日印刷
昭和三年六月二十五日發行

不許
複製

定價金壹圓
郵稅四錢

著作人

東京市麴町區下六番町五番地
水野梅曉

印刷人

東京市芝區柴井町十三番地
上田二三藏

印刷所

東京市芝區柴井町十三番地
上田印刷所

發行所

東京市麴町區下六番町五番地
支那時報社

發賣元

東京市麻布區飯倉町五丁目四十四番地
森江本店
電話青山一三五九番
振替東京三七二番

水野梅曉著

發行所

支那時報社

東京市麹町區下六番町五番地

電話九段四九六番
振替東京六八七五一番

支那佛教近世史の研究

菊版九十頁
定價七十錢
郵稅四錢

目次

- 一、近世の支那佛教研究に就て
- 二、支那佛教史の概観
- 三、支那佛教十宗派大観
- 四、宋末に於ける禪門獨歩時代
- 五、元明二朝に於ける日支關係
- 六、清朝の龍興と佛教の奨励及取締
- 七、康熙帝の崇佛と雍正帝の學佛
- 八、乾隆以後清朝末期の佛教
- 九、民國の建設と佛教の再興
- 十、民國以來出版された佛書と雜誌
- 十一、各種佛教團と其行事
- 十二、佛教徒の經營せる社會事業
- 十三、結論

著者が多年の支那生活より得たる、實際上の蘊畜を發表せるものにして、從來最も不明とせられつゝありし、清朝の佛教及民國の佛教事情を概観するには、極めて簡明にして便利なるものであるが、而も其記述の特色は著者獨特の識見を以て實際問題を取扱ひたる點にあるを以て、支那佛教の近世史を知らんとするの士は、必讀すべき好參考書であると信ずる。

水野梅曉著

發行所

支那時報社

東京市麹町區下六番町五番地

電話九段四九六番
振替東京六八七五一番

支那佛教の現状に就て

菊版一〇〇頁
定價八拾錢
郵稅四錢

目次

總序

- 第一 教育機關
 - 第二 研究團體
 - 第三 修養團體
 - 第四 教化團體及び社會事業
 - 第五 全支佛教徒の聯合運動
 - 第六 中華佛教より世界佛教へ
- 編輯を終りたる著者より

民國建設以來、全支國民の思想的變化に伴ひ、支那佛教にも或る意味での歴史的復活期を劃さんとしつゝある。斯くの如き機運に際し、支那各地の佛教徒が社會的に如何なる運動をなしつゝあるかを知らんが爲め、教育機關及び教化團體、社會事業、修養團體等の各項に分ちて、正確なる材料に基き詳細に亘つて説述したるものなれば、支那佛教界の現状を知らんが爲めには、最も有力なる參考資料なりと信ず。

水野梅曉 著

發行所 支那時報社

東京市麹町區下六番町五
電話九段四九六番
東京銀驛六八七五一番

支那に於ける新宗教の設立運動

菊版九十頁
定價壹圓
郵稅四錢

目次

- 第一章 救世新教設立前後の狀況
- 第二章 救世新教の教綱
- 第三章 救世新教の教法
- 第四章 救世新教の教義
- 第五章 救世新教と悟善社

支那の識者は全く現状に向つて匙を投げた結果、人心を根本より改新する方法として單一なる既成宗教を超出して儒教、佛教、基督教、回教、道教等の各宗の教徒が共同して「救世新教」なる一の新宗教を設立せんとするに至つた事は大に注目し値すべき事實であるが、本書は該運動の詳細なる顛末を記述したるものなれば、不安動搖を極める支那精神界の現状を知るには絶好の良書である。

水野梅曉 著

發行所 支那時報社

東京市麹町區下六番町五番地
電話九段四九六番
振替東京六八七五一番

西藏佛教及び英藏關係

菊版一二四頁
定價壹圓
郵稅四錢

目次

- 一、西藏佛教略史
 - 第一編 總論
 - 第二編 史略
- 二、西藏最近六十年史
 - 第一章 英藏關係の發生
 - 第二章 英國武力政策を用ゆ
 - 第三章 英露支の關係紛糾す
 - 第四章 西藏境界に關する中英の爭持
- 三、西藏關係の中英條約及び英露其他の交換公文

現代支那の研究上より見て西藏對英國の關係は、恰外蒙對赤露の關係と同様なる、最も重大なる意義を有するものなれば、一般に其現状を知らしめんと欲して江西心遠大學教授李翊灼氏の「西藏佛教略史」及び甘肅督軍特派遣藏專使朱繡氏の「西藏最近六十年史」の二書を全譯して西藏佛教史及び最近英藏關係を概觀すると共に、英支條約の正文より「英藏關係條文」を抜萃して正確なる條約關係の規定を知るに便ならしめたるものなれば、本書に依りて西藏問題が如何なる情況の下に置かれ、英支外交の上に西藏の境界問題が如何に複雑を極めて居るかを窺知する爲めには無二の好資料である。

日本佛教徒訪華要錄

水野校曉編

愈々發賣

大正十四年秋開催せられたる東亞佛教大會の答禮を兼ねて日本佛教聯合會の企劃せる中華佛教視察團は有史以來未曾有の盛舉にして、歴年混沌たる動亂の渦中にある中華佛教同胞は政治、外交、經濟關係を超越したる至純なる宗教的熱情より歓迎の誠意を披瀝せられ、團員たる各宗大學教授及び各宗本山重役諸師も感激裡に遺憾なく中華佛教の現状を視察するを得たるが、本書は其感激の所産である。而して之を旅行記、團員視察感想集の二編に分ち、旅行記に於ては南北支那の著名なる名所舊蹟を初めとして、各宗教關係より一般社會關係に亘りて、視察見學したる狀況と歓迎せられたる顛末とを記述し、視察感想集に於ては團員各自専門的の立場より、中華佛教の過去現在及び將來を叙述したるものなれば、支那佛教の研究者は勿論、苟くも支那を研究せんとするの士に取りては極めて貴重なる資料として必讀すべき文字である。

定價

金參圓也

(送料拾六錢)

發賣所

支那

時報社

東京市麹町區下六番町五番地

電話九段四九六番
振替東京六八七五一番

日本佛教聯合會編纂

發行所 佛教聯合會

東京市芝區新堀町三十六番地

東亞佛教大會記要

定價

金五圓也

送日本内地貳拾六錢
朝鮮滿洲六拾五錢
樺太臺灣五拾錢
料中華民國九拾錢

新刊

本書は一昨秋東京に於て開催せられたる東亞佛教大會を永遠に記念せんが爲めに、大會に關係を有する諸事項は事の細大を問はず、全部之れを網羅し前記、本記、後記、補記等に分ちて編輯したるものにして、日本佛教徒としては全く有史以來未曾有の企劃なりしを以て物と人との總動員を行ふが如き態度を示し、物の方面に於ては、教義研究資料の整理を謀りたるは勿論、佛教と文化、佛教と藝術に到る範圍に迄も旁及し、人の方面に於ては、苟くも我佛教界と交渉を有する人物は、其の職の教内にあると教外にあるとを問はず、一致協力して直接及び間接に盡力されたるを見れば、人に對しても、完全に總動員が行はれたる事實を窺知するに足るものがある。されば、本書は、將に世界的に活躍を試んとする東亞佛教徒の劃期的運動の新記録なると同時に、其の教義研究部會の報告は日華兩國佛教學界の權威が各専門的方面に亘る研究の結果を發表せられたるものなれば、東亞佛教の前途を知らんとするもの、及び一般佛學研究者には好箇の参考書なりと信するものである。

月刊 支那時報

發行所

支那時報社

東京市麹町區下六番町五番地

總替東京六八七五番

定價

普通(一冊) 五拾錢(郵稅共)
六ヶ月、六冊) 貳圓九拾錢
壹年(十二冊) 五圓七拾錢

我國の國民生活と最も緊密なる關係を有する支那問題は、何人も常識として之を理解するの必要がある。然れども支那自體の變化甚しき爲、其真相を知悉すること困難なるを以て、之に指を染むる人に乏しきは現下の一大缺陷である。

故に我社は其缺陷を補はんと欲して、複雑なる支那の事情を分類して、政治、外交、財政、經濟、交通、教育、宗教、思想、人物其他各般の事象に對し、確實なる資料に依りて編輯せる本邦唯一の權威である。

而して其内容は毎號支那の名流より寄書せらるゝ論文を掲げ、又内外の支那に關する言論界の論調趨同等を掲載するは勿論、水野社長は刻々に變化せんとする政情其他に關して明快なる時評を執筆して懇切なる解説を下し、一見して支那問題の真相に觸るゝ事を得るものなるが、更に號を逐ふて之を累積すれば、直に有力なる資料の寶庫となり、史實ともなるものであつて、單に其時限りの問題を取扱ふものに非らざるは、本誌同人の潛に誇りとする所である。

池 C 13

